死に至る病

鬱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死に至る病

【Nコード】

N4400H

【作者名】

鬱

【あらすじ】

* 完結しました* 淡白で無愛想で女顔で頭の悪いところがコンプレックスな僕こと姫野優一。コンプレックスといいながらも決して直そうとかは思わない。まあ話は毎日平凡静かに暮らしていた僕はある日、クラスメイトに犯されました。わーい。お姉ちゃんに相談したらお姉ちゃんにも犯されました。わーお。心身ともに絶望の僕はフライングヒューマノイドを探す為に……ではなく、死のうと屋上に立つ。

一夜（前書き）

ヤンデレです。通常表示になってますがエロもでます。グロもでる
かもしれない。ご了承くださいませ。

一夜

僕は学校の屋上に立っていた。屋上といっても女性と密会をするためにきたわけではない。不良に呼び出しを喰らったわけでもない。現実逃避の為に空を眺めに来たわけでもない。

死のうと思つた。

僕はフェンスを乗り越え、頼りないコンクリートの上に立つ。

ちらりと下を眺める。吹き上げる風は僕の頬を撫で、瞳に映る映像は手足を麻痺させる。

高い。とてつもなく高い。

それもそうだ。ここは六階。人が死ぬにはピッタリの高さ。

今掴んでいるフェンスを離れたらきつと僕は物理の法則に従い、位置エネルギーを運動エネルギーに変換することになるだろう。

そしてそれは即ち、死。この世からの決別。

人生に一度しか許されないとされる死を僕は体験することになるのか。

「お前さー、さつきから三十分そうしてるけどいつ、飛び降りるんだよ。いい加減早く死ねよ」

慈悲も優しさもない声に僕は驚き、振り向く。暴力的かつ男勝りな言葉とは裏腹にその言葉の主は女性だった。

髪をショートに切りそろえた背の高い女性が鋭い目で僕を見ている。片手にはホットレモンと書かれたミニボトル。

「お前、アレだろ。姫野優一………だっけ」

「君は誰？」

彼女はにっこりと微笑むと僕にボトルの中身をぶちまけた。

熱い熱い熱い熱い熱い………こともない？

「おっ、手」

「えっ？」

フェンスから手が離れ。

「うわああああ、落ちる落ちる落ちるう！」

僕の体は風に煽られバランスを崩す。

フラフープが下手な人みたいだなダンスを踊り、何とか体制を建て直す。そしてフェンスにしっかりとしがみついた。

しがみつけるものは何でもしがみつく。そんな十六歳でございます。

「何だよ、結局死なないのかよ。折角人が死ぬところ見られると思っただのに」

「地獄も天国も満員とのことでした」

そう僕は語り、三角座りで彼女の横に腰掛けた。日陰でなかなか快適である。

「で、ナナシさん」

「何なんだ、その“ナナシ”って」

「単純に名前を知らないので仮称ということだ」

「あつそ。まあいいや。で何？」

「いや、それは僕が聞きたいが山の如しでした」

死んだらどうする、と叫んだ僕を彼女はこっちに来いと呼びつけたのだ。常に強い者の味方である僕は内心ラーゲリ送りにしてやるうかと思いつながらニコニコと微笑んでそれに従った、かは定かではない。

彼女は何で呼んだんだっけ、となかなか不条理なことを言い、こめかみを指で押さえた。

「ああ、そうだ。何で死のうと思ったのか聞きたくな。人を死に追いやるほどの絶望っての知りたいわけよ。わかるか、この感覚」

「できれば墓まで持っていきたいクラスの絶望なのでお答えできません」

「どうせアレだろ。苛められてるとか、親にゲーム取り上げられたとか、フィギュアっの？ あれ捨てられたとかそんなのだろ」

「僕はどこかの引き籠もりでオタクで卑屈な少年か？」

「まあ、いいから話してみろよ。全力で笑ってやるから」
よし、殺そう。殺して命を絶とう。

不意に彼女は欠伸をかみ殺し、はずみといった感じでペットボトルを握り潰した。

蓋が開いていれば誰にでもできる芸当である。しかし、彼女は蓋の閉じてる状態でそれを行った。事前にほうれん草を口に使っていたのか。

故に僕が取る作業はひとつ。

「昔々あるところに……」

無駄死には嫌だったのです。そんな十六歳。

昔々あるところに男の子がいました。彼は背が低く、女顔なことをコンプレックスに生きておりました。

可愛いねと言われれば、チビだからですかと内心うそぶく卑屈な少年です。

彼は無口で友達も作らなかつたのですが、仲良くしてくれる女子が一人だけおりました。少し変わった女性です。

たまに少年の匂いに変だという匂いフェチな部分はあれど裏表のない素晴らしい女性です。

頭がいい彼女に少年はきつと卑屈になったに違いありません。何故なら彼は勉強ができる方ではないからです。

「そのくだりはいらねえな」

まあ、その彼女にいつも勉強を教えてもらっていた少年は少しばかり心を許し始めていました。休日は図書館で勉強をし合う、それくらい仲が良くなりました。

ある日、少年は少女の家で勉強会をしないかと言われました。しかも少女は一人暮らしというではありませんか。顔を赤くする少女に少年はどうしたらいいか迷いました。

結局答えがでないまま、その日はやってきました。少年は言われるがままに高級そうなマンションの一室にご招待されました。

少年は渋々といった感じで家に上がり、紅茶とケーキをご馳走になりました。

そして軽く談笑していた時、それは起こりました。

少年は何だか気分が悪くなったのです。脂汗が滲み出て、喉が枯れる。

不思議です。飲み物を飲んだばかりだというのに喉が枯れるのですから、それは魚が陸で泳いでいるような不思議さです。

「で??」

……少年は当然ながら少女に声をかけました。かけようとしました。しかし、喉から声が出ない。体も動かない。

少女はそんな少年を眺めて微笑みました。

わけのわからないうちに少女はビデオカメラを設置しました。

そして裸になり、少年を犯したのです。

「ちよちよちよちよと待てよオイ。唐突過ぎるぞっ！ お前の妄想とかじゃないよな!??」

寧ろそうであって欲しいという類の問いかけ。

僕は力なく笑う。その顔を見てナナシさんは「うわー、やべえ。

予想外に重い話聞いちゃったなあ」という顔をした。

「……まあ、あれだ。男冥利に尽きるって奴だ。それだけで自殺するっていうなら全国の男が羨ましがって自殺するぞ」

僕はいう。青空を眺めながら独白のように。

「この話には続きがあるので。少年はビデオで脅され、何度も関係を迫られたのです」

ある時はデパートのトイレ、ある時は学校、ある時は外で。

ナナシさんはどこから出したのかペットボトルのお茶に口を付け、ばつが悪そうにいう。

「……………そ、それだけ好かれてるってことじゃねえの。辛かったら警察という手もある。もしくはそういうもんだって割り切ればいいんじゃないねえか?」

僕は物語を紡ぐ。暗く冷たい床を眺めながら。

少年は結構へこみました。それはもう缶蹴りに使われた空き缶のようにべっこべこです。

そんな少年の心を機敏に察知した人がありました。

彼女は少年の双子の姉です。同じ時を刻んできたというのに不公平にも少女は健やかかつ賢く育ちました。

親が海外で仕事をしていることもあつて姉弟は一軒家に二人だけで暮らしておりました。

そして姉は甲斐甲斐しく弟の世話を焼きたがるちよつと困った姉だったのです。

「お前の姉ちゃんは有名人だな。確かに」

そんな姉はどうしたのか、と少年に聞きました。へこんでいた少年はその優しさの前で、全てを洗いざらいぶちまけました。

強姦されて、貞操を散らし、ずっと暴行紛いの性行為を強要されている、と。

「なんかちよつといい話に行きそうだな」

しかし、姉は笑って首を振りました。少年は訳が分からず聞きませんでした。

なんで笑っているのかと。なんで私のほうが先だったというのか。すると姉は少年に一本のビデオを渡しました。

ビデオには白いラベルで数年前の年号と月日が記されていました。少年は何か引つかかるものを感じながらも、そのテープを再生しました。

液晶には一人の幼い面影の残る少年自身。少年は室内の明かりにも目を開けることなく死んだように眠り続けています。

そこにあどけなさが少し残る少年の姉が出てきました。表情はシヤブ中が三十六時間ぶりにクスリを打ったかのように光悦としていて、瞳孔が開ききっています。

少年の姉は少年の服を剥ぎ取ると

「もういい！ もう聞きたくない！」

ナナシさんは耳を押さえて僕に強く言いかける。

「ちなみにビデオは定期的に保存されていたらしく、つい最近の映像まであったそうです。それを見せたことでどこかタガの外れた姉は少年を毎日犯すようになりました。少年は外でも家でも毎日暴行の日々を送っていたのです」

ちなみに最近のはビデオテープではなくデジタルハイビジョンでした。技術は日進月歩だなあと僕。

「イカれてやがる！」

何を分かりきった事を言うのだろうか、この人は。

だから死のうとしたのに。

「で、姉とその少女が先ほどぼったり出会ってしまい、血みどろの展開になりかけ、少年は心を患って自殺しようと思いました」

「さっきのカッターがどうのって騒ぎはそれが……」

ため息をついてナナシさんは空を見上げた。僕もつられて眺める。コバルトブルーの空に綿のような雲がゆっくりと風に流されていた。た。

「なんか、お前が死にたい気持ちがよく分かったよ。っていうかよ、今日までもったな。あたしならそんなビデオ見せられた瞬間に死んでる」

彼女は僕を遠まわしにイカれてると言っていた。寧ろ、こうなっ
てイカれていない方が僕としてはおかしいと思うのだけだ。

「なあ、姫野」

ナナシさんは空を眺めたまま僕に語りかける。僕は既に床を眺めていたので、首を横に向けてナナシさんの顔を盗み見る体勢になった。

彼女の目はどこか遠くあって、顔は憂いの表情に覆われていた。

「ん？」

「どんな気持ちだ。そういう愛って」

「……押し付けられるものって何も生まないなあって思った。盗聴盗撮ストーキングされてもその人のこと好きになつたりしないのと同じだよ。そして僕はそんなことされても、そう思わなかった」

「なんか、大人だな」

「つい最近までは子供だったんだけどね」

「いや、寧ろそのままでありたかった。」

大人が子供を羨む気持ちが少し分かった気がする。

イヤでも賢くなってしまった大人は見えてしまう不安や絶望に耳と目を閉じ口をつぐんでいたのだ。子供のように無知なままでいたいと願う。

子供になれば明日の不安や恐怖に悩まされなくていいから。

ナナシさんは立ち上がり、スカートをはたきながら言った。

「うん、お前は死んだ方がいいな。冗談抜きに」

冗談でも死んだ方がいいと言うような人とはあまり友達になりたいとは思わないのだけど、その意見には賛成だ。

僕が内心そう思っていると彼女は僕に視線を合わせた。

「多分、お前が生きてたらろくな事にならない。絶対にこれから二人は血みどろの展開になる。それだけじゃねえ、その二人から逃れてもお前はどこかで別の狂った何かに追われる人生を送ると思う」

「希望のない絶望は確定事項ですか……」

「こつ見えてもあたしは頭がいいんだ」

授業をサボって、屋上で日向ぼっこ洒落込んでる人がそんなことをいってもどこにも説得力はない。

「なんか僕は思ってます。もうずっとこのままでいいかなくて。死ぬ勇氣すらない、自分から止めることもできない。だったら僕はずっとこのままでいい」

「……はあ、ウジウジしてんのな。まあ、わからなくもないけどよ、結局そこには何も無いんじゃないの？」

「僕は……僕はどうすべきでしょうか」

「うーん、あたしから言えることはどちらか選べってことだな。ど

「つちか一人に絞れば今よりはずっと楽だと思っぞ」

「そう……なんですかね」

彼女はうーんと小さく唸りながら体をほぐす。パキパキと小気味いい音がした。

「片方がお前を刺し殺してもやだろ？ 殺し合いになってもやだろ？ だったら少しでも穏便に済む道を模索しろよ。最悪の中の最良を選択するんだ。それがお前の唯一の救いになる」

彼女は少し微笑み僕に手を振った。屋上の重く建てつけの悪い扉が甲高い悲鳴を上げて開き、閉じられた。

僕は一体全体どうすればいいのだろうか。

ナナシさんは選べという。どちらかを選べと。

どちらかに犯されるほうがいいのかと。

どっちも嫌だなあ、と僕。

確かに姉さんは美人だし、おしとやかだ。柳川さんは一緒にいて飽きない。

でもそれが侵されたいかどうかには繋がりはない。

できればこのまま星になりたい。このままどこか遠くへ行きたい。

そうか、遠くに逃げればいいのか。

名前を捨てて、故郷を捨てて、遠くで暮らそう。

見せ掛けの希望に僕は立ち上がり、扉に手をかけた……がしかし、そのドアノブは自動で捻られ僕側に開く

僕は扉を避け、ことの主を伺った。

姉さんだった。

二夜

黒く長い髪をなびかせて、背の高い彼女は僕へと詰め寄る。僕は身を引かせてそれを避ける。

彼女の手は空を掴み、微笑んでいた顔は悲壮に染まった。

「ごめんなさい。私、優一さんの前であんなに取り乱すなんて……。どうかしていました」

頬は仄かに赤くなり、目に貯められた雫は今にも零れ落ちそうだが、僕はそれを見て、気まづくなり動きが止まる。

そんな僕に彼女は力強く抱きつき、耳元で何度もごめんなさいと呟いた。

僕は抱きつかれた衝撃でバランスを崩し、床に倒れて頭をぶつけた。抱き締める力が予想以上に強くて呼吸がしづらい。姉さんの髪の毛が顔にまとわりつく。

内心、どいてくれないかなあと思ったり。

「いや、もういいよ。姉さん、よく僕がここにいるってわかったね」

「優一さんのことですから、何でも分かります」

「……………そっか」

もう盗聴器や発信機の類は全部外したと思ったけど、まだどこかにあるらしい。うーむ、疑心暗鬼に陥りそうだ。

まさかとは思うが体内に埋め込まれたりとかしたりして。

一応は落ち着いたらしい姉さんの手を振り解こうと、僕は彼女の手を掴む。しかし、彼女の手は石のように硬く動かない。

どうしたものかとぼうつとしていると、姉さんの体温がどんどん高くなるのが分かった。鼓動は強く高鳴り、吐息は熱い。女性特有の香りが濃くなる。

つまりは、僕に……………欲情し始めているようだ。

「ああ……………優一さん優一さん優一さん」

僕の背中に回された姉さんの手は艶かしく蠢き、耳に吐息が掛る。

僕の足に彼女の足が絡まり、姉さんの腰は何度も僕の太ももに擦り付けられる。

一度姉さんを、体から離し僕は額の汗を拭った。

「一応、ここ学校だし……今はだめだよ」

「でもお姉ちゃん、凄く優一さんが“欲しい”です」

そういつて僕の目を欲情した瞳が見つめる。ゴクリと生唾を飲む音。

「家に帰ったら……何でも、いうこと、聞くからさ」

「本当ですか!？」

僕は仕方がなく頷く。姉さんはぎらついていた瞳をキラキラと輝かせて笑った。

「メイド服もスク水も赤ちゃんプレイも何でもありですか？」

「……最後のは簡便してほしいなあ」

「今から準備しないとイケませんね! ああ、夕飯は精の付くものにしないと!」

僕のささやかな願いを無視して姉さんは喜びの声を上げる。僕はきつと明日は学校が休みになるのだろうと思った。

肉体及び精神的疲労で。

「じゃあ今日はおとなしくしてくれるかな」

「はい、もちろんです!」

快活な声を上げて姉さんはニコニコと笑う。その笑みは弟と倒錯的なプレイができるから、ということをお忘れれば凄く魅力的なのかもしれない。

姉さんはこれでもなかなか美人さんなのだ。

何を間違ったか弟に欲情するという欠点があるが、それさえ無ければ文武両道、みんなに慕われている美少女。

神様は何を間違ったのかと天を睨んでいると姉さんはいっこりと微笑み、僕に口付けをした。

ジュルジュルとはしたくない音を立てて僕の唾液を全て吸い込み、飲み込む。そして次に自分の口に唾液を貯めて、僕の喉に流し込む

だ。

姉さんの口はしっかりと隙間なく僕の口を塞いでいるので、仕方なく僕は姉さんの唾液をゴクゴクと飲み干す。その様子をうっとりとした表情で姉さんは眺めた。

ああ、きつとこれはマーキングなのだ。自分のものだという印をつけて彼女は悦んでいる。

互いの口は離れ、姉さんは自分の舌で唇についた唾液を拭いた。

「ぶはっ」

「ふふふふ、これくらいはノーカンですよ。さあ手を繋いで一緒に行きましょう」

姉さんは僕の片手に自分の指を絡めて、僕を引っ張る。汗ばんでいて熱い。

「いや、今日はまださっきのショックが抜けきってないのですよ。だからまだ少しここにしていることにする」

「そう……ですか。では私も一緒に……といたいたいのには山々なんですけど、次の時間は小テストがあるので一緒にいけません……」

姉さんは少し悲しそうに俯いた。きつと姉さんならそんな小テストくらい無視しても今後にまったく支障はないのだからうけど、根が完ぺき主義者なのでそれは許されないことなのだろう。

どれくらい姉さんが完ぺき主義者かというところ、教科書が配られた初日に全てのページを暗記するレベルだ。意味があるのか甚だ疑問なのだが姉さん曰く、そうすることで安心できるらしい。

自分に厳しく他人に甘い姉さんは左手の時計をちらりと眺め、寂しそうに手を振った。そしてもと来た出口へと歩いていった。

この屋上には二つの入り口がある、東口と西口だ。姉さんが出て行ったのは東口。

僕の背後にいる彼女が来たのは西口。少し変わったアクセントの言葉が僕に向けられる。

「手痛かったんだよ」

「……うん、ごめん」

僕はそういいながら振り向く。腰まで伸びた金色に煌くウェーブの掛った髪の毛、長いまつげと青い瞳。

彼女は自分の手の包帯を捲くって僕に見せる。母方が外国の人らしく、肌が白い。その白い肌に薄っすらと猫が引つかいたような赤い線が一本走っていた。

柳川月は何故か裸足だった。彼女は真っ直ぐ僕に近寄ると鼻をスンスンと動かした。

「今日も変な臭いがするよ。とつても変な臭い」

「……人の臭いを嗅がないでいただきたい」

柳川月は簡潔に言えば変人だった。本を逆さに読んだり、ノート
の文字は全て鏡文字にしたり、お腹が減ったという理由で堂々と授業中に食事を始めるような子だ。

しかし、異様なカリスマ性、超能力じみた直観力と洞察力があり主に文科系の人間に絶大な影響力を持っている。

知能も恐ろしいほど高いらしく、教師の連中も直接文句をいえないときている。

彼女はフェンスを一度伺い、カタカタとタイプを刻むように忙しなく手を動かしながら首を傾けた。

「優一、死のうとしたんだ」

心臓が大きく跳ねた。

彼女はペタペタとフェンスに近づき、網目に指をかける。

「なんで、わか」

「だって、フェンスに誰かが上った跡付いてる。それに穴が広がってるモン。広がった穴の左右の幅が優一の足と同じくらいだよ。フェンスの向こうにも優一の足跡がある」

爬虫類のような丸い瞳が僕を射抜く。

彼女は僕に近寄り、唇を指でなぞる。ツンと鉄さびのような臭いに、彼女は僕の唇に自分の傷口の血を塗っているのだと分かった。血化粧。

「何で泣きそうなの？」

「僕は……僕は辛い。もう“こういうこと”は嫌です」

彼女の表情は変わることなく、僕の尻を撫で回す。もう片方の手で僕の頬を撫でた。

「だから逃げようとしてるんだ。あたしのこと嫌いになったの？」

「……僕を性的な対象としてみるならもうやめて欲しいのです。別の誰かとしてください」

「優一、あたしいつもいってるよ。敬語じゃなくていいって」

「僕の話しを聞いて下さい！僕はもう、こういうの嫌です」

彼女は両手で僕の顔を掴む。そして額を合わせた。青い瞳が僕を逃すことなくじっと見つめている。

どこに視線を向かわそうともその視線から逃れることができない。「聞いてないのは優一も一緒だよ。敬語はダメ。わかった？」

「じゃあ僕のいうことも聞いてよ。もうそういうことはしないって」

「イヤ」

「イヤって……」

彼女は僕を両手を離すと携帯電話でどこかに電話をかけた。

かけるだけで、電話には耳を当てていない。「画面すら見ない」。

ただその瞳は僕を見ていた。

「じゃあ、あたしがいいっていったら優一。お姉さんにはセックスさせるンでしょ？それってずるいよ」

「……姉さんにも断るよ」

「無理だよ。優一もそれ、分かってる」

彼女がその言葉を言い終わると同時に、どこかで何かが爆発した。小さな衝撃波が僕の体を突き抜け、辺りに火災報知器のけたたましい音が鳴り響く。

僕は偶然を信じない。故に導き出される犯人の解は目の前の人間を指していた。

「ルナ、何をしたんだ！」

「どっかの教室が吹き飛んだだけだよ。……ランダムで選んだけど、

家庭科室みたい。今、無人だよ」

全身からさつと血の気が引く。明確な脅し。

僕が彼女を拒否すればどこかで誰かが死ぬという脅し。

僕には選択をする権利すらない。

「逃げるンならもつと酷いよ。人が死ぬよ。きつと沢山沢山」

柳川月は僕の頬をべろりと舐め、見せ付けるように舌を艶かしく動かした。何かを想像させる卑猥な動きに僕は目をそらす。

「何で……何で僕なんだ！ 僕じゃなくてもいいじゃないか！」

ルナは舌を止めて首を傾げる。

「好きだからだよ。好きじゃなかったらこんなことしないよ」

「……僕の何が好きだっていうんだ」

性的な意味か。それ以外はただの肉か。僕の気持ちや心は無視か。彼女は表情を変えずに首を横に向けたまま言葉を発する。まるでそれは人形のように。

「違うよ。優一だけがあたしを特別視しなかった。教師やクラスメイトはみんなあたしを変な目でみたり変わってるっていうけど、優一は普通に接してくれたよ。あたしの言葉に困ったりしない、ちゃんと合わせてくれるもん。それがあたしにとってはカルチャーショックだったんだ。それで気が付いたら好きになってたんだよ」

「……………」

「わかった？ だから好きなんだ」

「好きだから変な薬使って僕を犯すの？」

「そうだよ。だってあたしのことだけ見て欲しいもん」

「そんなのおかしいよっ！ おかしいよ……」

「意見の相違だよ。でもあたしも最初は緊張したなあ。ちゃんと上手いいくか心配だったし、優一に嫌われると思ってたもん。でも優一は次の日から……ちよつときこちなくて目の下に泣いた跡ができてたけど、普通に接してくれた。誰かに言ったりしてなかった。その普段と喘いでいる時のギャップがあたしを興奮させるんだ」

彼女は珍しく瞬きをした。語ることに指は忙しなく動く。ルナの

表情は常に微笑に固定されていた。

「今でもビデオ見てマスターベーションするんだよ。優一の可愛い声聞いて“する”とゾクゾクして何度も達するんだよ。あー今も、その顔を壊したいなあ」

僕は彼女の舐めまわすような視線に後ずさりする。

いつの間にか彼女の手には注射器が握られていた。

彼女に犯されている時のことがフラッシュバックして僕はぞっとした。鳥肌が全身を穿つ。

快感に殺されるという苦痛。自分の意識を全て快感に変換されるという苦痛。

もう、あれは、イヤだ。

「凄くいい顔になってるよ。グズグズの恐怖と快感が入り混じった綺麗な顔だよ。優一、いつも無表情だから凄く嬉しいなあ」

「やめて……下さい」

「あたしは悪魔みたいに悪くないから選ばせて上げる。考える時間を与えたほうが神様に近づけるもん」

「選ば……せる？」

「うん。あたしにこのまま犯されると、この学校の人間全て消すのとどっちがいい？」

やはりそこに選択肢はなかった。彼女はいつもよりも頬の歪みを少しだけ濃くして微笑む。

僕は、手を差し出した。

彼女がアルコールの脱脂綿で血管を消毒する。

「すぐに天国に連れて行ってあげるよ」

彼女はそういい、鳥がついばむようなキスを僕に浴びせる。たまに舌を唇に差し込んだり、歯茎をなぞったり僕の反応を伺っている。僕はきつと泣きそうな顔をしているに違いない。何故ならいつも変わることはない彼女の顔が酷く嬉しそうにだから。

頭が過呼吸を起こしたように酷く重い。

空気を抜く為に針から液が零れ落ちる。そしてついに僕の血管に

針が。

「お前らなにやってんだ？」

空気を読まない素っ頓狂な声にそれは邪魔された。

三夜

ナナシさんの、冷たい視線が緊張を形作る。ルナは冷静かつ迅速に注射器を隠した。

「まさか僕のためにここへ……」

僕の目には先ほどの絶望とは違う色の涙が溜まっていた。うれし泣きである。

ナナシさんは僕の危機を察してここに来てくれた！

やばい、一生ついていきたい感じだ！

ぶっ殺す、といって叱られる関係になりたい、かは定かではないと嘯く僕。

「いや、別に。トイレ行って自販機寄ろうと思ったたら下がガス爆発がどうとかうるせえから帰ってきただけだ」

見事に僕の期待は裏切られました。ビリビリっとね。

それよりも、と言葉を続けてナナシさんは喋る。

「お前ら何やってんだ？　もしかしてあたし邪魔だったか？」

「いや、別に邪魔じゃないよ」

寧ろいてほしいとは僕の意見。ルナは無言で指をカタカタと動かし、僕を一瞥した。

顔はいつもと変わらないがどこか迫力があつた。

誰にもわからないかもしれないけれど、僕には理解できた。彼女は邪魔されて凄く怒っている。デパートで駄々をこねる子供のようなフラストレーションが今彼女の中で渦巻いている。

彼女を拒否し、避けた日がなかったわけじゃない。

それを選択した僕はどうなったのか。

文字通り僕は三日間彼女に監禁され、犯され、ありとあらゆる陵辱を味わうはめになった。

「柳川月、お前に聞いてるんだよ。無視か、オイ」

「何もしてないよ。おまじないを優一にしてただけだよ」

「へえ、お前のいうおまじないって注射器でメタンフェタミンを相手にぶち込むことをいうのか。……………大概にしとけよてめえ！」

ルナの手はその言葉にぴたりと止まる。

「別にあんたには関係ないよ」

「てめえ、本気でそんなこといつてんのか？ お前が今やろうとしたことは一人の人間をシャブ漬けに変えて、お前無しじゃ生きていけない犬に変えようとしてたんだぞ」

ルナはアンティーク人形のような冷たい瞳でナナシさんを見据え、赤い唇を持ち上げた。

機械の音声よりも人間味の感じられない声色。

「うん、そうだよ」

「そうだよって、てめえ！ 自我が崩壊して姫野は姫野でなくなる危険性もあるんだぞ！ それをわかんねえお前じゃねえだろ！」

「うん、知ってるよ」

「……………姫野、お前もよく聞いてるよ。こいつはな、お前の自我をすり潰して、コイツ以外に反応しない人形を作ろうとしてたんだぞ。ただ殺したりするよりもタチがわりい。反吐が出る！」

「……………」

僕は言葉が出なかった。

注射器の内容が俗にいわれる覚醒剤だというのも気がついていなかったし、彼女が危険性を理解しながら僕にそういったことをするとは思っていなかった。

変な話だが彼女はどんな時でも僕の身を案じてくれていた。……………はずだった。

ではルナは僕が薬物依存症に陥る寸前で止めて僕を飼い殺すつもりだったのか。覚醒剤で僕を釣り、逃げられないようにするつもりだったのか。

僕は彼女を知っている。知ってしまったている。

ルナは本気で僕を“壊す”つもりだったんだ。

これにぞっとしなくて何にぞっとするのだろうか。

彼女は丸い瞳を僕に固定して少し笑った。

「それに何の問題があるんだよ」

ナナシさんは睨みつけるようにルナを見据える。ルナはそれを無視して僕を見続ける。

どこまで澄んだ瞳がととてもとても恐ろしい。

「ル、ルナ！」

一触即発の場で僕は口を開く。どうにかして開く。枯れる声を出す。粘つく舌を動かす。

僕の言葉はどうにか聞こえているらしく彼女は首を傾げた。

「と、とりあえず、また連絡するから……その時に話の続きを、しよう」

それしかいえなかった。どうにか僕が譲歩しなければきつとこの場は収まらない。僕にだって、頭の悪いこの僕にだってそれくらいは分かる。

僕の狙い通りルナは少し考えるそぶりをすると、傾げたままの首を縦に戻し、前後に首肯させた。

「またね、優一」

ナナシさんを見無視したまま彼女はペタペタと床の上を歩き、一度も振り返ることなく扉の向こうへと消えた。

ナナシさんはルナがいなくなると溜息をついて床に腰をおろした。そして僕にくたびれた視線を向けた。

「お前の相手は柳川ルナだったのかよ。いつとくけどよ、ありや地雷だぞ。アイツは自分のすることに罪悪感だとか悪意なんてこれっぽっちも思っていない。自分がしたいからする、あるのはそれだけだぜ。根本的にあたしらと精神構造が違うんだ」

「そう………なのかもしれないですね」

「最悪なことに、アイツはオツムのできがすごぶるいい。あたしに匹敵するかもしれないな」

「……その冗談はどうでもいいです」

決まったな、と笑う不良生徒に僕は冷たく投げかけた。

「……ただど結果的に彼女に助けられた。故に彼女は僕の中ではヒーローだった。」

「……ナナシさんの気まぐれがなかったら僕はここで犯されていただろう。」

「……それに柳川月にあそこまで食って掛かれる人間を姉さん以外で初めて見た。」

「……彼女が僕を犯していても誰もがそれを無視した。図書室で僕が犯されていても誰も助けしてくれなかった。」

「……それはさながらスケープゴート。僕という生贄のおかげで訳の分からぬ天才を押しさえ込めるなら安いものという考え方。」

「……全ての人間が仕方ないと見て見ぬふりをする中、ナナシさんはおかしいと言ってくれた。」

「……それが僕には酷く嬉しい。震えるほどに、涙が出るほどに嬉しい。」

「……アイツほどの人間と勝負して、無事なお前の姉ちゃんも相当キテる人間だろうな。」

「……その件に関して、当社はノーコメントでございます。」

「……お茶に口をつけながら彼女はポケットからカードサイズのシンプレな電子機器を取り出した。」

「……それを僕に投げつけた。僕はそれを両手で慌しくキャッチ。」

「……姫、これはなんでございましょう。」

「……どつちか選べなんて偉そうにいった手前、お前に負い目があるんだ。少し軽率だったと思う。」

「……ええつと、話が見えてこないけど。」

「……何かあったら、それを二つに折れ。そうすりゃ助けに駆けつけてやる。」

「……ありがとう。」

「……何かあってからじゃ遅いと思うんだけど、僕はそれを素直に受け取った。」

「……僕は立ったままフェンスに身を預けている。だから、彼女は僕を」

見上げるように顎を上げた。

「だから、もう死のうとかすんなよ。本当に……本当に生きていて辛いと感じたらあたしになんかいつてみるよ。それで駄目ならあたしが殺してやる」

「喜んでいいのかなあそれ」

「確かに喜んでいいかわかんねえな」

彼女は笑いお茶を口にする。

僕もなんだかおかしくなって、久しぶりに心の底から笑った。

それから僕らは取り留めのない話をした。彼女は泳げないだの、教え方の悪い教師の授業は眠くなるだの、購買は絶対にぼったくりして稼いでいるだの、自販機が遠いだ高いだの本当にどうでもいい話だった。

気がつけば僕らは話し込んでいたようで空模様は薄っすらと赤くその色を変え始めていた。

屋上からはちらほらと帰宅する生徒、部活動に向かう生徒が見えた。

「まあ、あたしは帰るけど何かあったら、またここに来いよ」

彼女はそういつて来た時のように颯爽と去っていった。

「はあ……」

なんだか酷く清々しい。

ナナシさんと話をしていると、とてもさっぱりとした気持ちになる。

話はどうでもいいことだし凄く普通で当たり前のこと。

これが楽しいってことなのかなあ、と十六歳の僕は久しく忘れていた感覚に若干うるたえていた。

ふと携帯電話がメールが来たと電子音を上げる。

僕はじつとりと汗ばむ手でポケットから携帯を取り出し、画面を見た。

相手は……姉さん。

『先に帰って準備していますね』
さっぱりとしたはずの僕の額から脂汗が噴き出した。

四夜

「あ、下は何もつけなくていいですよ」
そう彼女はいい、興奮した面持ちで僕を自分の部屋へと引つ張った。

人間興奮した時、本当にハアハアっていうんだね。僕びっくり。

姉さんは僕を恨んでいた。理由は多分、母さんが僕を生む時に死んでしまったから。

故に昔は僕は姉さんに酷い扱いを受けていた。世紀末のモヒカンとじじいの扱いある。

言葉こそ綺麗だが殴る蹴るは当たり前だった。父さんと笑いながら横で僕の腹を抓ったりとインケンなこともされた。でもそれに僕は反発しなかった。

それは姉さんの大好きだった母さんを殺してしまったという負い目があったからだ。だから、どんな厳しいことも辛いことも姉さんのやることは甘んじて受け止めて、耐えようと思った。父さんから姉さんの口調は生前の母さんのものだと言ったこともそれに拍車をかけていたのかもしれない。

それが変わったのは姉さんの誕生日の時のことだった。

おもちゃ屋さんから出てきた姉さんは父さんに買ってもらったプレゼントが嬉しかったのだろう。ニコニコしながら辺りをピョンピョン跳ね回っていた。

そしてこけた。ここまでは普通だ。

その時に姉さんのプレゼントは車道に向かって吹き飛んだ。そして姉さんはそれを取りにいくこうと車道に出てしまった。

今でも姉さんが振り返った時のあの空虚な顔を覚えている。

僕を見つめる二つの瞳。

その時、僕はざまあみろと見ていた訳じゃなく、意外なことに姉

さんを助けようと動いていた。

そこで姉さんを抱きかかえて無傷だったぜ！ ならよかったのだけど、僕ができたことは姉さんを突き飛ばすことだけ。

姉さんは無事だったけど、僕は十メートルほど吹き飛ばされ内臓や折れた骨をミックスさせた上に頭蓋骨にヒビが入った。

そんな重症の僕の元に姉さんはツカツカと来て頬を叩いた。
バチーン。

おい、一応僕重症極まりないんですけど。

「何であんなことをしたんですか！」

そこで家族だからとかセンチメンタルなことを言えばかつこよかったのかもしれないけど僕の口から血反吐と一緒に出た言葉は、

「わかんない」

この一言だった。

だけど、それ以来姉さんは僕をいびることを止め、少しやり過ぎじゃないかと思うほど甘くなった。

それでも僕は姉さんに逆らうことも姉さんを止めることもできなかった。既にそういう人間が出来上がってしまったといってもいい。彼女の敬語を聞く度に母さんを死なせてしまったという自責の念が湧き上がり、逆らえなくさせる。

だから姉さんが外国に行くことを反対した時も僕はそれを支持した。

「お父さん、私達だけでもこの家で立派に暮らせます！ それに優一さんだって言葉の通じない外国なんていくのは嫌でしょう？ ねえ？」

「……………うん。ぼくたちでも……………くらしていけるよ」

本当は海外に興味があったし、父さんと離れるのは嫌だった。それに退院したばかりの僕はまだ姉さんを畏怖していて、二人つきりになつたら本格的に殺されるのではないかと恐れていたのだ。

結局僕は姉さんを優先して、後姿の寂しい父を見送った。

よくよく考えればあの日から僕の人生は崩壊し始めていたのかも
しれない。

考えてみれば姉さんが僕に“イタズラ”するようになったのはあ
の日からだ。露骨に僕の下世話をしたがったり、一緒にお風呂に
入ろうとしたがったのもあの時からだったと思う。

そして夢精の意味を知らなかった僕は姉さんに相談し、次の晩に
犯された。まあ、この時僕は寝ていたので知らなかったわけだけど。
そういう過程があったせいで僕は姉さんに強く言えないし、姉さ
んを否定できない。

「優ちゃん”凄く似合ってますよ。もう、抱きしめたい!”

そういつて彼女は僕を抱きしめる。そして全身を写すでかい鏡を
持つてきて僕の羞恥心を煽った。

鏡には化粧を施され、メイド服を来た十六歳の男がいた。

下着を着けていない為か、スカートを履き慣れていないせいか足
がスースーする。姉さん曰く、それはデフォらしい。

「……あ、ありがとう。でも姉さん、僕恥ずかしいよ」

「優ちゃん、そこは“僕”じゃないですよ」

「……………わたし、恥ずかしいです」

「その恥じらいがいいんじゃないですか！」

……………さいですか。

そう力説する彼女は僕の素足を後ろから艶かしく擦る。スカート
をまさぐり、体のラインをなぞる。

その動きに僕は小さく声を漏らし、顔を朱に染めた。

彼女はバスタオル一枚でヤル気マンマンなのだ。さっきママシド
リンクとか口にしてたしな。

息の荒い姉さんの胸が僕に押し付けられ、その鼓動が更に僕を羞
恥に染める。

姉さんはわざと自分の鼓動を、興奮している様を見せつけて楽し
んでいる。

今お前に欲情しているぞ、と。

いつも辛いのはこういう中途半端な時だ。本格的に始まってしまえば僕はただ人形になってしまえばいい。

何時の頃からだろうか、僕は自分を人形にする術すべを身に付けていた。

今思えばルナはそれが気に入らないから、ああいう薬を使ったんだろうなあ。

「あれ、どうしたんですか？　ちよつと顔青いですけど」

「ん、何でもないよ」

少しルナとの行為が脳裏にフラッシュバックして僕は気分が悪くなる。全身がドロドロに溶けるような快樂の波が恐ろしい。

快樂で屈服させられる恐怖。

例えるならあれは圧縮鍋によって骨まで柔らかくされた骨付き肉の気分。

深呼吸して気分を落ち着ける。

うーん、精神的に結構重いしこりがあるような気がする。

姉さんはそんな僕を元気付けようとしたのかスカートの中に頭を突っ込んだ。変わった励まし方である。

ピチャピチャと何かを舐め回す音。そしてそのまま後ろのベットに僕は倒された。

むず痒い快樂に僕は生暖かい吐息を漏らす。それに呼応するように姉さんの愛撫が激しくなる。

僕は意識を遠くに離し、それに耐える。

不意に愛撫が止まった。

僕はそれに何故だろうと思っていると姉さんは微笑みながら僕を見つめていた。目じりの黒子が相変わらず印象的だ。

「どう……したの？」

「優ちゃん、私に抱かれるのは嫌ですか？」

「……………正直にいうと、嫌です」

「恐れ多くも事実を伝えてみる。」

「なんだか最近、人形を抱いてるみたいで凄くお姉ちゃんはガッパ

りだったんです。初めてビデオ見せた時はあんなに嘔吐して、抵抗してくれたのに……」

何か嫌な予感がした。それも生命の危機に関わるような種類のもの。

「あの時は凄く燃えました。いつも私のいうことを二つ返事で聞いてくれる優一さんがあれほど泣きながら抵抗してくれるんですから、それはもう興奮しました。覚えてますか？ 終わったあと顔をクシヤクシヤにして声を上げて泣いたのを。それに興奮して私、また優一さんを犯しちゃったんですけど」

姉さんの声とは違う、音……耳鳴りが聞こえる。どこからこの煩い音は聞こえるのだろう。

耳障りだ。体が苦しい。汗が出る。

「でも肌を合わせる度に優一さん、だんだんと反応薄くなっちゃいましたよね。今じゃ心はがらんどろ。だから私最近思っんです」

パンと音がして、左耳がキーンと甲高い音に包まれる。頬がじんわりと熱くなった。

何が起きた？

「を苦しめながらしたら、凄く気持ちいいんじゃないかなあつて」

僕は殴られたことに気がつく。そしてその言葉の意味を察する。

僕はポケットに隠していたナナシさんのカードを出す。彼女は僕の手ごと掴み、それを鼻に近づけた。

手を引かせようとしてもビクともしない。

「ふふふふ、うちの匂いじゃないですね。誰からもらったんですか？ これ」

僕の手からそれを取り上げ、彼女は片手で握りつぶした。どこのグリッププラーだよ。

とりあえず僕は姉さんを押しつけ、逃げようと扉のノブに手をかけた。

しかし彼女の足払いによってそれは叶わず、僕は床に転がった。

そして彼女は僕に押し掛かり、マウントポジションを取る。

姉さんは目をつぶり天井を眺めた。

「……ああ、これです！ 凄く興奮します！ 無理やりしてる感じが堪りません！ 狩猟本能と官能中枢がビンビン刺激されます！」
そういつて彼女は僕の顔を拳で殴った。わざとらしく高めに振り上げて恐怖を煽る。

そして振り下ろし、的確に僕の力を削げ落としていく。

僕が悲鳴を上げる度に彼女は顔を赤くした。そして笑みを濃くして、より強く殴る。

両手でガードを作っても拳はその合間を縫うようにして頬へと届く。

サディスティックな歪みは痛みとなって僕の心を犯した。

一通りぼこぼこにできたことに満足したのか、全身で息をしながら彼女は僕の髪の毛を掴み、無理やり顔を起こす。

ああ、顔が熱くて痛い。何が悲しいのか涙が止まらない。

いや、全てが悲しいのか。

姉さんはそんな情けない僕の顔をにやついた顔で眺め、飽きると僕に口付けをした。

強く、貪るように舌が口腔を暴れる。

ズダズタになった口の中を一生懸命探った。傷口に舌を這わせ血と混ざった唾液をすする。

その舌から逃れようとすると僕のペロを彼女はがぶりと噛みついた。そして僕に何度も何度も腰を打ち付ける。

熱く蠢く何か僕の下半身を飲み込んでいた。

痛みが快楽を増幅させ、奇妙な感覚を生む。

「ああ、その濁った目が堪らなくそります。不条理に対応できないようなその瞳がとってもとっても綺麗です」

姉さんは口付けを止めると、僕の首に手をかけた。

絶妙な力加減で僕を苦しめる。

もしかしたら、あの事故から僕は姉さんにとって大切な何かに変わったのではないか、と思っていた。

確かに変わることはできたらしい。

だけどそれは大切なオモチャという位置づけでしかないんだ。きっと僕は彼女の中では人間じゃない。きつと性玩具と同じような位置づけでしかないんだ。

そう思うと涙がぼろぼろと溢れ出た。何かが崩れていくようで悲しくてしよがなかつた。

僕は何の為に生きているんだろう。つい最近誰かが僕の人生は不幸一色みたいなこといつてたなあ。

「てめえ、何やってんだ！」

そうそう、こんな感じの口が悪い女性でね。目が鋭くてね……っ
ておい！

啞然とする僕と姉さんを無視して、ナナシさんは姉さんを回し蹴りで吹き飛ばした。

見事にそれは姉さんの顎にヒット。脳震盪を引き起こし彼女は倒れた。

「ナナシ……さん」

僕のヒーロー。彼女はまた僕を救ってくれた。

ちよつと遅いけど、ヒーローは遅れて登場するのだ。そこはお約束なので突っ込んではいけない。

でもおっさんくさいジャージ姿はどうにかならんものだろうか。

「……あいかわらず、とうとつたなあ」

「こつちの台詞だっつーんだよ！」

ぼこぼこの僕の顔を彼女は平手打ちした。

「ひでぶ」

嬉しさとは違う種類の涙が出た。

五夜

「一台の車が通り過ぎる。きつと運転手はぎよつとしただろうに。」

「お前、せめて服変えてくるとか考えなかつたのかよ」

「あの時はいろいろ混乱しておりましたので……。変ですか？」

「似合い過ぎててこえーよ」

あれから僕と彼女は必要な荷物を持って家を飛び出した。そしてナナシさんのご好意によって今日は彼女の家に泊まることになっていた。

「お前の姉ちゃんな、明らかにありや典型的なDVだ。もしかしてお前を暴行した後に謝ってきたりして、それをお前は許したりしてたか？」

「……………うん」

「それ、DVの兆候だからな。謝ればコイツは何でも許してくれるとそこで学習すんだよ。もしもあたしが助けなかつたら多分監禁でもされてたんじゃねえの？ そういう部分じゃある意味よかつたな、早期発見できてよ」

「……………うん、ありがとう」

「な、泣くなよ！ 男だろ！ あーもう、めんどくせえ！！」

ナナシさんは僕を見てどうしたらいいか分からず、うるたえた。僕は全てが当たり前だと思っていた。これは必然なんだった。

ただど実際にはこんな心配してくれて助けてくれる人がいる。なんだか安心してほつとしたら涙が溢れてきて、止まらなかつた。必死に止めようとしても僕の意思に反してボロボロ流れる。

彼女は、ナナシさんはルナだけじゃなくて姉さんからも僕を救ってくれた。本当に僕のヒーローだった。

「おいネギ坊主、ウチはそっちじゃねえ。ここだ」

「別にコロッケは好きじゃないんだけど……。ってどこだって」

「ここだつってんだろ。耳ついんてんのか？」

「だってここ、めちゃくちゃリッチな家じゃないっすか。ナナシさんは橋の下とか森の奥のあばら家に住んでるんじゃない……」

「セイっ！」

「ぐげっ」

ナナシさんは僕にとび蹴りを放った。

コンクリート打ちっぱなしの家。黒い鉄製の扉をくぐるとガラスによって区切られた庭が見えた。芝や庭があるのは分かるけど、結構つか、かなり広いんじゃないのか？

庭は日本的で情緒溢れる作りになっていた。

「おお、フェンリル。ただいま」

真っ白な犬が嬉しそうにナナシさんに抱きつく。そして一瞬僕の顔みて「姉さん、コイツ誰ですかい」っといった顔をした。

ビー玉のような丸くて黒い瞳がキュートだ。あ、僕の右手はやらないぞ。

「コイツは客人だよ、食べちゃだめだ」

お前はどこのもののけ姫だ。

フェンリルを筆頭に奥からワシやら猫やらイグワナやらヘビやらが現れた、ここは動物王国か？

ナナシさんはムツゴロウよろしく体にまわりつく動物達に破顔してじゃれた。もしかして僕も捨てられた子犬としてみてるんじゃないかと少し疑惑が持ち上がる。

「イカロス、今日も孤高だな、ケットも相変わらず美人だ。サラマンドラ眠そうだな、エキドナは今日ものんびりだ」

失墜しそうな名前や怪物を生みそうな名前はおいて置こう。

「もしかしてそのケットって名前の猫ってイリオモテヤマ……」

「ただの山猫だ。わかるよな？ わかるだろ？」

「いや、だって」

「わかれよ」

「……はい」

まさか、このワシは大鷲では！？　　っていうところちはガラパゴスリクイグアナ！？

僕はワシントン条約ってなんだっけと頭を抱えた。

「ホラ、これで顔冷やせよ」

「ありがとう」

僕はナナシさんから氷の入ったビニール袋を受け取る。リビングは洋風で広く、吹き抜けになっている。

黒く柔らかいソファに腰をおろした僕は顔に袋を押し付けた。冷たくて気持ちいい。

あれから大分傷が引いたとは思うけどやはりどこか腫れぼったいし、熱っぽい。

「ナナシさんってお嬢様だったんだ」

「あー、ただの金持ちだよ」

「……ああ、自分から言っちゃうんだ。そういうの「だって事実だろ」

「そうだけど、そうなんだろうけどさ……」

「饅頭見つけたから、ほらお前も食べよ。お茶は今入れてやつから「あ、どうも」

テーブルの上の写真に幼い頃のナナシさんであろう少女がにこやかに笑っていた。顔には緑や赤の色鮮やかなペイント。

グリーンの服に身を包み、軽機関銃をぶっ放している。

横に写っている父親らしきマツチヨマンは悪党のような笑みを浮かべて娘を見ていた。

よくよく辺りを伺うと、壁には銃刀法的にアウトな品々、血まれの勲章や帽子が飾ってある。

この家はなんだろう。凄くアウトローな感じがする。

「あの一、こつというの聞くのも何なんですが、ご家族は……」

「ん、爺さんと父さんと母さんがいるよ」

「いや、そうじゃなくて今はどこにおられて何をしてらっしゃるの

かなあって」

「じいさんは海外で特殊部隊の教官やってる。親父は今は中東で武器売りさばいてて、母さんは北欧で……」

「あ、もう結構でございますわ」

つまりはアウトでローな家族なわけですね。首に星のマークがあるくらい数奇な運命の方々と。

「まあ、そういうわけで家に人間はあたしとお前しかいねえよ、部屋は余ってるのがあから適当に使え」

ナナシさんはそういつてコーヒーカップに入れた緑茶を僕に差し出した。一応これはツツコミを入れるべきだろうか。

意志薄弱な僕はとりあえずそれを無視して饅頭に被りついた。具はあんこで、疲れた僕にはとても美味しかった。

「おいおいおいおい、どうした！ 苦しいのか？」

「なんか、わかんないけど……目から水が」

「……そう、か。まあ、落ち着いて食べるよ。誰も急かすわけじゃねえし」

「うん」

「鼻水でてんぞ」

「ありがとう」

それから僕はナナシさんの激辛カレーをご馳走になり、お風呂を借りて、ナナシさんと映画を見た。ちなみに映画のタイトルはプライベートライアンだった。

戦争馬鹿め。

「あたしの部屋は隣だから、なんかあったらフェンリルにいえ」

「直接いとかじゃないんですね……」

偉い人はシモジモの者とは直接会話しないのだ。それにしても犬以下っすか。もしかしたら彼女は徳川綱吉の子孫かもしれない。

マットレスと毛布、古い時計の置かれた部屋を見回す。それ以外の調度品はない。ナナシさんは僕にミネラルウォーターの入ったペ

ツトボトル渡し、部屋のスイッチに手をかけた。

「じゃあ電気消すぞ」

「あ、電気は点けといてくれると嬉しいですな」

「暗いと怖いってか？ どの道、あたしが家の明かり、強制的に全部消すから点けてても意味ねえぞ」

「……そう、ですか」

「トイレ行きたくなくなったら、廊下に暗視ゴーグル置いとくからそれ使えよ」

「わー、とつても親切だなあ」

棒読みである。ナナシさんはグットラックと親指を突き上げて電気を消した。

ジャージ姿の僕は毛布を被り、目を瞑った。

暗闇の中、チクタクと時計の針が時を刻む。窓がないせいで真っ暗だ。

こんなことなら携帯電話でも持ってくればよかったな、と僕。でも姉さんが何か変なものを内臓している可能性もあったからそれは無理なんだよなあ。

姉さんが拳を振り上げる様子がフラッシュバックして、汗が出る。

「大丈夫、大丈夫」

ここには誰も僕を襲う人はいない。ナナシさんは僕に世話を焼いてくれるし、ここには姉さんもルナもいない。

嫌な注射も暴力も振るわれない。安全なんだ安全だよ、安全かな？

本当に安全かな。

分かっている。これは幻覚なんだって、幻なんだって、だから僕の目の前に彼女達はいない。

ここは姉さんの部屋じゃないし、ルナのかび臭いあの地下室じゃない。

「じゃあ何で」

僕には彼女達が見えるんだろう。

何でもここはナナシさんの部屋じゃなくて、彼女達の部屋で彼女達
がいて

僕は叫び声を上げた。

六夜

「うわあああああああああ！！」
もはや誰が叫んでるのか分からない。

僕以外の誰かが叫んでるような気もするし、それ以外の誰かが叫んでいるような気もする。

煩い。酷く煩い。耳障りだ。

寒い。体からどんどん熱が奪われていく。

頭が苦しい。重い。

それでも彼女達は手を休めない。

僕がどれだけ逃げようと、彼女達は満月のようにあるいは太陽のように僕から離れない。

ちよつとずつ確実に距離を詰めてくる。

手が僕を掴み、屈服させる。

服を剥ぎ取り、汗でぬめついた肌の上を手が走る。

景色はメリーゴーランドのようにクルクルと回転し、無数の彼女

達が僕を嘲笑う。

何かが僕の首筋に注射される。

血液以外の冷たい何かが血管を滑っていく。

エコーのかかった声で青い瞳が僕を見つめた。

「致死量ギリギリなら人は死なないのかなあ、優一」
喉が熱い。

息をするだけで全身に射精するような快感が走る。

全身の毛穴が開き、冷水と熱湯を同時に浴びせられているような感覚に襲われる。

彼女はそれを嬉しそうに眺め、僕と肌を合わせた。

何度も何度も腰をくねらせる。その動きに感覚を最大限にまで増幅させられた脳は悲鳴を上げる。神経が焼き切れそうになる。

「あああああああああああああ！」

ガツンと僕を彼女が殴る。みれば青い瞳の彼女は黒い微笑みに変わり、劣情を滾らせた顔で拳を振っている。

体重をかけて彼女は僕を殴る。首を絞め、耳をしゃぶる。どうして僕はこんな目に合っているんだろう。いやだいやだいやだ。

こんな目に合うなら、死んだほうがいい。

僕は涎を垂らしながら裸電球を眺める。しかし、それも溶けるように変わる。

彼女達は互いに言い争いをしていた。

ああ、これはこの前の……。

「あなたですね、ウチの優一さんをかどわかしたのは!！」

「ああ、アンタが臭いの元なんだ」

「人攫いは列記とした犯罪ですよ!！」

「それでも優一は今はこちらにいるよ。何も問題はないよ」

「……天才とか呼ばれている割りには随分頭が悪いんですね」

「人攫いは責めるけど、自分が優一に“してること”は責めないんだ」

「つつつ!! ……そ、それはウチの問題です、あなたには関係ないでしょう!！」

「……………」

ルナは僕を抱きしめると観衆の前で僕に口付けをした。僕はそれから離れようと力を込めるけど前日散々、条件付けされた体には力が入らない。

彼女の体に触れるだけで前日の感覚がぞくぞくと甦る。

柔い僕の抵抗は彼女の胸を揉むことになってしまい、ルナを喜ばすだけだった。彼女は目を三日月のようにさせて舌を巧みに動かす。わざとらしくクチュクチュと卑猥な音を立て、舌を絡める。

呆然とするみんなの前で、彼女は僕のベルトを脱がしにかかった。ピツと何かが光り、ルナは僕を抱えたまま飛び跳ねる。

「この……泥棒猫が」

無表情で姉さんはルナにいう。手に持ったカッターナイフを腰打めにしてルナに体当たりをした。

二人は揉みくちやになり、誰かが悲鳴を上げ、また誰かは先生を呼べと叫んだ。

僕は怖くなつて、走って逃げた。

ぱつと景色が変わる。僕はフローリングの上で嘔吐していた。辺りには動物達。

柔らかい匂いに僕は抱きしめられているのだと分かる。

「大丈夫だ。大丈夫だからな。もう心配ないって」

ジャージを汚物まみれにした彼女は鼻血を流しながら僕の背中を優しく叩いていた。

口を殴打した跡、服には汚物だけじゃなく、血も付いている。

「気が付いたか？」

「僕…… ナナシさんにとんでもないこと」

「大半はお前の血だから気にすんな」

僕は自分の顔を触り、べつとりと血が付いていることに驚く。部屋の所々に、同じ色のものが付着している。

「また…… やつたんだ」

自分で自分を苦しめて、自分で自分の頭をかち割り、自分の顔を自分で殴った。

嘔吐し、射精し、暴れ狂う。

まともに見えても決してまともじゃない。

いつからか僕は暗闇を恐れるようになった。いつからか僕は暗闇の中で眠れなくなった。

誰がどう見ても狂人だ。

彼女達以上に僕はまともじゃなかった。

「…… ナナシさん、ごめん。直ぐ出てくから、本当にごめん」

「お前はさ、麻疹にかかっているようなもんなんだよ。今は辛いとか思うかもしれないけど、そのうちきつと良くなる。だからそれまで

「ここにいていい」

「でも」

「無理すんなよ、ホント」

彼女は僕の背中を優しくトントンと叩きながらそういった。

今度は声を上げて泣いた。誰かが声を上げて泣いていた。

不思議とその声は耳障りだと思わなかった。

僕らはそれから部屋を綺麗にして、もう一度風呂に入り、同じ部屋で手を繋いで寝た。

枕元にはオレンジ色にぼんやりと光る小さなランプ。

彼女は僕が目を瞑るまで今までのことを聞いてくれた。どんなに反吐がでるような話でもじっと聞いてくれた。

監禁された時の話、薬を打たれた時の話、女装させられて男としての自分を踏みにじられたこと、関係を拒否すると彼女は僕に暴力を振るうこと。

沢山の動物に囲まれて、優しい誰かに手を繋がれて、誰にも吐露することができなかつた気持ちを伝えて僕は本当に幸せだった。

「明日が……来なければいいのに」

「無茶いっなよ」

リアリストめ。

でも僕はそんな彼女に感謝している。

多分、世界中探しても僕の味方は彼女だけだから。

六夜 裏

ワオンとフェンリルが声を上げた。

「うるせねえなあ……どうしたフェン？」

あたしは欠伸を噛み殺し、パジャマ件部屋着でもあるジャージを引っ張るフェンリルの頭を撫でた。

頭上にあるランプを灯す。フェンリルは急に明るくなったのが眩しいのか少し目を細めた。

あたしだつて眩しいっつーの。

「ワオン」

辺りの動物に目を向けるとみんな一様に慌てふためいている。どうやら何かが起こっているらしい。

また馬鹿なこそ泥だろうか。

以前、この家にこそ泥が侵入したことがあった。当然あたしはとっ捕まえてボコボコにして、後からやってきた警備会社の人間に突き出してやった。

過剰防衛だとかいうが、下手したらこっちの命はなかったかもしれないんだ。褒められてしかるべきであつて、警告されることじゃねえ。

あたしは枕元に置いてある金属バットを手に持つ、腰にはナイフ。うちのじいさん曰く、武器というものは常に奪われる可能性も考慮しなくてはならないらしい。故に隠しだまであるナイフは後ろに持っておく。

とりあえず、水を口にしようとして枕元のペットボトルに手を向けた。

そこであたしは奇妙なことに気づく。

水が波紋を打っている？

そこであたしは初めて、隣の部屋の姫野が叫んでいることに気が付いた。

まさか、柳川が？ いや、もしかしたら姫野姉の可能性もある。

あたしはコンクリートの壁に耳を当てて、状況確認。
どうも、様子が変だ。

駆け足であたしは奴の部屋に行き、部屋の電気をぱちりと点けた。
「あああああああああああああああああー!!」
男が発狂していた。

それは絶えず嘔吐し、悲鳴を上げていた。

「お、おい！」

あたしの声に反応を示すことは一切なく、見えない何かを振り払うように姫野は手を振り乱していた。

顔は真っ青でチアノーゼを引き起こしているのが分かる。目は充血していて、その様はまるで業火に焼かれる悪魔のようだった。

絶えず奴は自分の頭を壁にぶついたり、自分を殴ったりしている。
なんだよ、新手のパフォーマーか、クソ。

とりあえず大人しくさせようと奴の手を取った。

「わああああ！」

奴の腕がもろにあたしの頬にクリーンヒット。

……野郎。

「んだこらあああああああああああー!!!!!!!!!!」

あたしはカチンときて手持ちのバットを奴に振るう。

ゴンといい音がして、奴はくの字に折れ曲がり、ずりりとその場に倒れ込んだ。

「あ、ヤベ……」

倒れた姫野は三割ほど動きを減退させながらも、うーうーとうなり声を上げていた。

流石に人殺しのレットルを貼られるのは嫌なので、奴を介抱しようとして近づくと、

殺してしまうなら、あらゆる手を尽くしたというポーズをとって
おかないと世間体が悪いから、じゃない。

「オイ、大丈夫か!？」

自分がやっついてなんだが、この際気にしない。

奴はうつとというとあたしにゲロを吐きかけた。そこでプツンしたあたしは奴の首を掴み、アッパー。

姫野は二メートル吹き飛んで壁に激突。ぴくりともしなくなった。

「お、おい。冗談キツイぜ！」

まさかホントに死んだりしてないよな。

でも頭からドクドクと血が出る。

やばいのもしれない。

あたしは姫野を抱きかかえると自分に言い聞かせるように呟いた。

「大丈夫だ。大丈夫だからな。もう心配ないって」

人間こんな簡単に壊れたりしねえよ。案外丈夫だってじいさんいってたし。なんとかなるって。

いざとなったら庭に埋めよう。うん。

そこで姫野は目を開けた。

「気が……付いたか？」

セーフ！

それから部屋掃除の大半を姫野にやらせたあたしは懺悔の意味も込めて奴をあたしの部屋に招き入れることにした。

コイツは明らかにPTSDだ。つまりは心的外傷後ストレス障害。スイッチは暗闇で寝ること。きつと闇から来る“恐怖”が怖かったんだろう。

じいさんはPTSDは兵隊がよくなる病気だといっていた。

「あまりにも過酷な状況に置かれると人は塞ぎようのない傷を心に負ってしまふ。そしてそれは……特定の条件下であったり偶発的であったりと千差万別だが、ある時急にフラッシュバックする」

「フラッシュバックするかどうかどうなるんだ？」

「その時の記憶が忠実に再現される。臭いも痛みも、全ての感覚が、だ」

カタカタとずぶ濡れの猫のようなコイツの手を取って、あたしは

奴と話をした。

姫野曰くどうやら以前も同じ症状にかかったことがあるらしい。

「その時、お前の姉さんは何してたんだよ」

「わかんないけど、狂乱してビデオ回してたみたい」

相変わらず狂ってやがる。

「後で病院行こうとか思わなかったのか？」

「姉さん、理由が病院側に知られるのが恥ずかしいからって」

だから。

だから病院に行かせてもらえなかっただど？

何故か姫野は申し訳なさそうに笑った。あたしはそこで心臓が締め付けられるような痛みを覚えた。

何でこんなちっぽけな奴がここまで悲しい笑みを見せれる？

誰がこうさした？

悪いのはコイツか？

何で姉が、柳川月が悪いのに自分が申し訳なさそうにしてんだ？

ワケわかんねえよ。

何でコイツ、こんな普通に話しをするように自分が犯された時の

話をできるんだ。

「その時、薬が首筋に刺さって、ルナが真っ赤なゾクゾクした顔で

するんだ」

付き合っの断ったら監禁されるって何だよ。

「姉さんの水攻めは辛かったなあ」

姉と近親相姦するの嫌がるとか普通だろ。何で水の中に顔突っ込

まされてるんだよ。

包丁刺されたとか髪の毛食わされたとか電気流されたとか調教さ

れたとか爪剥がされたとか何だよ。

お前、何で生きてられるんだよ。こええよ。

「明日が……来なければいいのに」

そこで。

あ

あたしはそこで「そうだな」って言えばいいのか？ 認めてやれ

ばいいのか？

それは姫野優一の人生は辛いもんだった、悲しい人生だったなと認めることになるんじゃないのか？ 誰も救いの手を差し伸べず、今みたいなチンケな普通の状況を人生最高の幸せみたいに喜んでる奴を、不幸な奴だつて認めることになるんじゃないのか。

聞けばコイツの記憶は混濁ばかりの穴だらけだ。多分、ずっと前から何度も姉に暴行されたりしてきたんだろう。そしてその度に記憶に封をしてきたんだろう。

忘れることが唯一神から与えられた救いなのだろう。

心を蝕み、記憶を蝕み、希望を蝕んできた。

誰かに頼ることもできず、ただ沈黙し、耐え続けたコイツ。

そんな奴に「お前は可哀想だな」っていつてやればいいのか？

それこそコイツにとって失礼じゃないのか。

だから。

あたしは。

笑つて、こういっしかなかった。

「無茶いうなよ」

否定すらできなかった。奴を否定してやれるほどの度胸も度量もなかった。

ただ、答えを曖昧にすることしかできなかった。

どうすればあたしは奴に一番いい答えをいつてやれる？

最低だ、あたしは。

だけど、あたしらしくない答えに奴は笑った。

嬉しそうに、女顔のその顔で。

本当は女じゃないのかと思うような綺麗な笑みで。

ただ嬉しそうに。

あたしはどうすりゃいいんだろうか。

七夜

なんだか眩しい。そう思って目を開ける。

ナナシさんの部屋のシャッターが重々しいモーター音と共にゆっくりと開いてるところだった。

まるで漫画のように外ではチュンチュンと聞こえる。ここら辺はワシとかヘビとかいるから危険だぞーと内心思う。

僕は目をこする。なんだか昨日は随分恥ずかしいことばかりしてしまったような気がする。

「いでっ」

「あ」

ナナシさんと手を繋いだままだった。

「今日どうしよう」

昨日の余りもののカレーを口に運びながら僕は思った。

「ああ、そっか。学校か」

「高校生がいうべきことじゃないよね」

「ほら、あたし金持ちだし、頭いいから学校行かなくていいんだよしれっと彼女はいう。」

「まあ、今日はいかなくていいぞ。昨日の今日だからな……お前もいろいろ都合が悪いだろ」

「……でもいかないと、沢山の人死んじゃう、罰が重くなる」

手が震える。スプーンの上のライスがぼとりと皿に戻る。

ナナシさんはそれを見ると一度席を立ち、何かを持って返ってきた。

「これ、辛くなった時に飲め。精神安定剤な」

「ありがとう」

「ちよっと眠くなるかもしれないけど、楽になるはずだ」

「うん」

「今日は家の掃除を頼む」

「……仰せのままに」

「アホ」

僕らはまた黙り込み、もそもそと激辛カレーを口にする。

そこでナナシさんは独り言のように呟いた。

「あたしは、お前を自由にする方法を考えてる」

「え？」

ポカンと口を開けたまま僕はナナシさんを見つめた。

「究極アイツらを殺す」

「殺すって……」

命を奪うことの意。人として最大の禁忌。

「つつても究極的な選択だから、実際はしねえと思う。だけどそういう可能性もあることを理解してくれ」

「……………」

突如宣言されたことに同様を隠せない僕。しかし、既に決められたことだ。僕からどうこういえることじゃない。

それから僕らはどちらかから話すわけでもなく、ただひたすら互いのすべき事を行った。

「あれ持ってきて」

「はいはい」

「それじゃねえよ、あれだよあれ」

「どれだよ。」

顎で使われているのが悔しいので冷蔵庫からマヨネーズを取り出す。

「そうそう、これを飲んで朝は元気百倍……って馬鹿野郎！」

「たわばっ」

マヨネーズで殴られるというなかなかないシチュエーションを味わった。

こいつ結構ノリいいな。

ナナシさんは全ての動物の頭を撫で終わり、ドアノブに手をかける。

僕は相変わらずジャージ姿で、彼女は制服。

僕は専属家政婦ばりにお見送りを慣行していた。

「ああ、そうだ」

「どうしたんでござんしょう?」

どこの言葉だろう。

彼女はニヤリと笑うと僕に近づき頭をくしゃくしゃと撫でた。

セツトするのに六時間かかったヘアーが! というのは嘘。

「いつてきます」

「……らっしやい」

「八百屋かてめえ」

「ぐえっ」

首を絞められた。

彼女をお見送りした僕は気合を入れて掃除をすることにした。—
張羅のジャージを汚すのもどうか思い、泣く泣くメイド服を取り出す。

まずは食器を洗う。そして庭に水を巻き、池があることを知らず
落ちそうになりながら草むしり。

洗濯機に洗濯物を投げ込み、機械に頑張れと応援してるところを
動物達に哀れみの目で見られた。

ナナシさんのメモに従って動物達の餌をやっていると来客を告げる音。

どうやら宅配便のようで、サインを求められた。ナナシさんの名前が分からないので崩した文字でナナシと書いておく。

「うおっ、メイドさん……」

「あ、いや、アハハ……」

「君可愛いね、どこの店の子? 今度行くよ」

「いや、そういうのじゃないんで」

「いくらならOK?」

「あの……実は僕、男なんで」

「あ……そうなんだ」

「すみません」

「いや、男でも私は一向に構わんツツ!!」

グラップラーに別れを告げた僕は静かに扉を閉めた。

折角いい天気なので僕は乾燥機を使わずにちゃんと洗濯物を干して、ソファーに座りテレビをつけた。

ちなみに部屋掃除はしていない。

だって部屋に飾ってある拳銃とかどうすればいいか分からないしね! いろんな意味で! 手榴弾とか怖くて触れることすらできなかったよ!

大画面はドラマや通販番組を映していた。僕はチャンネルを変える。

ローカルニュースが目に入った。映像はこの町の幼稚園を映している。

『に幼児数名が集団で中毒死しました』

何故だか僕の頭に柳川月の爬虫類のような瞳が浮かび上がった。

時は少し巻き戻る。

「どどどどどどー」

配線だらけの部屋。不規則に詰まれた機械の中で少女がただひたすらキーを叩いている。

耳には大きなヘッドフォン。別のディスプレイで再生されている映像の音をそれで拾っていた。

一人の男とその少女がまぐわい合う映像。

その部屋で物理的に動いているのは機械と彼女の目と指だけだった。

今いるのは普段生活をしている部屋の隣。彼女は作業室と呼んで

いた。

彼女はキーを叩き、思いを馳せる。

彼は明らかに精神異常を抱えていた。

それが分かったのは彼と話をしていた時、彼女が彼の髪についたゴミを払おうとした時だった。

『わっ』

目をぎゅっと瞑り、ガタガタと震えた。

家庭内暴力を受けているとしか思えなかった。

しかし、彼に何度聞いても一向に答ええない。記憶の混濁もあるようだった。

姉の弟を見る目を超えた劣情の眼差しで少女は彼が何をされているのかを悟った。

彼女は最初は彼を救いたかった。部屋に呼んだ時もその第一歩となる予定だった。

しかし、彼女はカップに紅茶を注ぎながら思った。思ってしまった。

もしも、ここで彼に毒を混ぜたらどうなるだろうか。

いや、筋弛緩剤を入れたならば。

彼の心を自分で埋め尽くし、姉を生めるという方法もいいのかも
しれない、と。

それから全てが狂ってしまった。結果自身の欲望に歯止めが利かなくなり、彼は自殺一歩手前にまで行ってしまった。

ただ彼が生きているのならどうだっていい。

どんな過程があろうと結果答えがゼロなら、それはただのゼロ。

重要なのは結果だ。

「ぎゅ　　いいいいいいん」

彼を必ず、自分で埋めてみせる。

彼が好きだ。

彼の笑った顔も好きだ。

滅多に笑わない、いつもぼうつとした彼が時折見せる表情が堪ら

なくさせる。

孤独だった自分、誰もが近づこうとしない自分。学校なんて辞めてしまおうかと思った。

『どこいくの?』

『帰えるンだよ』

『困ったな。そうすると僕一人の班が出来上がってしまうのだ。隣の席の人、今日も欠席でさ。よければ一緒に組んでほしかったんだけど……』

彼は覚えていないかもしれない。

だけど私は覚えている。

なんてことない一言が私を救ったということ。

『優一、学校がつまらないよ。こんなところ、来たくないんだ』

『ルナが来なくなったら僕友達ゼロだよ。困ったな』

絶対埋めてみせる。

「こねくとーおん」

少女はエンターキーを押し、衛星写真を画面に表示させた。

それを拡大する。

メイド服を着た彼と背の高い女性が並んで歩いていた。

「どっかーン」

少女は携帯電話を使いどこかに電話を掛けると、携帯を投げ捨てた。

電波を受けた時点で向こう側の装置は既に起動している。後は明日のニュースを確認して死亡者を確認するだけ。

次にパソコンのメール画面を呼び出し、彼の姉へと写真を添付する。

彼がその女の家へ入るまでの写真を。

焦らせる為に何通も小分けにして。

八夜（前書き）

かなり痛い話です。男性的な意味で。

八夜

始まりは常に平穏なものだと思う。

人はそれに対してどうしようもなく耐えるだけ。僕もまた耐えるだけだった。

繰り返すベルはチープな音を鳴らす。

ピンポーン。一回。

ピンポーン。二回。

ピンポーン。三回。

そして何度もドアノブが力任せにガチャガチャと回される。

僕は胸を押さえて床にカレールだったものと胃液を撒き散らす。頭の中の冷静な僕がまた掃除しないと、と笑う。

「優一さん、ここを開けてください」

最初は宅配の人の声からだった。

「あの、サインのこともう一度ちょっとお話がしたいんですが」

ああ、やっぱりナナシさんじゃだめだったのかと僕はチェーンを掛けたまま扉を開いた。

小さなうめき声が聞こえて、ドアの向こう側で配達員は倒れる。

僕は驚いてその手を離れた。

扉は自然に閉まるはずなのに、何かがそれを止めた。

黒い扉とは対照的な白い手が扉を掴んでいた。

なるほど配達員の手が長いのか。そんな馬鹿なことがあってたまるか。

「優一さん、迎えに来ました」

姉さんだった。

彼女はいつものように上品に微笑む。

「あら」

扉を開こうとした彼女はチェーンが邪魔なことに気がつき、鎖に

手を掛けた。そして力任せにギリギリと引っ張る。

鎖は引きちぎれ、勢いで姉さんも後ろに飛んだ。

即座に僕は条件反射的にその扉を閉める

そして鍵をかけた。

「優一さん、何で鍵を掛けたんですか？ 開けて下さい」

「……………」

「今なら“指三本”で済ませてあげますよ」

姉さんは優しく、僕に聞かせる。つまり三本の爪の間に針を差し込むということ。

僕はその時“随分優しいな”と思った。そしてその発想にぞつとした。

普通はそんなことしない。するはずがない。

「早くしないと水攻めもおまけしちゃいますよ？ 聞いてますか、

優一さん」

彼女はそう優しくいいながら鉄製の扉を強く叩く。

その度に僕は胃が締め付けられた。

「何をあの人に吹き込まれたのか分かりませんが、あの人は不良ですから信じちゃだめですよ」

「………… お、おおおおおお、おねえ………… ちゃん、お願い、です。

もう僕に酷いことしないでください」

「スキンシップがそんなにいやですか？」

「ぼ、僕の心はもうボロボロです。お願いで、す」

「それは柳川月のせいですよ。大丈夫、お姉ちゃんが今日もいいこといいてあげまぢゅからね」

そういつて姉さんは小さく、本当に小さく引きつるような笑い声を上げた。

僕は全身に氷柱が刺さったような怖気に苛まれる。

「ももももも、もう、嫌です。許してください。お母さんを殺したことを許してください。ごめんなさいごめんなさい……………」

僕はゲロまみれになりながら扉に向かって頭を何度も下げた。涙

八夜 裏

彼の喘ぐ声をBGMにしながら彼女はゆったりとソファにもたれ掛かる。

若干映像のせいで体は熱っぽい。又に手を伸ばしかけ、やめた。溜め込んだ方が“後々楽しい”からだ。

少女はキャンディを口に含み、天井を仰ぐ。全部終わったら何をさせようか。

私が彼女に成り代わるのも楽しそうだ。

黒かったディスプレイがぱっと明るくなる。アラートが幾重に渡って画面に表示される。

しかし、彼女はこれを無視した。

彼女にとってそれはシナリオ通りだった。

姫野の姉は弟を連れ去り、アイツは真実を知る。

ハッキングを受けることも想定内だった。

その為に彼女はわざわざ脳内にあるデータをPCに書き出し、セキュリティを甘くしたのだ。

上手くいってもらわないと困る。

しかし、想定よりもハッキングの予定が少し遅かった。彼女を買いかぶり過ぎていただろうか、と少女は思う。

「ま、いいかあ」

結果的に彼女がデータを持っていけばいいのだから。

最悪彼女が無能ならメールで情報を与えて刺激してやればいい。

全てが終わったらオートクチュールのメイド服を着せて酌させよう。

赤ちゃんプレイなんてものもいいのかもしれない。

「まるで神様だよ、優一」

自分のしたいことをして、人間どもを操りほくそえむ。

まさに自分は神の領域にいる。

あとは従者か信者ほしい。
優一に自分は神様だと刷り込んでみようか。
少女はソファアールの上で笑みをかみ殺した。

侵入は完璧だった。

あたしはあの天才、柳川月のPCに潜り、データをダウンロードしていた。

ダウンロードと並行しながらあたしはログを削除する。

今日は学校には行かず、駅前のファーストフード店でPCをカタカタと動かしていた。

最初こそ緊張したが成功すればなんてことはない。寧ろざまあみろと言いたい。

「やっぱり、あたしの方が頭いいんじゃないかねえの？」

IQテストなんて嘘っぱちだ。

ファイルは大きなサイズではないらしく直ぐに落ちてきた。

即座に接続を切り、踏み台にしたサーバーのログを消し去る。

コーラを口に運び、一息ついたあたしは気を引き締めてファイルのページを捲った。

まず柳川月の計画に眩暈を覚え、ファイルの半分を過ぎた頃、姫野優一とその姉に関するレポートを見つけた。

最初こそ冷静に読んでいたが、次第にその異常さにあたしは怒りを抑えられなくなった。

「……………うそだろ？」

不幸の元に生まれた男、姫野優一。

嘘であってほしいと思う。

だがそこにあるのは裏打ちされた詳細なデータ。詳細故にそれも必然的に載っていたし、柳川月の考察の意味も分かる。

「……………どっちも狂ってるつてののかよ」

だとしたらどっちなのだろうか。どっちが狂っていたのだろう。

姉か弟か？ 薫か優一か？

それとも先にそれがあつたのか、そういう風にさせたのか。どちらにしる異常なことには変わりない。

この世はこんなにも狂っていたのか。

あたしをあざ笑うように店内の明かりは煌々と光を放っていた。

取り合えず優一に自覚があるのかどうか聞くためにあたしは家に戻った。自分の目でそれを確認してきたが、どこか信じられない。

「はあ？」

あたしは自分の家の前を通り過ぎそうになった。

「おいおいおい、ここあたしの家だよな？」

ゴリラを飼った覚えはねーぞ。

鉄製のドアノブが鉛細工のようによくにやぐにやに握りつぶされていて、チエーンは引きちぎられていた。家の前では配達業者が泡吹いて倒れてる。

ドア自体もハンマーで叩かれたかのようにベコベコだ。

まだ午前中の為か、辺りに人はいない。

ダリの絵画のように溶けたデザインに変わったドアノブを恐る恐る握り、あたしは自分の家に入る。

床にはゲロ。壁には血飛沫が飛んでいる。スプラッターばりのものじゃなくて僥倖と喜んでおく。

部屋の奥では動物達が寄り添い、震えていた。何か見てはいけな
いものを見てしまったような、そんな表情。

いろいろくまなく搜索してみた結果、優一の持ち物と優一だけが
ごっそり消えていた。

まるで初めから存在していなかったかのように。

あたしはもつと順序だててやるのが好きなんだよ。なんだよ、この無理やり加速させられてるような状況は。

もしかしてあたしは柳川の掌なのか？

偶然にしてはでき過ぎている。

もしも、柳川月の思惑通りに動いているとしてもあたしはアレを

見てしまった。故にあたしの役割は既に決定付けられていた。

そうせざるを得なかった。

「くそっ！」

あたしは姫野の家へと向かった。

九夜（前書き）

工口表現、痛い表現あり。だめな人は回れ右。

九夜

ざぼつと音がして、体が飛び跳ねる。

ここはお風呂場で僕は姉さんに水を掛けられたようだ。姉さんの手から零れ落ちたバケツがカポーンと音を木霊させた。

早朝どつきりだったらどれほど楽だったろう。

しかし、現実是非常である。

姉さんは僕の頬を二回ほど叩き、髪の毛を掴んで顔を覗き込んだ。

「あらあら、水攻めで気絶なんて、優一さん少しひ弱になったんじゃないですか」

「あつあ！ ごっ……ごめんな、さい。許してくだ、さい」

姉さんは腰に手を当てて微笑む。

「わかつてないですねー。お姉ちゃんは怒っていませんよ。ただ、規則を破ったら罰せられるようにお姉ちゃんは優一さんを罰しているだけです。好き好んでこんなことするはずがないじゃないですか」

嘘だ。

姉さんは顔を高揚させて、僕をみてウズウズさせてる。或いはゾクゾクと。

だから僕はただひたすら、姉さんにひざまずく。少しでも痛いことをされないように。

「水攻めは終わりましたから、次は爪に行きましょうか。右手全部だからちよつと苦しいかもしれないですけど頑張りましょうね！」

姉さんは右手を空に掲げて教育番組のお姉さんのごとくおー！と子供っぽくいった。

「え？ ……ゆ、指三本だつて」

「優一さん、遅かったから」

「そ、そんな！ 姉さん、全部は……」

「あーもう、言い訳は男らしくないですよ。右手の“剥し”も追加

ですね」

「……………」

僕は掴んでいた姉さんの足を離し、黙った。これ以上騒いだら何をされるかわからないから。

床は冷たくて、僕の心も冷たくて、姉さんも冷たくて、でも姉さんの僕を見る目は熱くて。

「いい子ですね。終わったあとはいっぱい泣かせてあげますよ」

「あつう……………」

「……………そんなに出さないで下さい。後でお姉ちゃんの分がなくなっちゃうじゃないですか」

僕は羞恥に顔を真っ赤にさせて咽び泣いた。

姉さんはそんな僕にタオルを渡す。それで涙を拭こうとすると姉さんは僕を止めた。

「あ、違いますよ。それは口に啜えるんです。しっかりと噛まないと辛いですよ」

「どっ、どっいう……………」

「どっつてここで指をやるんです。いつもみたいに地下でやるのもいいですけど、ここの方が優一さんの声が響くし、汚れないですからね」

僕が上手く飲み込めないでいると姉さんはテキパキと作業を進める。

「はい、これ噛んで下さいね」

「んが」

「はい、カメラの設置オーケー」

「んっ！」

「優一さんの指もオーケー。相変わらず細くて綺麗な指ですね」

姉さんは僕の顔を見ながら指を一本一本丁寧に舌でねぶり、吸い付くような卑猥な音を出す。

そして裁縫道具に使う針を取り出した。

鋭い銀色の針を目の前にして指の先がどんどん冷たくなっていく。ゆっくりとそれは僕の親指に添えられる。

「……ふっふっ、ふっ」

「優一さん、ちょっと過呼吸気味になってますよ？ 少し落ち着いて……えいつ」

「んんんん——————！！！！！！！！！！」

爪と指の間を冷たい何かが駆け抜けた。爪の下を白っぽい何かが蠢く。

肉を裂き、指を痙攣させる何か蠢く。

痛い痛い痛い痛い痛い。

指はじんじんと痛み、真っ赤な血を吐き出した。噛み締められたこめかみと顎の筋ははちきれそうなほど膨張する。

景色が涙で歪み、額に汗が走る。喉の奥が苦い。鼻水で息がしづらい。

「んっんっんっ……………」

「頑張りましたね。でもまだ始まったばかりですからね」

姉さんは僕の手を持ち上げて新しい針を見せた。わざと僕に見せて恐怖する僕の表情を楽しんでいる。

僕は何度も何度も懇願するように首を横に振る。

「ごめんなさい、ごめんなさい。ゆるしてください、おねがいします。」

「痛そうですね。私も心が痛みます。……………でも罰ですからぶすり。」

「はい、元気出して行きましょうね！最後の一枚ですから、いい声してくださいね？」

針を抜かれる時が僕の体力のピークだった。

僕はぐったりとしてそれを眺める。指の感覚などとうにない。ただ右手全体だけが異常に痛い。

小指の爪がペンチに挟まれ、びきびきと肉を繊維のようにして引

しかし、動きを止めようにも彼女の腕の力は女性とは思えないほど強く、ぴくりとも動かない。

少女は少年の顔を眺めながら、丹念にそれをねぶり、しゃぶり、舐め回す。

彼の顔が真っ赤に染まり、陰茎が膨らむのが少女には分かった。動きをより早めて、少年を責め立てる。

少年は目の前が弾けるような刺激に喘ぎ、体を強張らせた。そして自分を保ち何とか堪える。

少しむっとした彼女は前置きをおかず、少年の後ろに指を差し込む。前立腺を刺激し舌を巧みに動かした。

少年は体を反らし、少女の口腔に熱い何かを吐き出す。目の奥をガツンと殴られたような衝撃が全身に伝播し、汗が噴出した。

鼓動のようにそれはドクドクと音を伴い、呼吸を荒くさせる。

それを嬉しそうに少女は飲み込んだ。喉の奥に生臭い滑ついたものを吐き出されても嫌な顔ひとつしない。寧ろ彼女にとっては喜ばしいことだった。彼女はズルズルと音を立てて、それから口を離すと少年と唇を合わせた。

少年は目を見開いて拒否するが彼女は少年の顔を固定し、唇の間に舌を差し込み、歯をこじ開ける。

自分の口の中に残ったそれを少年の唾液と混ぜ、彼に流し込んだ。なす術もなくそれは少年の喉を流る。

彼女はいとおしむように少年と舌を交わし、鼻を摘んだ。

呼吸ができなくなつた彼は何とか彼女から逃れ、マットレスの上に転がる。

どこかぐったりした少年は虚ろな目で部屋におかれた大きな鏡を眺めた。

そこには死んだような瞳の自分、後ろでニコニコと微笑んでいる少女が写っているだけだった。

少女は少年の腰だけ起こし、何かを腰に装着した。

彼は鏡越しにそれが何か悟り、芋虫のように逃げようとする。

それみた少女は嬉しそうに微笑み、先端部分に潤滑油を掛け、片手で全体に伸ばす。

「動くとお腹傷つけちゃいます……よつと！」

「がっ
」

勢いよくそれは少年の後ろに侵入した。少女の口の時とは別種類の音が部屋に反響する。

少女の腰の動きに合わせて、少年の喘ぐ声も変わる。

強く打ち付ければ少年は長く喘ぎ、浅く弱く打ち付ければ低く細かく喘ぐ。

少女はまるで楽器だなど笑った。

少年は鏡に映った自分を見て、涙が出た。何故こうしているのか。こうなっているのか。わからない。

助けてほしいけど、それはできない。

彼女に嫌われたくない。

ナナシさんに嫌われたくない。

また独りぼっちになるのは嫌だ。

これを耐えれば、きつと……。

目の輝きをなくした少年は何度目になるか分からない性を吐き出した。

十夜

ガタンと音がして、天井の戸が開く。

ああ、また姉さんが僕を犯しにやってきたんだ。そう思った。

僕は意思をまた人形のように凍らせて、目を瞑った。

だけどそうじゃなかった。

「おい、姫野っ！……クソ、何だよこれは！何なんだよ！」

「可愛いでしょう、その乳首のピアス」

「てめえ！」

ナナシさんは姉さんを鋭く睨みつけた。

不思議なことに降りて来たのは姉さんとナナシさんだった。

ナナシさんは汚い僕に顔を向けると男泣きを慣行した。しきりにクソと何度も呟きながら涙を拭う。

「あ、ごめん。僕、こんな汚いんだ。姉さんに犯されてよがる変態なんだ。自分からおねだりするようなマゾ犬なんだ。ごめん、ごめん。でも、どうか僕を……嫌いにならないでください」

「見損なうんじゃないよ！」

ナナシさんは目を見開き、僕をグーで殴る。がりつと音がして舌を噛む僕。

「あたしがそんなくっだらねえ理由でてめえを嫌いになるわけねえだろ！あたしは今猛烈に怒ってるんだよ！クソ、誰だよ。コイツを踏みにじったのは。コイツの人生を目茶目茶にしたのは！誰がどんな理由で人の人生をぶち壊せるんだよ！どうしてコイツはこんな目に合わなくちゃいけないんだよ！神様は何してんだよ……」

そう彼女は叫び、僕の頬に暖かいしずくを零す。

姉さんは隅の壁に寄りかかってどこか自嘲的に喋った。

「少なくとも私が原因じゃないですよ」

「てめえも分かかっていてコイツを不幸にした一人だろうが！」

「……………熱血ですね」

ナナシさんは立ち上がり、姉さんに掴みかかる。姉さんはそれにそっぽを向いて微笑んだ。

「何関係ないってツラしてんだよ！ ええ？ 聞いてみるよ。教えてやれよ、優一に本当のことを！」

「それは……私の役目じゃないですから」

ナナシさんは姉さん突き飛ばすと僕の近くに近づいた。胸が痛いのだろうか、胸をぎゅっと押さえている。

「な、なんでそんな綺麗な瞳で、そんなボコボコの顔で笑うんだよ。お前、爪ねーし、手のひら釘刺さってるってのになんだよ。腕とかぶらんぶらんしてるしよ…… ああ、クソ！ そうじゃねえだろ、あたし！」

彼女は自分の顔をはたき、僕の目を真っ直ぐ見る。力強い視線が僕の瞳とかち合う。

ナナシさんは奇妙なほど丁寧にいった。

「お前に聞きたい。お前、姉ちゃんの名前をいつてみる」

「急にな」

「いいから、いつてみる」

「姉さんの名前は……」

「名前は？」

「名前はなんだったろう。」

何かが僕の内側で崩れ落ちるのを感じる。汗が噴出し喉が渇く。

僕はどこかを見るわけでもなく、目を彷徨わせる。姉さんは相変わらず僕を見ない。

「親の名前を思い出せるか？」

「いつから姉ちゃんと二人で暮らしている」

「なんで姉ちゃんの名前を知らなかった？」

「生活費はどうしてた？」

「いつから暴行されてた？」

「お前はいつからこの家で暮らしていた？」

ナナシさんの口から紡がれる言葉に一切僕は言葉を発することが

できない。頭の奥がちりついて熱い。

「うっうっ……」

「お前の姉ちゃんには本当の姉ちゃんじゃない。そうだろ、薫！」

薫と呼ばれた少女は顔を上げるとつまらなそうに僕にいった。

「……そうですよ、性は同じ姫野ですけど元のお姉ちゃんとは別人です」

それは。

どういうことだろう。

僕がいまいち呑み込めないでいるのを察したのかナナシさんは僕に聞かせる。

「落ち着いて聞けよ、優一。アイツはお前に自分を姉だと思い込ませて、もてあそんでた変態だったんだ」

「あ……あああああああああああ！」

今までのことが嘘でした。

そういわれて僕は正気でいらなかった。

だってそれって、僕が犯される必要もなかったし、吐く必要もなく、殴られる必要もなく、家に帰りたくないと思うこともなくて、母さんのことも嘘で。

普通に暮らしてよかったってこと。

「ぼ、ぼくは本当に“姫野優一”なの……？」

「……あたしはそうだと思う。だけど本当のことはわからないんだ。なんせ数年前に県内で姫野の性を持つ男の子が行方不明になってる」

「ぼくは誰……なんだろう」

僕はまた吐いた。だけど既に吐き散らかしていたので出るのは胃液だけだった。

胃液って黄色いんだなあと僕。

ナナシさんは僕の背中を優しく叩きながら、元姉さんにいう。

「薫、お前は刷り込んだのか？ 割り込んだのかどっちだ」

「そんなこと、今となってはどっちでもいいじゃないですか。どちらにせよ、私はお父様に連れ戻されて謹慎処分です」

「てめえ、ふざけんなよ。ここまでしといて法で裁かれないとでも思ってたのか！」

彼女は長く伸びた髪の毛を優しく撫でつけながら上品に微笑む。

「思っていますよ。私の家がお金持ちってこと、ご存知でしょう？」

「……そうかよ、じゃあやってみるよ。あたしはあたしの後ろ盾全部使ってお前を糾弾してやる。お前の痴態を収録したビデオもガンガン使つてやるよ！」

「ああ、あなたも一応高貴な生まれの方でしたね。柳川さんといいあなたといい、上品な方は他にいないんですか？」

「てめえのそういう選民思想はどうだっかっていいんだよ、全部きつちり話すことが約束だったよな。お前の親父に今の態度を教えてやるうか？」

姉さんは溜息をついて僕を見る。そして上品に微笑むとゆっくりと話し出した。

十一夜

優一さんが私の中学校に転校してきたのが始まりだったと思います。

名前が同じということもあってクラスメイトが姉弟か何かかと思うものですから、私も面白がって遠くで暮らしていた双子の弟だと答えていました。

家は事情故に別居中だと、顔はそれ故に似ていないかもしれないと。

暫くしてあれは冗談だったんだという機会を伺っているとどうにもおかしい。気が付けばその話は“公”のものとして広がっているじゃないですか。

私は狐につままれた気持ちになって彼に会ってみることにしたんです。

きっと冗談の通じる面白いかたなんだな、最初はそんなことを思っていました。

私は事前に調べ上げていたこの家にやってきました。

表札をみて本当に同じ性なんだということにも驚いたんですが、やはり一番驚いたことは庭で花に水をあげている可愛い少女が実は男性だったことです。

「そんなことはどうでもいいんだよ」

そうですか。

まあ私は静かな家を見て、家族は留守なのだと判断しました。だから、どちらかに出かけているのかと彼に聞いたんです。そうしたら優一さん、母は既に他界していて、父は海外、姉は遠いどこかに暮らしているなんていうじゃないですか。

「遠くということは、お父さまと同じ海外ということですか？」

「わかんない。どこか遠くだっていつてたよ」

「ということとはこんな大きな家で一人暮らしをしているということですか？」

「まあ、割かし一人ですな」

彼は明らかに変でした。でも決して悪い人間じゃない。

私は毎日彼と話をすることが楽しみになっていました。彼はどんなくだらないことにも真剣に考えてくれる。辛いことには私以上に涙し、嬉しいことには私以上に笑ってくれました。

ある日、私は面白がって彼に家族のこと聞いてみました。そうしたら姉は自分に何かをしたせいで遠くに連れて行かれたというじゃないですか。

更に私は深く彼を追求してみました。

すると彼は頭を抱えて唸りだし、記憶が吹き飛ぶんです。それで私に自分は何で花壇のところに立っているのかと聞くんですよ？ええ、それはもう驚きました。

そして同時に何かトラウマを抱えてるのだと理解したんです。何日もあしげく通いつめ、彼を観察した結果彼は心の病を患っていること、その手の病院に通院していることを知りました。

そして……まあこれは後々なんですけど、姉に暴行されていたことを知りました。

私は彼の記憶が飛んだ後はどんなことも信じるという特色を使い、姉だと信じ込ませて彼の家を探索しました。

すると恐ろしいものが出るじゃないですか。

クローゼットの隅には彼を犯していたビデオ、鍵のかかった引き出しには何をしてきたのか克明に記した日記。

そんな目をしないで下さい。私が最初にこうしたんじゃないんです。既に私が来る前から優一さんのお姉さんは“辛いことがあると記憶を飛ばす”ということを利用していたんですから。なんなら日記をお見せしましょうか？

「……いや、いい」

そこまでは私のただの興味本位でした。ええ、誓っていますよ。ですけど。

ですけど、夕飯を運んでくれていた優一さんがスプーンをテーブルから落とした時に、全ては変わってしまったんです。

彼は顔を真っ赤にしながら土下座して何度もごめんなさいというんです。私とその異様な様子に呆然としていると彼は自分から服を脱ぎだして、ひざまずきました。

そうしてこういんです。

「僕は何にもできない。だめな弟です。お、お仕置きして下さい」
って。

目に涙を溜めて、羞恥心に震えながら子犬みたいな顔でいっすよ。

普通ならあなたが今言っただみたいに胸糞悪いというのでしょうか。あるいは嫌悪するかもしれませぬ。

でも、でもですね。

私は違っただですよ。

へその下、その奥がじんわりと熱くなるのを感じました。

今でもよく覚えてますよ、ごくりと喉の音があった時のことを。

うだるように熱いあの夏の日のことを。

私は胸の高鳴りを堪えながら、ゆっくりと彼の髪を撫でました。

彼はぎゅっと目を瞑ってそれに耐えるんですよ、可愛いと思いませんか？

サラサラの髪を撫でた後、私は彼をゆっくり噛み締めるようにして抱きしめました。抵抗しないことは日記で知っていました。

本当のお姉さんがそう仕込んだということだね。それから私は処女を彼に

「もう、そういうのはいい！ 先に！ ……先にいつてくれ」

……まあ全てが終わった後に罪悪感がなかったといえば嘘になります。でも私は知っていた。

「コイツに刷り込みができることを、か」

に似た何かがゾクゾク沸きあがってきたんです。

気がついたら私は裸で彼は血まみれ。

でもそのおかげで柳川さんは“矛盾を指摘すると優一さんが殴られる”と取ったようで何も言わなくなっただけですね。

それから彼女も優一さんに手を出したり、彼女といざこざがあったりしていましたが、互いに暗黙の了解があつて上手くいったんですよ。

ああ、それですか？ それは互いが互いに“記憶が消える”というのと“刷り込みができる”ということを利用していたのでその矛盾を解かないということ、ですね。

だけどあなたが現れて、全て変えてしまった。

私から優一さんを取り上げてしまった。

私たちから。

ねえ、優一さん。私、今いったようにお金が沢山あるんです。私と一緒に暮らしませんか？好きなことができて、好きなものが食べられますよ？心の治療もできると思います。もう、辛いことはしません。痛いこともしません。バットで殴ったり、焼きごてもなしです。一緒に恋人として暮らしませんか？遠い遠い、誰も知らないところで暮らませんか？貴方が望むなら私の屋敷でも構いませんよ？ねえ、こっち向いて下さいよ。お願いですから。

私本当は貴方のことが好きだった。優しく話をしてくれる貴方が。どんなこともちゃんと受け答えしてくれる貴方が。大切な貴方がいなくなるのが怖くて、いとおしすぎて、いつか私の手から離れていくなから私が貴方を壊したかった。

どうして私、そんな酷いことを思ったんでしょう。誰だつてそんなこと望んでいないはずなのに。

初めて会った時のように私に、私に微笑んでください。

ねえ、聞いてますか？ねえ。

十二夜

彼女はぼんやりとした口調で僕に問いかけた。

一緒に暮らそうと。ごめんなさいと。

でも僕の耳に届くことはなくて、彼女がそれに気がつくのが遅すぎて。

僕の片方の腕は小枝のようにぽつきりと折れていたのでナナシさんに手伝ってもらいながら僕は服を着替えた。

着替えを終えた僕とナナシさんは彼女を地下に置いたまま家を出た。

家の前には二台の黒塗りの車が止まっていて、中からコワモテのナイスなミドルが出てきてナナシさんに話しかけた。

彼女曰く刑事とのことだ。

僕らは刑事さんの車に乗り、病院に行った後、事情聴取を受けることになった。

病院の待合室で僕は涙を流した。何か僕の中でやっと決着がついたのだと思うとそれは止まらなかった。

「……僕、泣いてばかりですね」

「人間泣かなくなったら終わりだよ。そういう意味じゃ、お前の心はまだ生きてるし、壊れてない」

「なんか臭いですね」

「はったおすぞ」

それからは全てがあっという間に過ぎ去ったように思う。

僕の片手はギブスで、まだ心には傷が残っているけど僕は僕の家をもう恐れることはない。

黒塗りの扉のインターフォンを押す。ピンポンとチープな音が聞こえた。

僕らは学校に行かず、真昼間から会うことにしていた。

「らっしやい」

「ここは八百屋ですか」

「そうだと思うなら回れ右して帰れよ」

「いや、八百屋に用があるのですよ」

「ここは魚屋だ」

「それにも用が……」

「まあいい、入れ」

僕は奥に通される。相変わらず動物だらけだが動物特有の臭いはしない。きつと手入れが行き届いてるんだろう。

ソファアに座る。ナナシさんはコーヒークップに緑茶を入れて僕に差し出した。

「あれからちゃんと病院に行ってるか？」

「ナナシさんは学校行ってる？」

「あたしは天才な上に金持ちだから行かなくていいんだよ。で、お前の方は行ってるか？」

「両方、ちゃんと行ってるよ」

「そうか」

両方という言葉にナナシさんの顔が少し曇る。

「元姉さん……薫さんはどうなつたんですか？」

「結局お咎めなしだとかふざけた事になりやがった。司法はホント腐ってるよ、心身喪失だ？ さげんなよ。……今は自宅で謹慎処分ってところだろ。もしくは海外に追放」

彼女は舌打ちをし、嫌悪感をあらわにした。緑茶に口をつけ、また呟く。

「結局、お前のことは何一つ分からなかった。お前の親父は海外に行っただけで連絡がつかないし、姉にいたってはどこにいるのかもわからない。お前の口座に金が振り込まれてるのを見る限り、少なくともお前の親父が生きてることは確か見てえだけだな。まあ、結局本当にお前があの家の人間かどうかは残念だけど、薫しか知らねえことになる。そして薫があたし達に語ったことが真実だとは限ら

ねえ。もしかしてお前は本当に誘拐されたのかもしれない」

「じゃあ、誘拐元の家族は？ ビデオの少年の顔は？」

ナナシさんはその言葉に怒気を孕み、答える。

「あの胸糞悪いビデオの少年はお前だったよ。オリジナルの方は薫がどっかにやったらしい。捨てたのか燃やしたのか隠したのかはわかんねえけど、そういうことだ」

ナナシさんは心底気分が悪いといった顔で貧乏ゆすりをした。そして走り回るフェンにうるせえぞと吼えた。

フェンは八つ当たりだろーみたいな顔でしょぼくれた。

「それじゃ、元の家族の人は？」

「死んでる」

「え？」

「誘拐されたその日に全員殺されてる。近所付き合いもよくない方で何にもわからなかった」

「姫野つて名前はなんか呪われてるみたいだね」

もしも僕が本当に姫野優一だしたら。姫野加奈子は僕を犯し、薫は僕を洗脳し、どこかの姫野は誘拐され、家族は殺され、そして僕は犯され狂った。

僕はなんてことのない一言のつもりだったけど、ナナシさんの秘孔をついたようで彼女は僕をみて苦しそうな顔をした。

「そ、そんな明るくいうことじゃねえよ！ お前の地獄はそんな軽々しく片付けられるもんじゃねえだろ！ 辛かったらもつと辛い顔していいんだ。もう誰もお前をしからないし殴らないんだからよ…」

「確かに辛かったけど、僕は今元気だし、ナナシさんがまた助けてくれたから」

「違う、あたしは……！！」

ナナシさんは急に立ち上がる。

僕はそれにびっくりして目を瞑った。

ゆっくりと目を開くと、ナナシさんは唇を固く閉めて床に視線を

落としていた。

「どう、したの？」

「……何でもねえ、何でもねえよ！」

「じゃ、ごめんなさい」

僕は頭を垂れて、フェンのようにしょぼくれた。ナナシさんは席を立ち、饅頭とお茶のお代わりを出す。

「……これをお前に話すのはどうかと思ったけどよ、当事者だ。話しておこうと思う」

両手でお茶を受け取り、僕は首を傾げた。何かまだあるのだろうか。

「柳川月のことだ」

「ルナ？」

どうことだろう。ルナが何かしたのだろうか。

「それよりもナナシさん、ルナのことを知ってるの？」

ナナシさんはその言葉に口をぽかんと開けた。そしてこめかみを押さえる。

「……冗談はやめろよ、オイ」

目はどこか空虚で口元は微笑が張り付いている。

僕は何でそんな顔をするんだろうと不思議に思った。だから僕はいう。

彼女に自分の知っていることを。自分の情報を。

「ルナは僕の友達だけど何かしたの？」

「お前、まさか」

ナナシさんは僕の肩を掴んだ。

十二夜 裏

人のしがみつこうという欲望は酷く醜い。

姫野薫。

こいつも醜かった。最後の最後で優一にしがみつこうとした。

もう二度としない？ すまない？

そんなことが本当にできて、本当にそう思えるならてめえはまず死ぬべきだし、世の中に犯罪はこつも起こりまくったりしねえ。

あたしは地下室にアイツを置き去りにして、姫野優一の着替えを手伝った。

左腕の骨が折れてしまっている上に、何も着ていないのだ。あたしは必然的に手伝う。

まずは軽くシャワーで汗を流し、タオルで拭いてやる。優一は爪を全て剥がされたせいかわ水を酷く怖がった。

着替えを手伝いながら思ったことは、本当に同年代かと思うほど手足が細いことだった。筋肉も薄く、あばらが浮いて見える。

もしも女だったなら男がほつとかないだろう。少し負けた気がした。

家の前には覆面のパトカーが二台止まっていた。誰が呼んだんだ？眼鏡のエリート感バリバリのオヤジと人の良さそうな白髪交じりのオヤジがあたしに話しかけてきた。

二人は警察手帳をあたしに見せて、名乗った。喋る仕事は年配の方の役割らしい。

「いやー、家から誰か出てくるまで入るなっていわれてましたけど、何か起こってからじゃ遅いですからね。よかったですよかったです」

端々感じられる言葉からどうやらあたしが何者かも、事情も全て理解していることが分かる。

「あたしまだ通報してないですけど」

「ええ、でしょうね。別の方が私どもに働きかけまして」
眼鏡の方の男がハキハキと答える。

「柳川月ですか」

「それは残念ながらお答えできませんなあ。守秘義務ですのでね」

「それで柳川薫さんはどちらにいらっしやるんですか？」

「家の地下にいます」

若い方が直ぐにインカムで別の男に指令を告げる。年配の男はニコニコとあたしに詳細を聞いた。

優一が怪我をしていることを伝えると病院まで送ってくれらった。その後は調書を取るとのことだろう。

終始、優一はどこかぼんやりとした表情だった。車の中でも流れる景色をじっと見ていた。

そして病院の待合室で急に泣き出した。顔は無表情、だけど瞳からはポロポロとこぼれる。

優一自身もそれに驚き、零れる涙を止めようと手で押さえるが止まらないようだった。

次第にそれは嗚咽の混じったものになって、感情の籠った叫びに代わった。

『オヤジも母さんもどういうことだよ！』

『だから言ってるだろ、私たちは姫野をバッシングしないし追求しない。だがそれ相応の見返りは頂く』

『そういうことよ』

『金の問題じゃねえだろ！ あたしの友達が何年間も犯されて心をポロポロにされたんだぞ！ それがルートの確保と市場の明け渡りで済む問題かよ！』

『姫野のところとやり合っても無駄に傷を広げるだけで、何もプラヌにならん』

『母さん！ 母さんも同じ考えじゃねえよな！？』

『同じよ、私たちはあなたに何か起こったならそれこそ戦争を仕掛

けるでしょうけど、その子は赤の他人でしょ？ 企業の名前を使つてまで赤の他人をバックアップできないわ」

「……………なんだよそれ」

「それに柳川のところのお嬢さんもこの件に関わってるらしいじゃないか。仲介役として父親自ら名乗りを上げたから驚いたよ」

「もう既にあなただけの問題じゃないのよ、わかってちょうだい」

「大人になれ。自分のしたいことがあるなら力を入れる。以上だ」

そう父はいい、通信が切れる。

「一応、警察や病院のことは全てこちらで面倒みるから。暫くは護衛がつくかもしれないけど我慢してね」

「……………」

それってあたしと優一が何か言わないように監視するってことだろ。違うのかよ。

母さんの通信も切れた。

世界はあの畜生を生かしたままにするらしい。世間的には一応裁くが心神喪失ということで罪は問われない。メディアはそれを放送することはないし、薫がバッシングを受けることもない。

あたしはヘッドセットを取ると床に叩き落とした。

動物達が心配した顔で見つめる。あたしは何でもないといい、来客を告げる音にはつとまった。

もうそんな時間か。

あたしは優一を家に迎える。細いジーンズに白いシャツ。

腕にはギブスがはめられている。

相変わらずあたしはジャージ。

リビングに奴を通し、あたしは調子はどうか聞く。

奴はフェンの顔を撫でながらあたしの質問に答えた。

心の病院にもしつかりと通っているらしい。

聞いたところによると優一の心の傷は思った以上に深く、直る見込みはないとのことだった。

意味はあるのか分からない、けどもしか可能性があるなら治療をした方がいい。

ソファーに座ったあたしは優一の質問に答える。

まずは薫のこと。自宅謹慎とはいうがそれは嘘だった。奴は野放し。そしてそれは既に決まったこと。

「じゃあ、誘拐元の家族は？ ビデオの少年の顔は？」

姫野は視線を落として、弱気に聞いた。やはりまだ辛いのか額には汗が浮かんでいる。

あたしはビデオの内容を思い出し、いらだちながら答える。

あれは薫が撮ったもの全てだった。実際の姉が取ったというビデオはどこにもなく、残っていたのは倒錯的な日記だけ。

脳裏に泣き叫ぶ少年が映し出されて気分が少し悪くなる。

「それじゃ、元の家族の方は？」

あたしは既に死んでいることを伝えた。誘拐されたその日に全員ひき肉にされたという事は隠して。

ひとしきり終わると優一はお茶を飲んだ。少し重めの沈黙があたし達を包む。

優一は顔を上げると笑いながらあたしをみた。

「姫野って名前はなんか呪われてるみたいだね」

そう呟く。

だから、てめえは何で。

そんなにも明るくいうんだよ。

骨を折られて泣き叫んで、犯されて爪を剥がされて、殴られて蹴られて踏みにじられて、ヤク打たれて頭おかしくされて、自殺一歩手前までいって。

そんな数年を送ってきたのにそんな軽くいうなよ。

もつと悲しんでいいんだ、もつと泣いていいんだ。

何がお前をそうさした？ 誰がお前を救ってくれなかった？

優一はあたしの言葉にはにかみながらいう。

「確かに辛かったけど、僕は今元気だし、ナナシさんがまた助けて

くれたから」

あたしはその言葉に胸をえぐられた。

「違う、あたしは……!!」

何もしていない。

何もできていない。

最初もそうなることは考えれば分かったはずだ。

今回も考えれば分かることだった。

柳川月が全て仕組んだことだって言いたかった。あたしはアイツの人形でしかなかったと。

姫野が診察を受けている時、一通のメールが届いた。

『Congratulations!! hahahaha』

全て計算ずくで奴はやっている。

あたしはただ役割を演じただけ。

優一は頭を抱え小さく震えていた。殴られると思ったのだ。

奴は怯えながらあたしの顔色を伺う。

「……何でもねえ、何でもねえよ!」

「ご、ごめんなさい」

ああ、あたしは何にもできちゃいない。今ここで姫野をへこませようとするんだよ。

あたしは席を立ち新しいお茶と饅頭を出した。

そして言葉を切り出す。

「これはある情報筋から手に入れた話だ。お前に話すのはどうかと思っただけよ、当事者だ。話しておこうと思う」

柳川は情報をわざと漏らしていた。だけど知ってしまったのならそれを無視することはできない。

優一はあたしの言葉に首を傾げる。

「柳川月のことだ」

「ルナ?」

優一は長いまつげを瞬かせて不思議そうな顔をした。

「それよりもナナシさんルナのことを知ってるの?」

コイツはなにを言ってる？

何かが噛み合っていない。同時に何かが見つかる。

いや本当は分かっている。だけど、信じたくない。頭の隅に置きた
い。

だってそれじゃあたしは一体何をしたんだ。

「ルナは僕の友達だけど何かしたの？」

「お前、まさか」

柳川月にされたことを“忘れた”のか。

アイツは全てこの為に。アイツはこうする為に。
あたしを。

十三夜

「い、痛いでござる」

ナナシさんの爪が僕の肩に強く食い込む。

彼女は言いかけた言葉を飲み込むとすまないといい、僕を解放した。

目頭を押さえ、何か一人でぶつぶつという。

「そうか、既に薫のことも 負荷 順々に 消えている

薫は常に上書きされていたから」

犯人はお前だと言われそうな雰囲気だ。

断崖絶壁で罪を告白するシーンを撮らされるのか。

「それでナナシさん、ルナがどうしたの？」

「あつ、いや気にしないでいい。本当にそれが正しいかわかんねえし、眉唾物の情報だからな」

僕の言葉に我に返ったナナシさんは当たり障りのないことをいった。

何か彼女なりに考えることがあるらしい。

「ナナシさん、僕明日学校に行こうと思うんだけど」

「……そうか、薫は諸事情による休暇ってことになってるし、一通り終わった後だ。復学するのもいいかもしれねえな。あたしも明日は学校に顔出すよ」

「わかった。いつもありがとう」

「それと、これ」

ナナシ救援カードを手に入れた！ それを捨てるなんてとんでもない！

「何かあつたらそれを叩き割れ」

「うん、それじゃあ僕はこれで失礼いたしやす」

「そうか、病院か」

「そうそう、それじゃあまた明日」

「姫野」

「ん？」

「いってらっしゃい」

「あ、えっと。……いってきますん」

「どつちだよ」

ナナシさんはカップ片手に投げやりにいう。もう慣れたものだ。

僕はフェンに見送られてナナシさんの家を後にした。

病院の先生も凄く優しい。看護婦さんは僕にナース服を着せようとするほど親しみやすい人だ。

僕はベッドの上でまどろみながら思う。

なんだか充実してるなあと。幸せだなあと。

まだ時々、嫌な思い出が浮かび上がるけど、もうそれは過去のことだ。

あんな辛いことはもう訪れない。

僕は久しぶりに部屋の鍵をかけずに寝た。

久しぶりの学校。

朝、ぼうつと席に座っているとさっそくルナが話しかけてきた。

彼女はハーフラしくて、瞳は薄いブルー。髪は少しウェーブのかったブロンドだ。

「優一、おはよう」

「……おは、ようルナ」

「どうしたんだよ、優一？」

ルナは爬虫類のような目で僕を見ると首を傾げた。

「わかんないけど、今僕はルナのこと一瞬、怖いと思ったんだ」

「今は怖くないんだ」

「うん」

「何で怖いと思ったかわかる？」

「それが、わかんないんだ」

「……不確定要素だったけどやつとだよ。やっぱり長かったなあ」
「どういうこと？」

「なんでもないよ、こっちの話し。あれ、今日はお隣さんと一緒にやないんだ」

「隣の人、滅多に学校来ないからね」

「ふうん、一人で動いたんだ」

ルナは指をカタカタと動かした。そして携帯を取り出して、何かを操作。

それが終わったららしいルナは僕の隣の席のイスを引く。

「うん、今日はあだし、優一の隣で勉強するよ」

「隣の人来たらどうするんだよ」

口癖が移った。

それを見てかルナは少し微笑む。

ルナは滅多に笑わないから僕は内心驚いた。

「あたしの席に座らせる」

「うわ、譲る気ゼロか」

彼女は僕の隣に座ると僕の方にしなだれた。クラスのどこから舌打ちと禍々しい視線が向けられた気がした。

ルナはこう見えても凄く美人さんなのだ。そして同時に不思議さんでもある。

「ノートとか筆記用具とかどうするんだい」

「いかん、既に彼女がここに滞在することを認めてしまっている。

「ノートなんて無くても頭の中でできるよ。必要なものは優一から借りるモン。教科書も見せてもらう」

「無事解決してしまった！」

そして天才さんでもあった。

「あは」

僕らは青空を眺めながら、ルナの作ったおにぎりを食べていた。まだお昼には程遠い。

「ただルナがお腹減ったというので授業をサボって早めのお昼を取ることにした。」

「ソフトボールほどの大きさのおにぎりを食べる僕を彼女はじっと見つめた。」

「優一、美味しいかなあ」

「うん、美味しいよ」

「どう、美味しいんだよ？」

「ごま油と仄かな塩味が美味しい。具が焼きたらこなのもグッド」

「お嫁さんになれる？」

「なれるなれる」

「……………」

ルナはぼうつとおにぎりを眺めるとムシヤムシヤとかぶりつき始めた。急な動きに僕はびっくりする。

案の定、咽た彼女は僕にお茶をくれとジェスチャーをした。

「これがほしいのか。」

「いやしんぼうめ！」

殴られた僕はおずおずとお茶を差し出す。

「死んじやうかと思ったよ」

「何だか懐かしいね」

「何が？」

「昔もこうやって一緒にご飯食べて、勉強したりしたよね」

ルナは目を丸くして僕を見た。

「優一、覚えているんだ」

「うん、覚えてるよ。中学の時もさ、あの時はパンだったけど……」

「あれ？」

「あれ、何故だろう。」

「昔のことを思い出したら涙が出た。」

「まさかノスタルジーに浸ったせいじゃないよな。」

「優一、あたしと……あつ、の」

ルナは珍しく言いよどむ。何度も目をキョロキョロさせてどこか

不安げだ。

「ん？」

「……あたしと、いつしよに」

一度手のひらのおにぎりにかぶりつき、お茶で流し込んだ彼女ははつきりと言った。

「あたしと一緒に暮らそう」

「え！」

それってどういう意味だろう。

だって僕は一応男で彼女は女で僕らは年頃で。

あーとかえーとか言葉を濁す僕に彼女はどこか遠くを見てつぶやく。

「優一、あたしのこと嫌いなんだ」

「嫌いじゃないですよ！」

何故か敬語の僕。

「あたし知ってるよ。この前、他の女の子の家泊まったでしょ」

ああ、ナナシさんのことが。そういえば彼女は一応女の子で……
って聞かれたらサンドバックにされそうだな。

「そ、それはルナが僕の中で異性であって、ナナシさんは親友でええつと」

「じゃあいいんだよね」

「あ、はい」

よくねえだろ！

彼女の迫力に僕は二つ返事で答えてしまった。

十四夜

彼女は携帯電話にメールが入ると先に教室に戻るように僕にいった。

「僕だけ？」

「そつだよ、今からあたしのお人形さんが来るんだ」

「わかんないつて」

彼女特有の言い回しなのだと納得して僕は屋上を出た。

今は体育の時間で授業は既に始まってしまっている。僕は誰もいない教室に水筒と弁当箱を置くと、体育館へと足を向けた。

腕が折れているのでどの道、運動はできないのだけど一応見学する有無を伝えなければいけない。

授業内容はバスケットだった。

角刈りの鋭い目つきをした教師のところへ向かい、僕は恐る恐る戸を叩き、扉を開いた。体育教師は体育館の中にある小さな部屋の二階にいて、日誌をつけていた。

生徒の自主性を尊重してサポータージユと決め込んでいるようだ。柔道の教師らしいが年中日焼けしているのは何故だろう。

「あの、遅れてすみません」

「ああ、姫野。おせえじゃねーか」

「すみません」

「つたく。今日も見学か？」

「はい」

「見学の時は運動着に着替えてこい」

「でも僕、腕折れてるんです」

そついつて僕は腕が教師に見えるように体を動かす。

「……しょうがない、先生が手伝ってやる」

そついうと席を立ち上がり僕のベルトを外しに掛かった。

啞然としている僕のシャツを剥ぐ。

「ひ弱だな、姫野は」

「あ、え？」

彼はそういうと僕の体を触ったり、撫でたりした。

「ほら、ケツにも足にも筋肉がない。腕なんて、先生の手で一周できるし、肌が真っ白だ」

「あ、あの、僕運動着は持ってきてないんです」

「何言ってるんだ！ 男は裸だ！」

「は？ ええ!？」

訳の分からない理論を唱える体育教師は急に服を脱ぎ出し、全裸になった。

脂ぎった額と胸毛が暑苦しさを演出する。

「ほら、姫野も先生の体を触ってみろ」

「いや、いいです！」

「先生も触つただろ。不公平じゃないか！」

そう目を見開いて一喝する。僕はしぶしぶそれに従い、おっかなびっくり足や腹を触る。

触るごとに角刈りの教師は口から生暖かい吐息をはいた。

僕の体温が低いせいだろうか。それとも彼の体温が高いのが原因だろうか。

「なあ、姫野。お前今一人暮らして何かと大変だろ」

「あ、はい」

背中を触る僕に彼は振り向かずに行った。そして時計を確認した。
「いろいろ悩んでることとかあるだろう、先生が相談に乗ってやるよ」

彼は振り向く。何かをおっ立てて。

喉が生唾を飲み込み、脂ぎった顔が僕を舐め回すようにみる。

「え、遠慮します!!」

「じゃあ先生の悩みを聞いてもらおうか。先生な、心の病気で姫野みたいな生徒みるとその病気が止まらなくなるんだ」

「あっあの、えっと……」

その時、ドンという低い音。衝撃波が僕達を通り抜ける。どこから音が聞こえたのだろうか。僕らはそれを探す。

そして先ほど僕らがいたあの部屋から小さな煙が上がっているのが見えた。

「柳川……やりやがったな！」

ナナシさんはそう吐き捨てると何処かに駆けていった。

僕はその言葉を租借する。

「ルナがアレをやった？」

僕はルナの家の中にいた。ルナらしくその部屋は酷く合理的だった。必要最低限のものしか置かれていない。

「優一、何だよ？」

「え、僕なんか今いった？」

「優一、今あたしがやったとかなんとかいつてたよ」

「あ、いや今日爆発事件があったよね。……………それ、ルナがやったって聞いてさ」

彼女はココアの入れたカップを僕に渡すと隣に座った。ソファーが少し沈む。

「優一、あたしがそういう酷いことする人間だと思ってるんだ」

「いや、そうじゃなくて」

「だってそれってそういうことだよ」

ソファの上で三角座りになりいじける。

「あ、ごめん」

ルナは僕にしなだれる。そして平坦な顔で僕に言った。

「優一、じゃあキスしてよ」

「……ええええ！！」

「してくれないなら、あたしずっといじけてるよ」

自覚的なストライキ。それってどうなんだと僕。

あつあつという僕を彼女はじっと見つめる。

僕は観念して彼女の頬にキスをした。

顔が酷く暑い。恥ずかしさを誤魔化す為にココアを飲む。味なんかするもんか。

ルナは相変わらず機械的な目で僕を見つめ、呟いた。

「ちよっとトイレいってくるよ」

「う、うん」

少女は鏡を見つめ何度も熱い息を吐き出す。そして洗面器にへたり込み、また鏡に映った自分の顔を見る。

瞳孔が開ききり、頬は赤く染まり、動悸が激しいのが分かる。耳の奥がバクバクと音を鳴らす。

性的な欲求とは違う熱が頬を伝い彼女を苦しめていた。

彼女の脳は重大なエラーを吐き出す。

なんだこれは。

彼を辱めていた時とは違う悦びが全身を覆っている。

分からない。

何故、ここまで私が恥ずかしいのだろうか。

辛いし、苦しい。

だけどずっとこのままでいたい。

この苦しみを幸せと感じてるのか私は。

何が原因なのだろうと、少女は先ほどのことを最初から思い出す。

そして全身の毛穴が開くような刺激に彼女は胸を押さえ、また洗面器にへたり込んだ。

駄目だ、このままだと私は壊れる。

少女は一度冷水で顔を洗い、先ほどのことを忘れることにした。

リビングに戻ると彼はテレビを見ていた。

「おかえり」

「うん、ただいま」

彼の桜色に染まった唇に目が行き、手から汗が出る。

至極自然を装い彼女は彼の肩にしなだれかかる。先ほどよりもい匂いが鼻をくすぐった。

手を握りたい。

キスをもつとしたい。

彼に甘えたいし、甘えてほしい。

すればいい、させればいい。そう彼女の脳はいう。

方法はいくらでもある。やればいい、と。

だかしかし、胸の高鳴りは何故かそれを許さず、彼女を石に変えたままだった。

自分はずいに狂ったのだろうか。

黙り続ける彼女を不思議に思った彼は首を傾げる。

「顔赤いけど風邪でも引いた？」

「風邪じゃないよ」

彼は彼女のおでこに手を当てた後、自分のおでこを当てた。

「うーん、どうだろ……ルナ？」

彼女は卒倒した。

十四夜 裏

奴をメールで屋上に呼び出したあたしは睨みつけるといった。

「どづいっことだ」

「何が？」

こちらを一瞥することもなく、奴はフェンスにもたれ掛かっている。

「薫のこと、優一のこと、そしてあたしにわざと情報を漏らしてたことに決まってるんだろ」

「あの時、あたしが優一を助けてたら、優一からあたしのしたことは消えてない可能性があったんだ。だからあんたを使ったんだよ」

「……つまりは自分の汚点を完璧に消すためにあたしを使ったってことか」

「そうだよ」

強く怒りを込めていうも奴はこちらを見ず、イヤフォンで何かを聞いているようだった。

あたしは一步前が出る。

「それで今はのうのうと何も無かったようにアイツに触れてるってのか！ その手でアイツにしてきたことを全部なかったことにして！」

「その苦しんでた記憶はもうどこにもないんだよ、今更どうこう考えたところで意味はないんだ。それにあたしは何一つ悪いなんて思っっていないよ」

「……ふぎけんなよ。じゃあ、優一は何の為にあんなに苦しんだんだ。なんであんなに助けを求めて、嫌がったんだ？ 記憶が消えたらはい、終了？ そんなんで納得できるかよ！」

あたしは知っている。

夜、心の傷のせいで眠れなくなったアイツを。トラウマのせいでゲロを吐き散らかすアイツを。苦しみから開放されようと死のうと

したアイツを。

それが嫌で、それが辛いから、耐え切れないから忘れるようにできちまったんだじゃないのか？ だから忘れたんじゃないのか？

それを無かったことにしようとする目の前の女が許せなかった。

奴は人形のような平坦な顔でこちらを向いた。

「優一がいうのは分かるけど、あんたは関係ない」

「関係ないだ？ ふざけたこと言いやがって！」

「あんたの役割はおしまい」

ここまで巻き込んでおいて、用が済んだらさっさと消えるだと？
ぶっ殺してやるうか。

だけどあたしにはまだ聞くことがあった。

「……何で薫を庇った。お前に庇う必要は無かったはずだ」

「あたしが関わってるって知ればあんたが怒るのが分かってたから」

「……………もう、何もいうことはねえ！」

あたしは奴に近寄ると胸倉を掴み持ち上げる。

「……どうした？ 体もお人形みてえに固まっちゃったか？」

「あたしに構ってる暇ないと思うんだ」

真っ白な手が差し出したイヤフォンに目が行く。

あたしはそれを片手で受け取り、耳につける。

そしてそれが何かを直ぐに悟る。

これは盗聴で、優一が変態教師にセクハラされてて。

「優一が酷い目に合っちゃうよ」

「なっ……………てめえ！」

「あたしがね、ずっと付いていないと直ぐこういうことになるんだ。

あたしが優一に“する”前から、あの偽者が優一の家に住む前から何度こういうことがあったがあんたは知らない。あんたはあたしが離れば全て解決すると思ってるけど違うんだ。誰かがずっと付いていて上げないと優一は直ぐに誰かに“ダメにされる”んだよ。そしてそれを止めるのはあんたの役割じゃないし、今も優一を一人にして危険な目に合わせてるあんたがどうこう言えることじゃないん

あたしが言えばコイツはまた苦しんで、思い出したとしてもそれは幸福とは呼べなくて。

このままコイツは忘れたままであるべきなのか。あたしは何が何だか分からなくなっていた。

優一は少し微笑み、頭をかく。

「またナナシさんに助けられちゃった」

違うんだ。違うんだよ。あたしは何もできてない。

相変わらず、何も。

その時、何かが破裂した音が耳に届いた。

見えるのはさっきの部屋。

アイツ、本当にやりやがった。

それからあたしは人づてに人死は出てないことを聞き、奴を探した。

屋上には黒いペンで床に“C o n g r a t u l a t i o n s !”
と一言書かれていただけだった。

綺麗なその筆記体はまるであたしをあざ笑っているようだった。

確信があるまであたしは一人でいようと思う。

だからあたしは潜ることにした。深夜、マンホールの蓋を外しているのはそういう理由があるからだ。

決して頭がいかれたわけじゃないし、チョビヒゲの配管工に憧れたわけでもない。

ガスマスクをつけて、ライトを照らす。

一步一步確かめるように手すりを掴み、降りる。

もしも柳川がそんなことを考えているなら、あたしは止めなくちゃならない。本当にこの町の人間を全員殺すつもりなら、止めなくちゃならない。

今度こそあたしは自分の意思でアイツを救う為に。救ったと胸を張って言えるようにする為に。

アイツを本当の笑顔にするために。

十五夜

「甘い匂いがするよ」

「そりゃケーキだからね」

僕とルナは部屋でケーキを食べながら、映画を見ていた。

白髪のマッドサイエンティストっぽい博士といいものはみんな日本製となかなか嬉しいことを言ってくれる青年のタイムスリップものだ。

本当は夕飯を作ろうとしていたのだけど、ルナの冷蔵庫は調味料と飲み物とアイスだけ。

どうやら彼女はずっと宅配ピザやお菓子なんかを主食にしていたようだ。

料理はよくするというので内容を聞いてみたところ野菜をぶつ切りにして塩でゆでたものだという。んなもん食事じゃねえ！

それを抗議したところルナはどこかに電話し、食材を届けるように指示した。暫くしたら届くとのこと。

金持ち恐るべし。

だから僕らは食材が届くまで時間を潰していた訳で。富良野は寒い訳で。

「つつわー！」

「……しよっぱい」

ぬるりと僕の首筋を生暖かい何かが滑った。首筋を押さえてそれを見る。

どうやらルナが耳の後ろを舐めたらしい。

「な、なんだよ」

「凄く甘くていい匂いがしたから舐めてみたんだよ」

「……あー、なるほどね！ って納得できるか！」

僕はルナのケーキを崩し、口に運んでやる。甘いの間違いなく僕の首じゃなくてこっちなのだ。

ルナは一瞬目を彷徨わせ、フォークにかぶりつく。

「つたくもう」

「ゆ……あ、の。優一の、ば……ん」

「ん？」

振り向くとルナがどこかぼうつとした顔で僕をみていた。フォークの上にはケーキのかけら。

「あんだった？」

「なんでもないんだよ」

そういうと彼女はフォークを置いて、ケーキを口に押し込んだ。そして無言で席を立つとトイレに向かった。

何がしたかったんだろうか。

丁度映画が終わった頃、食材がお宅訪問。

僕は料理を始めた。

しかしこの食材、優に一週間分はあるんじゃないだろうか。全部腐らせずに使い切れるか心配である。

ルナのメイド服で料理を作ってくれという要望を何とか断り（僕にしては珍しく）、鳥のから揚げと牛肉とピーマンの炒め物、ハンバーグ、野菜炒めを作った。

よく分からない組み合わせだけど美味しければ何でもいいのだ！僕はご飯を装いながら配膳もした。ルナは山の如し非協力的だった。

「ルナさつきから何見てるの？」

「優」

「そりゃなんとなく分かってるけど。」

「の、お尻」

「すこーん。」

僕は少し転びそうになった。

「僕のお尻を見てるとな？」

「エプロン姿の優一が凄く可愛いんだよ」

だ。
僕にとって姉さんの時のことのように。
だから僕は黙って彼女に背中を貸した。

配膳が終わり、僕らは手を合わせていただきますと唱える。そして飯に喰らいついた。

ルナは汚い握り方の箸で力士の如くお代わりしまくった。

「美味しいよ、優一」

「てんきゅー」

今度は巻き舌でトライ！

「でもそんなに美味しいっていつて食べてくれると嬉しいなあ」

僕は少し恥ずかしくなって頬をかいた。

ルナはそんな僕をみて、ポケーっとするので二倍速でご飯を喉に流し込む。

やっぱり咽で、僕に背中を叩かれながらお茶を飲んだ。

「ほら、口の周り汚れてる」

「あ……」

僕はティッシュで彼女の口周りを拭く。

彼女はまたご飯を流し込んだ。

途中、お風呂にルナが乱入してきたり、なんてことがあったりしててんやわんやだったけど、今僕らは同じ布団で寝ていた。

ルナの家には布団が一式しかなくて、僕らは二人で、それは必然で。

僕がソファで寝るといつても彼女は聞かなかった。

「優一、眠れないんだ」

「うん、少しね」

誰かと寝るといふのはナナシさんを入れれば二回目、何か“理由”もなしに寝るのは初めての経験だった。

今にも消えてしまいそうな弱々しいオレンジの光に彼女の顔は照

らされる。

「抱きついて、いいかな」

「……うん」

彼女は僕に抱きつくと、胸一杯に息を吸った。

「やっぱり、いい匂いなんだよ」

「お風呂入ったばっかだからね」

「そういう匂いじゃないんだよ」

そういうと僕の脇やら首筋やら顎の下やらを彼女は嗅ぎまわった。なんだか小動物みたいだなあと僕。

でも決して嫌じゃない。

そんな中、薄暗闇を眺めてたら自然と僕の口からそれはでた。

「あのさ、ルナ……」

「なんだよ、優一」

「ぼく……の姉さん。双子の姉さん。あの人にぼく……ずっと前から」

本当は姉さんじゃなくて、赤の他人で。

「うん」

「されてたこと……あつて、ぼく、それがずっといやで犯されて、ボロボロにされて。」

「うん」

「いやだけど、やめてくれなくて、誰も助けてくれなくて」

ナナシさんが止めてくれるまで僕はずっと一人で。

「うん」

「それで、さいきんそれから開放されて……急に幸せになってなんだが不安で、こわくて、どうしていいか……わからないんだ」

幸せすぎてそれが消えるのが凄く怖い。ふとした時にそれを失うことを考える、考えてしまう。

そう思つと足がすくんで目の前が奈落の底のように暗くなる。

そんな僕の弱音を聞いた彼女は瑠璃色の瞳で僕を見ると優しくいった。

「今みたいに泣けばいいんだよ」

「そう、かな……」

「そう思うよ」

彼女は僕の顔を自分のお腹に抱きかかえる。僕は少し息を吸った。

「いい匂いだね」

「優一の頭もいい匂いだよ」

僕達は指を絡めあって寝た。

十五夜 裏

まるで恋人のようだ。

そう思うと彼女は顔がだらしなく緩むのを止められなかった。

そして鏡に映った自分を見てはっとした。

何をやってるんだ私は。

彼はただ私の額から体内の熱量を調べようとしたただけだ。皮膚と皮膚の物理的接触にしか過ぎない。

映画を二人で並んで見ただけだし、さっきのはただ私がケーキを口にしなかったから、彼が私に勧めただけ。

でも、柔らかくていい匂いだった。

彼女はもう一度顔を洗うと、軽く髪を撫でつけ整える。

そして鏡に向かって少し笑ってみた。

「……………」

例えばのない恥ずかしさが込み上げてきて彼女は洗面台にへたれ込んだ。

次は髪の毛が触りたい。

フワフワしたあの髪の毛に触れて、私の差し出す食べ物を彼が食べさせてくれれば。

彼女は首を横にふり、ダイニングに向かった。

彼は細身のジーンズに白のＴシャツ、その上に青いエプロンを羽織り、皿にできた料理を盛り付けていた。

イスを引き、腰を据えるとじっと彼をみた。テーブルに料理を運んだり野菜を盛り付けたりとその動きは忙しない。

エプロン姿の彼を見て彼女はまた頬をだらしなく緩ませる。

ジーンズで強調された線の細さも美しいが何よりも、お尻の形が素晴らしい。

幾何学的な美しさを孕んでいるといってもいい。

耳を掻き上げる仕草も、時折見れるうなじのラインも美しい。

優一はしゃもじを持ったまま、恥ずかしそうに何かをいった。彼女はそれにぼうつと答え、自分が何をいったのか記憶に無いことに顔を青くした。

もしかして自分は今のことを全て口にしていたのでは、と。

「あたし今、口に出てたんだよ?」

「バリバリですぜ、兄貴!」

親指を彼が立てた瞬間、彼女の頭の中は真っ白になった。

彼に変と思われたかもしれない。

彼に嫌われたかもしれない。

性的なことを口走ってしまったかもしれない。

彼女はそう思うといても経ってもいられずリヴィングに駆け出しソファに体をうずめた。

今は彼ともっと、そう……甘い関係でいたかったのだ。

可愛いと思われるならいいが変な奴と思われてしまったてはそんな関係でいることはできない。

さっきから私らしくない行動に私自身が辟易してしまっている。

私の思ったとおりに私が動かない。

「そんなところで寝てたら風邪引いちゃうよ!」

「こんなのは初めてだ。

故に恥ずかしい。

故に苦しい。

「ご飯冷めちゃうよ!」

だけど彼はいつもと変わらない態度で、優しくて、最初の頃のように微笑んでくれる。

何も疑問を口にせず、私をそのまま私として認識してくれている。

「ライスがクールしちゃうよ!」

そんな彼が私を異性として見てくれたことが何よりも嬉しくて、一緒にいるだけで幸せで。

「おんぶしてくれないと嫌なんだよ」

だから彼に甘えたくて、甘えられたたくて、彼の一番になりたいの

かもしれない。

「ほい」

彼の望みを叶えたい。彼の全てがほしい。

彼女は壊れ物を扱うようにゆっくり優しく彼の首を抱きしめる。足でしっかりと固定して匂いを嗅ぐ。

仄かに優しく甘い香り。

彼女は優一の首筋に何度も顔を擦りつける。彼はそれをくすぐったそうしながら折れた腕で味噌汁を注いだ。

「うーむ、注ぎにくい」

耳の奥で鼓動が鳴り響く。

何を恐れる必要がある？ 何度も見たじゃないか。

そうなのだけど、何かが違う。

彼女は脱衣所で十五分ほど前から右往左往していた。

彼のＴシャツを見つけた彼女はそれを顔に被り、深呼吸した。心が落ち着く。

下着は既にパックして保存済みだった。

「よし」

気を引き締めて戸を開く。

優一は髪の毛を洗っている所だった。目を瞑り、頭を泡立てている。

艶かしい背中に一瞬目を奪われるが今はその時じゃないと彼女は自分に言い聞かせる。

「……………」

恥ずかしさのあまり、声のかけられない彼女はそのまま彼の頭を手伝うことにした。

力を入れすぎず優しく揉む。

彼は暫く気がつかなかったが、急にぴたりと止まると何かを呟いた。

「あれー……なんか多く、いや気のせいかな。そういえば、こっい

うホラー映画があつたような……あれっ……もしかして」
彼は直ぐさに立ち上がり、シャワーを探し、流す。

冷水が出たことに驚き、彼は滑って彼女に抱きついた。

「ぎゃーーーーー！」

「わっ！」

そして何かを掴んでしまったことに驚いた彼は奇声を上げ、彼女を巻き込む形で浴槽に沈んだ。

彼女は満面の笑みで彼の頭を抱いた。

お風呂場に侵入したことを咎められはしたが、その後一緒にアイヌを食べた。

一緒に歯を磨き、一緒に映画を見た。

そして彼は私に心の一面を打ち明けてくれた。

今もこうして手を恋人のように絡め合つて寝ている。

緊張の為か少し汗で手がにじんだが、彼女はそれでも手を離さなかつた。もう一方の手で眠れる彼の髪を撫でつけ、唇をなぞり微笑む。

強く彼を抱きしめ、息を吸う。それだけで彼女は幸せだった。

顔を同じ位置にして自分の唇をなぞり、彼の唇に触れる。指先が

燃えるように熱い。

彼女は無性にキスをしたい衝動に駆られた。

熱っぽい顔を近づける。彼に自身の鼓動が聞こえるんじゃないかと不安になる。

と不安になる。

優しく彼の頭の後ろに手を回し、目を瞑った。

唇が触れるだけでいい。

今はそれだけでいい。

もっと激しいのはもう少し後で。

できれば彼の方からしてくれれば。

今はこれだけで満足だ。

彼女の唇と唇が触れ合う瞬間………携帯が鳴った。

そこで彼女は動きはぴたりと止めて、起き上がる。

「What's the fuck...」

名残惜しげに彼の手を離し、枕元の携帯を取った。携帯には侵入者を告げる警告が出ていた。

彼女はあからさまに不機嫌になり、ベットを立つ。寝室を出る前に彼の顔を十秒ほど眺めた。

そして音を立てないように隣の作業室に行く。

彼女が入ると同時に部屋の灯りが点き、モニターとPCが起動する。

「手加減はしないんだよ」

ハッキングが遅かったことから今回ももう少し遅いものだと彼女は判断していた。

しかし、今度のは早すぎる。

彼との予定が目茶目茶になった。

本当だったら彼とデートしたり、一緒にお菓子を作ったりする予定だったのだ。

彼のために少し派手な下着や新しい洋服も買っていた。

買ったことのない化粧品だっている調べて揃えた。

それが全て無意味になった。

彼女は強くキーを叩き、目標の座標をモニターに表示させる。

目標の通る位置を想定し、待つ。

「スリー、ツー、ワン……どっかーん」

彼女は起爆のキーを押した。

十五夜 裏裏

頭の上の手すりが落ちてきたかと思うと、順々に上から破裂し、あたしの掴んでいた手すりも根元から爆竹のような音ともに吹き飛んだ。

あたしは十メートルほどの高さから落下。

何とか着地するが足元には赤外線センサーがあり、見事にあたしの右足はそれに引っかかっていた。

同時にどこかで先ほど同じような破裂音が連なって聞こえる。

「くそっ」

“上る”ことは当分の間お預けのようだ。

あたしは壁伝いに迷路のような下水道を進む。マスクに備え付けた暗視モードは使わない。

何かが破裂した時の光で目をやられるかもしれないし、何かに頼りきりというのはそれが使えなくなった時、その環境に適應するのに時間が掛かってしまうからだ。

左手にライトを構え、辺りを搜索。

こここのところ雨がなかったせいかあまりしけた感じはない。右には人が歩く為の足場があり、中腹は水が流れるように浅く広い溝があった。

やっぱり薄汚さと生理的嫌悪は拭えないな。蜘蛛や鼠、黒いアレがあたしの近くを横切る度に気分が悪くなる。

曲がり角を曲がる。すると暗かったはずの地下が明るくなった。

目潰しか。

しかし、暗視モードは切つてある。マスク越しに何かあるのか見る。

天井にぶら下がってるのはランタン？ いや、あれは

「んのやるう！」

バンと車のバックファイヤーに似た音が鳴る。

その場で身を丸めたおかげで大事には至っていない。だけど何本かそれがあたしの体に突き刺さった。

アイツは天井からぶら下げた爆弾に釘を仕込んでやがった。

あたしは腕と足に刺さった釘を抜き、マスクを首にぶら下げる。

「いいぜ、上等じゃねえか。何隠してるかしらねえけど暴いて台無しにしてやるよ！」

その時、どこかで蜂の羽音に似た奇妙な音が聞こえた。

「でっかい蜂ってわけじゃねえよなあ……当然」

だんだんと近づいてくる音。あたしはライトを照らし続ける。

直ぐにそれは現れた。

「AH64……アパッチ」

のラジコンで。当然ただのラジコンじゃなくて。奴は小型犬サイズで。

先端には筒状の何かがついていて。

あたしは身を翻し元来た道の方向へ走った。

少女は三種類のモニターを忙しく眺め、ゲームパッドを操作していた。

一つの画面にはラジコンにつけられたカメラから映し出される映像。もう一つは下水道の簡易地図と彼女を記す光点、最後の一つは罠を動かす為の画面。

彼女は何の感慨もいдаかず、画面の女性に向けてベアリングの弾を発射した。女性は瞬時に身を翻し、攻撃を避ける。

今のタイミングでいけば当たっていたはずだ。

「ん？」

映像は特に問題ない。

しかし、操作にラグがあるようだった。

まあそういうものだとな納得するしかない。

少女は追跡を始め、彼女の背中へ向けてベアリング弾を打ち込む。執拗に追い回し、狙い通りのポイントに追い込む。

彼女がポイントに入ったことを確認した少女は“着火”した。

ラジコンのカメラにも衝撃波が当たり、カメラの映像が一瞬乱れる。他のセンサーはまだ正常化していないようで、彼女の姿を捉えていない。

「死んだのかな」

それでは困る。

彼女には見つけてもらわないといけないのだ。

アレを。

この町の人間を殺す為のアレを。

画面は正常化され、彼女の現在位置が表示される。

「ビンゴ」

彼女は望む方向へ進んで、装置を見つけたようだ。仕掛けを動かすべく彼女はキーをタイプした。

そして窓から夜空を眺めた。

「雨……間に合うかなあ」

壁にこれ見よがしに設置された機械を見る。ノートパソコンを分解して改造したような機械。

その横の壁に赤いスプレーで数字の三が書いてある。

電波を送信していることに気がついたあたしは即座にPDAを使い、どこに繋がっているかを調べる。

おそらくは何かの受信機か送信機だ。

柳川月の計画。

地下室に隠した何かで町の人間を殺すという荒唐無稽な計画。

普通の人間がそれをいうならただの妄想で済む。だがそれを言い出したのがあの柳川月なら話は別だ。

「っ！早く早く！」

PDAに解析中という文字が浮かぶ。残り二十パーセント。

ラジコンのプロペラの音が近づく。残り十パーセント。

あたしはライトを消してジャケットを被る。残り五パーセント

へりは空中で静止したかと思うとぱつとあたしにライトを向けた。当然、ライト付きだよなあ。

「さっきから後ろが明るかったわけだ」

完了の文字が出る。あたしはPDAを掴むと、ジャケットをへりに向けて振り回す。

バックしながらへりはジャケットに向けて発射。あたしはへりが態勢を立て直している間に奥へと逃げる。

途中に扉を見つけノブを捻り、中に入った。

へりはあたしを過ぎて何処かに向かう。

あー、嫌な汗かいた。しかし、何発か食らっちゃった。

「あの、クソアマ……くそっ、いてえ」

何か鼻につく臭いを感じる。ツンとするようなそんな香り。

あたしはポケットからライトを取り出し、部屋を探索する。

壁に赤い文字で何か書いてある。

「Do you like roast chicken?」

あなたはローストチキンは好き？

さつと青くなった。

この臭いは……気化したガソリン。

PDAの解析結果を見る。

『hahahaha!』

「ちくしょう……!」

カチリとどこかでライターののような音が鳴った。

「どっかーん……なんてね」

少女はモニターを眺める。

死なない程度には痛めつけられたらう。

彼女ならあの部屋から外への出口を見つけることができるたらう。

扉は閉めたら開かないようになってるし、計画通り行けば三日か

三日後には決着がつく。

少女はイスから降りると伸びをして、欠伸をかみ殺した。

明日は土曜日でゆっくりできる。

でも朝は私が朝食を作って、彼をびっくりさせたい。

だから早く寝ないと。

何度も練習したのだ。

きっと大丈夫。

「そっか、休日なんだ……」

時間はまだあるようだし、買った服を使ってデートでもしようか。

その時は姫野薫でも呼んでみよう。

「全てがあたしの掌なんだよ」

少女は笑った。

十六夜

朝起きて、僕が朝食を作っているとルナに睨まれた。

僕はハムエッグとソーセージをお皿に移す。そしてパンをトースターにセットしてタイマーを捻った。

「優一、朝早いんだよ」

「そうかなあ。結構普通だと自認しておるのですが」

「朝早いんだよ」

大切なことなので二回いいました。ルナは少し不機嫌そうにコップを差し出し、椅子に座る。

「注いで」

「じゃあ僕の牛乳もルナのついでに注いでおこう」

きりつとルナの顔を見る。ルナは僕を真っ直ぐ見ると小さく溜息をついた。

「つまんないんだよ」

「さいですか」

「つまんないんだよ」

「……そんなに強調しなくても」

「今日はデート」

「え？」

そういつて彼女は牛乳を飲む。案の定、鼻の下に白いヒゲが生えてしまい僕はそれをティッシュで吹く。

「うん、これで綺麗になった」

「……そんなのじゃ、あたしは騙されないんだよ」

ルナはつんとして僕から顔を背ける。

そっちには壁しかないわけで君は一体何を透視してらっしゃるのでしょうか。

「なんか今日は尖がってますなあ」

「今日はデートで、優一は罰ゲーム」

「いつの間に僕はペナルティを加算されたんだろう」
そしていつの間にペナルティが加算されるようなことがあったんだらうか。

配点はいくらで僕はどれくらいの差があつて負けたのか知りたいものだ。

「だからこれ食べたらファクションショーだよ」

「ショーですか」

焼き上がったトーストにバターを塗り、彼女はかぶりつく。

「つまらないんだよ」

「いや、今はギャグのつもりじゃなかったんだけど」

「ペナルティ、プラスいち」

そういつてルナはソーセージを口に入れた。どうにも今日は機嫌が悪いらしい。

怒つていてもお腹は減るらしく、彼女は僕のソーセージまで食べ、洗物も僕に任せるといふ暴挙に出た。

昨日は手伝ってくれたのになあ。

「あたしは準備があるんだよ」

僕の抗議の声に、彼女はいそいそと両手一杯に持った洋服をどこかに運びながらいった。

少しして軽快なミュージックと共に彼女は現れた。どうやら音楽は彼女なりの演出らしい。

深緑のハーフパンツに薄いグリーンのパロシャツ、それにサンダル。

家の中で靴履くんじゃありません、とはいわなかった。

「どう、かな、優一」

「うん、普通に似合ってるね」

「じゃあ、これにする」

「ええ！ 安直だなー」

ルナは音楽を一旦止めて首を傾げた。

「でも似合ってるっていったんだよ」

「いや、折角だから全部一度着てみてよ。それで一番似合ってるのを着ていこう」

普通こういうのって男がいうことじゃないような気がするのだけ
ど。

ルナはなるほどといった顔で僕を見て、無言で去っていった。

着替えの終わったルナは僕がお茶をすすっていると言っていると肩を叩いて振り向かせた。

「こっちはどうか」

次はルナらしからぬ派手なデザイン。薄茶色のジャケットに黒いワンピースにブーツ。

髪の毛は小さなポニーテールだった。

「うーん、思うんだけどさ」

「何だよ、優一」

「ルナって綺麗だから何でも似合ってしまったって逆につまんないのだ」
「どういうことかな？」

ルナは目をキョロキョロとさせて激しく指をカタカタと動かす。

「ルナは美人さんだから似合わないという選択肢が存在しないのだよ」

「それは……優一の主観で？」

「まあ、確かに僕の主観だね」

「それは、好ましいんだよ？」

「うん」

僕の言葉にルナは黙りこくる。しかし手は忙しなく動き続け、目は三百六十度を見回そうとグルグル回ってる。

ルナはぎこちない動きで衣装室に消えた。

オーバーオールだったり、派手なドレスなりを持って悩んだルナは僕の「なんだかルナっぽい服だね」の一言で一つの衣装に絞った。
「本当にそれでいいの？」

「いいんだよ、優一があたしらしいって言ってくれた服だもん。間

「違うんじゃないよ」

全幅の信頼と嬉しそくに微笑むルナの顔が僕の良心をチクチクと刺激する。

正直にいえばあまり深くは考えず、無意識に口から言葉が出たのだ。

男はいつだって適當。どれを着ても一緒だと思ってしまう定めにあるのだと僕は理解した。

一通り終わった僕らは昼食を食べることにした。

適當に（僕が）作った料理を口にしてしているとルナは微笑み言った。

「この後は優一の服を決めるんだよ」

「へ？」

「それ着て今日はデート」

「ホワイ？」

それは何故ですか？

ルナは橋を唾えながら、爬虫類のような丸い瞳で僕に宣言した。

「その方が可愛いから」

「……僕の意味は無視なんだ」

「あ、罰ゲームあるからだよ」

「今、絶対その設定忘れてたよね」

「優一」

「なんでせう」

「なるようになれ、だよ」

「それって僕が思うことであって、ルナがいうことじゃない！」

結局僕はルナのお人形にされた。

十七夜

横目で一度めぐるましい人の流れを見る。喫茶店のウィンドウから眺める人ごみというのは動物園の猿を眺めるような気持ちにさせる。

彼女はそう思った。

いや、自分達が見られる側なのかもしれない。

店内はあまり人が多いとはいえない。

女性客は自分を入れて三人しかいなかった。

「ごめんなさい、急に席を立ってしまつて」

そう彼女はいい席に戻る。

白い女性らしいワンピースに黒いレギンス。

化粧の具合から少女は彼女が今日気合を入れて勝負に挑んできたということを理解していた。

しつこくなく、自然な化粧のかけ方。

彼女は少しそわそわしながら目の前の少女に質問した。

「……それで、あの 優一さんは？」

姫野薫は少し肩を震わせながら。

「来ないよ」

「え？」

その言葉に彼女は目を丸くする。

約束と違うではないか。

優一さんと会えるというからここまで来たというのに。

「帰らせて」

「あれから家出してもらつてないんだね。また謹慎生活に逆戻りなんだよ」

少女はそう言うとパフェのアイスをすくつた。

その言葉に席を立ちかけた彼女の動きが止まる。

「どうしてあなたが私のことを知っているんですか？ 父にでも聞いたんですか？」

「あたしは何でも知ってるよ、神様だからね」

「……ふざけないでください」

彼女の持っているカップにぴしりとヒビが入る。

少女はスプーンを運ぶ手を止めて平坦な声でいった。

「後ろの男二人、堅気じゃないんだよ。自由にさせてもらってるならあんなプロは見張りにつかない。それにあなたの服装、季節感が少しずれてる。ずっと家の中にいたのが原因だよ」

「相変わらず、化け物ですね」

彼女は注文したフルーツヨーグルトに口をつけた。

どうせここは少女の支払いなのだ。

「しかし、あなたもそういう服装されるんですね。私、あなたの服は制服しかみたことないので驚きました」

少し嫌味っぽく彼女はいう。

少女は深い緑のカーゴパンツにグレーのTシャツ、その上に白いカーディガンを羽織っていた。

それを指摘された少女はぴたりと止まるとチェシヤ猫のような笑みを見せた。

何か嫌な感じが彼女の背中を抜ける。

「これ、優一が選んでくれたんだよ」

「……………へえ、そうなんです、か」

我慢しなくては。

ここで怒って帰ってしまったら久しぶりの娯婆が開始十分で終わってしまう。

彼女はぐにやぐにやに曲がったスプーンを店員に取り替えてもらう。

そして店員につこりと微笑んだ。目じりのほくろがそれを際立たせ、女性店員はその笑みに見とれた。

少女はチェシヤ猫のような笑みを崩さず、パフェの果物を口に入

れた。

「今日、優一とデートだったんだよ」

「そう……ですか」

ぎつと歯が擦れる音。

「ここに呼んだのは私を馬鹿にするためですか？」

「罰を与えるためだよ」

「……どういう意味ですか？」

彼女はカップを口元に近づけて、それを止める。

「あんたが優一にしてきたことへの意味」

「それはあなたもしてきたことじゃないですか」

「あたしの記憶はこの前で完璧に消えたんだよ」

「なっ……!!」

その言葉に彼女は目頭を押さえた。

「そんな……ああ、そうか。あれも、あの日も彼にとっては辛いこと、なんですね」

「だからあたしはもう関係ない。今は一緒に暮らしてるけど、何もしてない」

一緒に暮らしているという言葉に彼女は眉を持ち上げて見据える。
「そんな！ ずるいですよ。あなただけ解放されて、あなただけ彼と上手くいつてるなんて。あまつさえ一緒に暮らしてる？ ……今すぐここであなたを殺してやりたいですね」

「ビデオでマスターベーションすれば？」

少女は口元についたクリームをナプキンで拭い、ジュースを飲む。

「知っているはずですよ。私のコレクションは没収されたって。あなたでしょう？ お父様に働きかけたのは！」

「さあ？ でもそうならそのコレクションを持つてるのはあたしかもしれないよ」

オリジナルも自作のビデオも殆ど残らなかった。

残ったのはたった数本と倒錯的な日記。

「どうすれば……どうすれば、優一さんに合わせてくれますか？」

「死ねば？」

「お金はいくらでも」

「腐るほどあるよ」

「ビデオだけでも……」

「少し黙っててよ、強姦魔」

「……………」

少女は彼女の事件が発覚した時に率先して仲介役として出てくれた手前、彼女は少女に強くいうことができなかった。

もしもそれがなかったら、私は首をくくることになっていたろう。

それに監視の目もある。

久しぶりの外の世界だ。あの牢獄のような屋敷に戻るの嫌だった。

じゃなければとつくにこんな女の首をへし折って、首を引きちぎっている。

「優一が味わってきた苦痛は今のあなたの比じゃないんだよ。罪深いあなたは贖罪すべきなんだ」

「そ、それはあなたも一緒でしょう！ 私一人がこんな目に合ういわれはない！」

「静かにしてくれるかなあ」

少女は席を叩いた彼女をうつとおしそうに見た。

彼女は唇を噛み締め、静かに席に腰を下ろす。

「さつきもいったけど、今のあたしは優一と何もしてない。私なりの贖罪は既に終わってるんだよ」

「贖罪？ 記憶が消えたことですか？ それが許されるなら今すぐに私でもできますよ？ 彼を連れてきてくれれば、あの喉笛にかぶりついで」

「結局あなたは何も変わってない。人を苦しめることに後悔や自責の念なんてないんだ。大切なものを失っても気がつかないなんて愚かだよ」

「はっ！ それはあなたも同じでしょう？」

少女は席を立ち、代金をテーブルに置く。

「……まだ、わかってないんだ。それにあたしは失ってからその大切さに気づけた。だから今こうして笑ってられる。やり直しの機会を得たんだ。あなたにもそれを与えられたっていうのにあんたは全くそれを生かそうとしないし、変わるうとすら思っていない」

彼女は何かいいかけて言葉を止めた。それは少女の近くに女性が近づいて来たからだ。

髪は小さなポニーテール、その上に白いベレー帽。服はグレーのチエックが入った白のワンピース。そして黒いブーツを履いていた。「いったよ、デートだって」

「あ……ああ！」

目の前の女性は彼女を直視しなかった。口は横一文字に強く結ばれている。

化粧をしているからだろうか、彼女の知っている“彼”とは少し何処か違う。

「結局、あなたはその程度でしかなかったってことだよ」

「あ……あの、私！」

女性は彼女の目を見ずに頭を下げる。

「お久しぶりです。そしてさようなら」

少女は彼と手を繋ぐと店を仲良く出て行った。

彼女はそれをガラス越しにずっと眺めていた。

小さくなるまですっと。

十七夜 裏（前書き）

殆どというか全くシナリオに関係ない話かも。
あっても最後の喫茶店のシーンだけです。

十七夜 裏

「開けるよ」

「どうぞ」

僕はそう答え、スタンドが出せそうなポーズを取る。

ルナは僕をじっくり頭から足の先まで見ると呟いた。

「優一、全然似合っていないよ」

「……さつきから僕、全敗中っすね」

泣きたくなってきた。

ルナの着せ替え人形となった僕は彼女から手渡された膨大な衣装をヤドカリの貝殻の如く着ては脱いで、脱いでは着ての繰り返しをしていた。

ガイヤにもつと輝けと囁かれる作業はもうこりこりです。

彼女は首を傾げると躊躇することなく僕にいう。

「ここまで似合わないのはもはや奇跡なんだよ」

Tシャツとジーンズ以外が似合わない男。そう僕は決定付けられたようだ。

おすぎもビックリするほど何も似合わないのだしょうがない。

「もう、Tシャツとジーンズでいくよ。これから何があるかと僕は

TアンドGなのさ……」

少ししょぼくしてみる。

ルナは僕を心配することなどなく、静かに考え事をしているようだった。

「うん、優一。これ着てみて」

「え、でもこれ」

「いいから早く着て」

僕にそれを押し付け、彼女は部屋から出る。

ルナから受け取ったそれを眺め、僕はうーんと渋る。

どうみてもスカートである。モバイルスーツでいえばジオングとか

ドムとかあそこらへんだ。

黒のタートルネックにグレーのスカート。

「これはどういう意味だろう」

ルナは僕が男であるということを忘れてしまったのだろうか。こ
こはつきりというべきかもしれない。

男といったらお琴と取られそうなのでしつかりと染色体で答えよ
う、うん。

抗議の言葉を考えながら僕は指示通りに彼女に渡された服を着る。
結局着るのかよと僕は自分に突っ込みを入れた。

「開けるんだよ」

「あ、うん」

「優」

「なんでありんしょう」

「淒く似合ってる」

「うれしくないな」

「でも何か足りないよ」

彼女は一旦何処かに消えると黒いパンストを持ってきた。

「はい」

「いや、はいつて言われても……」

そのまま灰になりたい気分である。彼女は何故か出て行かず、僕
がパンストを履くのをじっと見ていた。

「うん、やっぱり優一、足綺麗だから似合っなあ」

「ありがとう……でいいのかなあ」

少し涙目な僕。

「うん、次はこれ」

「いつの間に！」

「まだまだ衣装は扉の前に積むほどあるんだよ」

積むほどあるのか。そしてその量を僕は着なくてはいけないのか。
僕そっくりのマネキンとかそういうのでいいんじゃないのかな。

「早く着てほしいんだよ」

「ああ、僕のためじゃなくて自分が見たいからという欲求ですか…

…」

「そうだよ」

「うん、じゃあ早く部屋から出て行こうか」

「わかんないことあるかもしれないから手伝ってあげるんだよ」

「ないから大丈夫です」

彼女の背中を押して、僕は戸を閉めた。

今度は白と黒のチェックのミニスカに青いシャツ。そして極めつけのガーターベルトだった。

「……………」

イジメか？ 新手的イジメじゃないのか？ といいつつちゃんと着る僕。少し鏡を見て恥ずかしくなる。

これは非常にヤバイのではなかるーか。

非常にスカートが短くて、ハイニーソが足を強調していて、何だか危険な感じがする。

「優一、開けるよ」

「ちよつと、待って！ お願いだから見せるための勇気を貯める時間を！」

そして貯めるための時間を！

しかし無慈悲に扉は開かれる。

ルナは無言で僕を一瞥すると向こう側から何かを引っ張ってきた。そして無言で僕に手渡す。僕はどうすればいいんだろつとそれを

眺める。

「どうみても猫耳です。本当にありがとうございました」

「早く」

「これ、服に関係ないよね」

「いいから、早く」

「あ、はい」

有無を言わさぬ空気に従う僕。鏡は恥ずかしいのであまり見ない方向で猫耳をはめる。

ルナはそれを見ると傍目から見ても分かるほどに顔を赤く染めた。彼女は重々しく、どこか緊張した口調で僕に言った。

「ゆ、優一、お願いだからこうやって猫のポーズを取って“にゃん”っていつてほしいんだよ」

そういいながら猫のポーズを取る。

「殿、拙者に死ねと？」

「お願いなんだよ」

彼女は目を涙ぐまして僕の瞳を覗いた。僕はそのレアな表情に泣く泣く従う。

「わ、わかったよ。にゃ、にゃん……？」

「ゆ……だめ。それは……だめ、なんだよ。ずるんだよ、チートなんだよ卑怯なんだよ反則なんだよ。……もう、だめだよ。ああ、もう死ぬ」

彼女は自分の手で自分の顔を覆うとフルフルと震え、何かをぼそぼそと呟いた。

首はさつきよりも真っ赤に染まっている。元々肌が白いのでその変化がよくわかる。

まるで2Pカラーだ。

「ルナ、大丈夫？」

「うん。だ、大丈夫」

冷静を装うルナは嬉しいような恥ずかしいような複数の感情が混ざった顔で僕を見る。つまり顔は真っ赤で目は潤んでいるということ。

僕も当然恥ずかしいけど恥ずかしさにはある程度耐性があったのでそこまで辛くはなかった。

「もう一回……もう一回にゃんっていつてほしいんだよ」

「あーえー……にゃん」

ルナはまた悶絶した。

結局、可もなく不可もない衣装をルナは選び、僕に着せた。白の

ワンピースとベレー帽だ。

髪の毛はルナに結ってもらい小さなポニー。

「しかし何がどうして十六にもなって僕は女装をしなくてはいけないんだろっ……」

やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

それも公衆の面前でとなるとそれはまた通常の三倍恥ずかしく、僕を赤く染めさせるには十分で、三倍らしく僕の道を歩く速度も早くなりがちだった。

「ねえ、ばれてないよね」

「大丈夫なんだよ、さつきも男の人に声かけられたんだよ。自信持っていていいよ」

女装の自信なんて持ちたくないわい。

面白がったルナに僕は連れられていろんなところを周らされた。デパートでお菓子を見たり、女性の下着売り場も連れていかれた。

確かに映画を見たり、ゲームセンターで遊ぶのはいいだろう。でもそれは女装でもなくていいわけで、僕は男なわけで。

「次は喫茶店に入るよ」

「僕に拒否権なんてないですよね」

「うん」

彼女は握った手を引っ張ると、こじやれた雰囲気のある喫茶店へと僕を引っ張った。店内では大きなプロペラが回っていて、コーヒーの芳しい香りが鼻をくすぐった。

ルナと僕は一番奥の席、人目につかない場所を陣取った。僕はコーヒーを頼み、ルナは後で注文するといった。

「優一に断っておくけど、ごめん」

「何んのこと？」

「最後、自分のいいことをちゃんと自分からいうんだよ。ちゃんと自分で断ち切らないと優一はいつまでも苦しむんだ」

「はっ、え？」

そういうと彼女は席を立ち、窓から外に見える広い席に座る。

どういふことだろうと僕が首を傾げていると来客を告げるベルの音が店内に響いた。

最初は二人のごつい男。そして次は……僕の元姉さんだった。

僕は気が気でなかった。

元姉さんが僕の横を通ってトイレに行ったこともそうだし、なにやら揉めている雰囲気はゆんゆんと伝わってくるのだ。

お店のお姉さんはコーヒーのお代わりを注ぎながら僕にいった。

「あれ、絶対男関係の話よ」

「あ、そうなんですか」

知ってるっていうか分かってるっていうか。

「うん、絶対間違いないわ」

ルナのことだから僕が昨日、告白したことを真剣に心配してくれたのかもしれない。だから今日会って何かいってやるうってことなのだろう。

ちょっと嬉しかったりする。

「……いわれわない！」

元姉さんは机を叩き立ち上がる。さっきから怒ってばかりだ。

もしも、僕のことと怒っているなら。止めろといわれて怒っているなら、それっておかしくないだろうか。

だって僕は何もされる必要がなくて、赤の他人で、僕は元々自由で。

罪悪感で苦しむなら分かる。だけど何で怒る必要があるんだろう。

あの日僕の前で後悔していると語ったのは嘘だったのだろうか。

もしも僕があそこで許していたらまた僕を苦しめていたのだろうか。

僕を犯して殴って笑っていたのだろうか。

ルナが席を立ち僕を少し見る。僕はルナに近づく。

「結局、あんたはその程度でしかなかったってことだよ」

元姉さんは僕を見て固まった。信じられないものをみたという表

情で、ただ呆然と僕を見ている。

「あ……あの、私！」

僕はなんて彼女にいえばいいんだらうか。

変態、死ねと罵ればいいのか。彼女に拳をお見舞いしてグロリアの分だと袋叩きにすればいいのか。

だけどそれを選択しても僕は彼女との繋がりを切れないような気がした。

僕は言葉を決め、彼女に向けて口を開く。だけど声が出ない。

手が震える。足が竦む。逆らったら殺されると心のどこかに植えつけられた傷口が僕を蝕む。

背中がじつとり汗ばむ。

だけどそんな僕の手をルナは握る。強くしっかりと握る。

決して僕はひとりじゃない。

まず彼女に一礼する。そして僕は彼女と完璧に関係を断ち切るために。

「お久しぶりです。そしてさようなら」
拒絶した。

十八夜

僕とルナはデパートの中にいた。休日らしく人が多い。

ルナはどこかで休もうかと提案したが僕は何かしていた方が落ち着くので我慢いって歩かせてもらった。

「優一、ちゃんといえたんだよ。頑張ったね」

「うん、何か少し……本当に少しだけど胸の奥がすっとしたような気がする」

喉のつつかえが取れたような感覚。

ルナは僕を見ずに前へと進む。

「大きな一歩だよ」

「そうだね……大きな一歩だ」

ぼくらは宇宙飛行士のようなことをいって少し笑う。

「顔色悪いよ、休もうか？」

「うん、少し休ませてもらうよ。ちょっとトイレ行ってくる」

「ちゃんと女子トイレに行くんだよ？」

「……………」

僕は違う意味で少し悲しくなった。

ルナはトイレから少し離れた場所の店の洋服を見ていると僕に告げる。

少し緊張しながら僕はその方向に進む。鏡の前で化粧の手入れをしている女性を通り過ぎ、一番奥の個室に潜む。

そして胸を押さえた。

「はっ……………はっ」

呼吸が上手くできない。今もなお、何かとんでもないことをしてしまったのではないだろうかという恐怖がついて周る。

女子トイレにはいったことが、ではない。さっきの喫茶店のできごとにだった。

結局、僕は彼女から自由になんてなっていない。なれていない。

それほど彼女の打ち付けた楔は大きく、硬い。

「うー……っ」

吐きそうだが、目が痛い。

ルナは知らない。僕がどんな目に合って、僕がどんな数年を送ってきたのか。

もしも彼女が知れば僕を助けたいとは思わないだろう。そう思う前に嫌悪が優先されるはずだ。

元姉によがって、犯されて達する変態を助けようなんて誰も思わない。ましてや本当の姉に犯されていた人間なんて気持ちが悪いですだ。

彼女の中で僕が無価値になるのが恐ろしい。彼女達にゴミのように見られるのが恐ろしい。

「でも今の僕は見せかけで張りぼてなんだ……」

怖い。矮小で汚らしくて全てのことから逃げ出したいと思っている脆弱な人間だと知られるのが。本当はゴミ以下なんだと知られるのが。

彼女達が僕から離れることは避けたかった。彼女達は既に僕のパーソナリティを形成する部品になっている。

素晴らしく自己中心的でエゴイステイックな僕。分かっている……だけど嫌だった。避けたかった。

それはイコールで僕の死。僕という人間の死なんだ。

これからを考えるなら僕はルナに全てを打ち明けるべきなのかもしれない。僕がどういうことをされてきたかということ。

だけど、結果が想像できなくて……怖い。

もしもルナに嫌われたら僕は耐えられるだろうか。

「お薬、どこだっけ」

手のひらに薬を取り出して、ペットボトルの水で流し込む。薬を飲んだというだけで精神が少し落ち着く。

何が大丈夫なんだ。何が大分よくなったよ。

結局僕という人間の浅ましさを弱さは何も変わっていない。

何だか僕は恥ずかしくなった。

不意にガキッと扉の方で音がした。僕はそつちを見る。

扉の小さな隙間から僕側に向けて何か、薄い金属の何か差し込まれていた。

僕はそれをぼつつと眺めた。

何だろうこれ。

それは高い位置まで昇ると一旦止まった。そして一気に下に振り下ろされた。

キンッと音がして、僕の個室の鍵が真つ二つに切断される。

「へ？」

鍵が無くなったことで、扉は金属を軋ませながらゆっくりと開く。扉の外には、彼女がいた。

急に火災報知器が鳴り響き、どこかの防火シャッターが自動で下ろされる。

青い制服を着た眼鏡の職員が火事だと告げる。そして落ち着いて冷静に、と何度もいう。

職員の言動自体が冷静ではなく、あわてているのが分かる。

それは周囲の客達の不安を煽り、一つの集合体に変える。

一人が走り出したのきっかけに辺りの客はそれを習うように我先にと走り出した。

それはさながら川の濁流のような動きを見せ、他人のことを考えず、出口に向かって流れる。

ベンチで休んでいた少女は立ち上がり、彼のいる場所に向かう。しかし、流れる人が邪魔でまったく近づけない。

まさか、彼女が？

それにしても早すぎる。

それとも姫野薫が？

確かに彼女を動かすために煽りを入れたが彼女の役はまだ先のこ

とだったはず。

では本当に火事か？

だとしたら私がすべきことは優一の安全確保だ。早く行かなくては。

やっこのことで人ごみを抜けた少女は女子トイレに向かう。

清掃中のパネルが入り口の前に置かれていた。

中に入り、個室を一つ一つ調べていく。一番奥の部屋に優一の着ていたワンピースと帽子が置かれていた。

少女はそれを掴む。

まだ暖かい、それに匂いも新しい。

ここで無理矢理着替えさせ、混乱に乗じて逃げた。

ということはこの火事騒ぎもブラフ。

「どっちだろ」

少女は首を傾げた。

しかし、早すぎる。そして他人はいつも自分を不快にさせると思った。

今はデートだ。

せめて明日にしてほしかった。

この後は少し洒落たレストランで夕食を食べて、あわよくばそれ以上に進もうといろいろプランを考えていたのだ。

「……予約、断らないとだめなんだよ」

しかし、どちらなのか。

これが一番重要だ。

彼女ならば特に心配しなくていいだろう。

どうせ、地下に行く。

しかし、もしも薫だったら、最低どこかに監禁。

悪くてどこかに高飛びされる可能性もある。

やはり、少し刺激しすぎただろうか。

ここまで凝ったことをするのは彼女の方が可能性が高い気がする。もしも、薫ならまず殴ってから言うことをきかせるはずだし、こ

んな凝ったことはしない。

それにあの怪力女が武器を使うのも想像できない。自分の腕力に絶対の自信を持っていたはずだ。

とするとやはり彼女だろうか。

しかし、先走った考えは足元をすくう。

慎重に動かなくては。

今の状況では人が多すぎて衛星も意味ないだろう。

一応、できることは全てやっておこう。

彼女は携帯を弄っている途中で天気予報を見た。どうやら外では雨が降っているようだ。

「全てがあたしに味方してる」

やはり自分は神にもっとも近い。

十九夜

パラパラと振り出した雨は止まることを知らず、それは辺りが暗闇に包まれてもなお振り続けていた。

重い雨粒は僕らの傘を叩き、リズムを刻む。

僕とナナシさんは夜になって初めて動き出した。僕らは（何故か）それまではずっと二十四時間営業の漫画喫茶で漫画を読んでいた。彼女はスーツ姿でまるで仕事帰りのＯＬだ。僕はジーンズと白いシャツ。

トイレの鍵をぶち壊した彼女は服を差し出し直ぐに僕に着るよう強制、その後携帯弄るとニヤリと笑った。

どうみても悪党の顔だったのは気のせいだと思いたい。

『なにしてるの？』

『柳川の真似だよ』

次の瞬間、火災報知器が鳴り響き、外は騒がしくなった。そして彼女は僕を引っ張り、人ごみに揉まれながら外に出て、漫画喫茶に引き込んだ。

どこかピリピリした空気に僕は質問する機会を放棄せざる負えなかった。

「あの……質問していいかな」

「だめだ」

「拒否権発動ですか……」

結局ナナシさんの家に着くまで僕らは話らしい話を一切しなかった。その上、家まで明るい道を避けひたすら遠回りをしていたので時間を大分浪費した。

残業手当を申請してもいいのだろうか。あ、でも僕ホワイトカラーだ。うーん。

家の扉は以前と同じように修復されている。チェーンは心なしか以前よりも大分でかい。

扉をくぐり玄関が目に入る。

一瞬脳裏をあの時の記憶が蘇るが僕は心を落ち着けてそれを無視した。

奥に通され、相変わらず中身は緑茶なカップを受け取る。

「とりあえず、知ってほしいことだけ告げる」

「優しくしてね」

茶化す僕を睨んで黙らせる彼女。なんだか凄く怖いです。

「柳川月は町の間人を……あれじゃ全てとは言えねえけど、殺すつもりだ。つまり無差別テロをする予定らしい」

「は？」

なにそれ。まるで明日はピクニックに行くらしいみたいなき感じの言い方は。

僕がいまいち理解できていないでいると彼女は視線を落として次の言葉を紡いだ。

「何故とか過程だとかは知らなくていい。お前はそれを知る必要も、知る意味もない。だからこの事実だけをまず受け入れろ」

「ちょ、ちょっと待って。だって、え？ いや、本当に？」

ナナシさんはでまかせを言うような人ではない。

僕はナナシさんに全幅の信頼を寄せていて、ルナにも同じような信頼を寄せていて。

それは同時に信頼できる人が信じられないことをするということで。

「でも、ルナは今日一緒にいて普通に買い物したし、その前の日は一緒に映画見たりしたし……」

「別に無理に信じなくてもいい。あたしのことを誇大妄想狂と思っても構わねえよ。だけどそれは本当に起こるとあたしは確信してる」

地球は回っているってコペルニクスに言われた人もこんな気持ちだったのだろうか。

信じたい、信じるに足る人物。だけど理由があって信じることができな

彼らは絶対の教義が、僕にはルナへの信頼がそうさせる。

「あたしはこの前、ある情報を元に下水道を調べていた。そしたら、出るわ出るわ。侵入者を殺す気まんまんの罠がな。それからあたしはあそこから脱出する過程で装置を見つけた。何の装置か詳しくは分からなかったけどよ、ある程度の仮説は立てることができたよ」

彼女はそういいながら僕に傷口を見せる。腕には無数の刺し傷や、あざが見えた。

「それは？」

僕の相槌にナナシさんはその前という。

「ちよつと前、幼稚園で中毒死があつたのを覚えているか？」

「……一応、だけど」

「あたしはずつとあれが頭に引つかかっていた。そして今度のこの装置。とても偶然とは思えない。……お前にも察しがついたか？ そうだ、あいつはその装置で町の間人を毒殺するつもりだ」

「そ、そんな無茶苦茶だよ！」

告げられた答えを疑問視する僕にナナシさんは説明する。

「恐らく貯水タンクに毒物を混入させる仕掛けをしているんだろう。概要はこうだ。携帯電話でどこかのサーバーに向けてメールを送る。内容は特別なコード、それを受け取ったサーバーは即座に装置に指令を送る。起動された方は内部の命令文なんかのデータを全て削除した後、命令を実行。そして汚染した水を飲んだ人間は死ぬってわけだ」

「そ、そんな」

「ちなみにあたしが今日やった火事騒ぎもその手順で起こした。そしてこの前の食中毒事件じゃ、貯水タンクの中から何かの機械ととシアン化カリウムが見つかった」

シアン化カリウム、つまり青酸カリ。

無表情でナナシさんはきつと苦しかったらうなと呟き、お茶を口にした。

「……信じるか信じないかは別にして何が何だかは分かった。でも、

もしもそうなら動機が分からない」

「明確な動機つてのはあたしにも分からない。分かるうとも思わないし、そもそもアイツを理解しようとする方が間違ってる思う。ただ……一つ確かに言えることは、原因はお前にあるってことだ」

「僕？」

「お前」

「ミー？」

「ユー」

「ぼ、僕には身に覚えがないんだけど」

ナナシさんは少し悲しそうな顔をしていう。

「そりゃ、覚えは無いだろうよ。だけど確かなことだ」

二人の間を重めの沈黙が包む。

きつとそれは僕の消えた記憶に関連することなのだろう。

僕の記憶は辛いことがあると脳内から抹消されてしまう。何が当たるかはお楽しみだ。

「それで、僕は……何をすればいいの？」

ナナシさんは少し頬を歪める。今日初めて見る彼女の笑み。

「ただどやっぱりどこか悪党の臭いがする。」

「よくわかってるじゃねえか。お前には人質になってもらおうと思ってる」

「は？」

僕の口から間抜けな声が出た。

十九夜 裏

室内の明かりをつける為にパチリとスイッチを押した。明るいはずの室内は暗く、無機質な香りを放つ。

大丈夫だと思っていた。

しかし、予想以上に辛い。

孤独というものは。

少女はソファーに転がり、両膝を折りたたんで胸元に抱える。そして溜息をついた。

本当ならこの時間は二人で景色のいいレストランでディナーを楽しんでいたはずなのだ。

一応、ホテルにも予約は入れてあった。化粧もしたし派手な下着もつけた。

「そうじゃないんだよ」

そうだ、別に彼とそんなことをしたかったわけではない。

いや、したくなかったといえば嘘になるが重要なのは彼と一緒にいることだ。

それさえできるなら、全てのことを投げ打っても構わない。

だから私は殺す。

彼を、全てを。

そして自分を。

その為だと自分を言い聞かせる。

その為に今は辛いのだと。

少女は起き上がると、キッチンに向かい鍋を温める。彼が作った余り物も電子レンジにかけた。

機械の音だけが部屋を包む。

孤独には慣れていて、それに孤独は嫌いじゃない。

そのはずなのに、辛いのは何故だろう。

少女は寝室に向かい、布団に顔を埋める。彼の匂いが残っていて

少し心が落ち着く。

それと同時に形容し難い孤独が少女の心を襲った。

「会いたいよ、優一」

シーツに顔を埋め、自分の胸に手を伸ばす。しびれるような感覚に吐息が出る。

今度は服の下から直にまさぐり、片方の手を下半身に向ける。

そして彼と甘く、愛し合っている妄想に体をゆだねる。

彼が優しく、胸を摘み、自分の秘所を撫でるという妄想。

「あっ」

彼の桜色の唇、形のいい尻、甘い香りの首筋、齒ごたえのある耳。

妄想が官能中枢を強く刺激し、彼女は直ぐに達した。

目の前が弾け、手はぬるりとしたものが伝う。

「……空しいんだよ」

終わった後に襲う自己嫌悪が彼女を苛む。所詮は幻でしかないのだ。

ベットの脇にあるティッシュで少女は自分の手と股を拭いた。そして起き上がるとキッチンに戻り、鍋の具合をみた。

まだ冷たかった。

料理が温まるよりも自分は“早い”のかと彼女は笑った。

その時、玄関から来客を告げる音が鳴った。

彼女は思う。

あっけない。

彼女は思う。

もっと早くからこうすればよかった。

彼女は思う。

早く姫野の性など捨ててしまえばよかった。

どうせ彼と結婚すればまたついてくるのだから。

「うふふふふ」

姫野薫は思う。

二人は確かにきついが一人一人なら殺すならば容易だと。
彼女は喫茶店でくすねたフォークとスプーンで見事に二人のボディガードを殺していた。

彼を求めて薫はあの家に来ていた。

鍵を無理矢理捻って壊し、中に入る。しかし、誰もいない。
ポストに貯まった新聞を見て、彼女は優一が暫く帰っていないことに気がついた。

「そういえば……一緒に暮らしてるとかいつてましたね。あの泥棒猫」

しょうがないので彼女は自分の部屋　正しくは優一の姉の部屋だが　に隠していた武器を集め、優一の部屋を漁った。

望みの物は引き出しにあった。
通帳と印鑑。

「泥棒みたいですけど、構いませんよね。不足の事態ですから」
彼女はそう独りいい、家を出る。

家の前には黒塗りの車があった。中には新鮮な死体がある。
そうだ、と呟き彼女はボディガードの財布を抜き取った。

「女房たるもの節約は大切ですからね」
もう、父に頼ることはできないのだ。これからは優一の口座を頼りにするしかない。

あまり手をつけていないからか、結構な額が貯まっていた。

これなら、優一と何処かに飛んでも暫くは安泰だ。上手くいけば逃亡先で家を買うこともできるかもしれない。

二人で一日中まぐあい合つのを想像して彼女は身を震わせた。
武者震いに似た感覚。

「あー、早く優一さんの泣く顔がみたいです」
上手くいったら、名前をどうしようか。
できれば彼の名前を入れたい。そして大きくなったら彼と交わらせよう。

そうすれば彼はきつとまた泣き叫んでくれるから。

それよりも女の子が男の子か、どっちなのだろう。

私と優一さんの子は。

彼女はくすくすと微笑み、大きなマンションの自動ドアを抜けた。オートロックらしく暗証を求められたが、彼女は自動ドアの隙間に紙を差込みこれを突破した。

玄関ホールを抜け、郵便物を見る。ゴシック体で柳川と書かれたポストには何もなかった。

最初から届けられるものがないのか、自分自身で持っていたのかは謎だが恐らく家にいるだろうと彼女は判断した。

どれを使おうかと手さげを覗く。

包丁がいいのか鎌がいいのか鋸がいいのか鉈がいいのか。

ワイヤーで締めるのもいいかもしれないし、アイスピックで目を潰してやるのもいいかもしれない。ハンマーでひと思いに頭を潰すのも捨てがたい。

その後舌を切り取り、壁に磔にして臓物を垂らしてやる。

彼女はエレベーターを昇った。そして最上階につき、右に曲がる。柳川と書かれた表札が二つもあった。

どちらなのだろうと思案していると片方から懐かしい匂いが鼻をくすぐる。

これは。

優一さんの。

料理の匂い。

ギリギリと歯が噛み締められる。

手さげを後ろ手にし、片方の手でインターフォンを押した。

苦しめて苦しめて苦しめて死にたいと懇願するまで痛めつけてから殺してやる。

扉は開かれた。

十九夜 裏続

相手に視認される前に扉の隙間に鋸を差し込む。しかし、鋸はギリギリと火花を散らし、止まった。

何かに引っかかったようだ。彼女はそれを見る。

チーン。

またか。

彼女はそれを掴み、引きちぎる。

今度はこの前のように転んだりはない。

扉も閉めさせない。

そのまま玄関に上がりこみ、尻餅をついている少女に微笑んだ。

目尻のほくろもそれに合わせて動く。

「こんばんは」

「……………」

「あなたらしくないですね。無用心に扉を開けるなんて。でもチーンを外さなかったあたり流石というべきなんでしょうか」

少女は人形のような青い瞳でぼうつと彼女を見つめていた。

「優一さんを返してくれませんか？ 嫌だといっても連れて帰りますけどね、うふふ」

最低限の注意を払いつつ武器を選ぶ。

持っている獲物を全部刺してどこまで生きていられるかというのも面白いかもしれない。

いや、瀕死の彼女の横で彼を陵辱するのも捨てがたい。

どちらにせよ彼は泣いて懇願するはずだ。

そこで希望を持たせて犯し、終わったら殺して泣き喚く彼をまた犯そう。

一方少女は思考していた。

優一だと思い、確認もせず開けてしまった。

近接戦闘において彼女に勝てる見込みはゼロ。

ならば自分は何をすべきだろうか。

「優一さん、早く出てこないと柳川さんのお手と指さんがさよならしちゃいますよー?」

彼女は陽気な声を上げ、二本の包丁を擦り合わせる。

「……うーん、出てこないみたいなのであなたの方、早速頂きますね。何本目まで優一さん隠れてられるんでしょうね、あはは」

「優一は……ここにいないんだよ」

真実を伝えるが一番効果的だ。

告げられた彼女の顔は微笑んだまま目を鋭い視線に変える。

「嘘言わないで下さい。優一さんの手料理の匂いを私が間違えるはずがありません」

「料理は残り物だよ。今温めてたんだ」

「では肝心の彼は?」

「それ教えるからあたしを殺さないって約束してほしいんだよ」

彼女は少し考える素振りをして微笑んだ。

「いいでしょう。殺しませんよ」

しかし、決して武器は放さない。

「優一、あの後誘拐されたんだよ。相手はアイツ」

「真実味がありますね」

「嘘だと思っなら勝手に探してくれていいんだよ」

「あら、そうですね。ではお言葉に甘えて……」

彼女は土足で部屋に上がる。少女はそれに対して何も言わない。

まずキッチンに向かい、料理を見てそれを口に入れた。

少女の目線が少しくつくなる。

「あら、本当に残りですね。さっき作ったにしては味が染みすぎますし、こっちはパサパサ」

次にトイレ、クローゼット、寝室、各部屋の順番に部屋を散策した。

「本当にいないんですね。無駄な徒労でした」

「終わったら帰って。それともあたしを今ここで殺す?」

「やるなら優一さんの目の前でやりますよ。生かさず殺さずじつくり」

「あっそ」

「もつと私に敬意を……！ まあ、いいでしょう。次に会う時はしっかりと殺してあげますよ。優一さん、しっかり泣いてくれといいんですけど」

少女は思う。

この女、完璧に壊れてきている。

感情の起伏の仕方が異常だ。

思考ロジックはどう優一を苦しめるか。

それ以外に感情が無い。

興味が無い。

それに服の染み、あれは既に別の人間を殺している。

染み付いた血生臭さは明らかに彼女を殺人者として物語っていた。

遅かれ早かれ彼女に捕まったら彼もただではすまないだろう。

間違っただろうか……。

いや、彼女以外にない。

それに糞は投げられた。

「ご飯食べるからもう帰ってほしいんだよ」

「あ、ええ。お邪魔しました」

彼女は少女の指示に従い、家の外に出る。少女は神経を張りながら彼女を扱う。

今の彼女はいつ気が変わって襲ってきてもおかしくないのだ。

「それでは、おやすみなさい」

「……おやすみ」

最後まで彼女は能面のように笑みを張り付かせて笑っていた。扉が閉まる。

その刹那、彼女の手が動く。

早い。

何かが風を切る音。

少女は条件反射的にそれを避ける。
がちゃんと音がして扉が閉まった。

扉の向こうでにやついた声が響いた。

「やっぱり、流石というべきですかね。死角に逃げるなんて……あ、悔しい」

少女の立っていた方向の壁にナイフが突き刺さっていた。

直ぐさに少女は鍵をかける。

「次は……次は絶対当てます。うふふふ、彼を捕まえたら絶対。目標ができました。ありがとうございます」

彼女はぶつぶつと独り呟きながら消えた。

どうすべきか。

彼女が来ると伝えるべきか。

不確定要素過ぎる。

下手したら彼女に二人とも殺されてしまう可能性もある。

いや、今ここで知らせても計画に疑問をもたれてしまうかもしれない。
ない。

本当の目的は悟らせてはならない。

少女は衛星で彼女を追いながら考える。

逆に彼女が二人に振り返り討ちにあっても不味い。

それでは役者不足だ。

「何いつてるんだよ」

私は神だ。

故にすべて私の思い通りに動く。

少女はうなずくと温めた料理を食べた。

「おいしい」
けど。

酷く不味い。

私が食べた優一の料理はもっと美味しかったはずだ。

料理の品質が落ちたのか、それとも彼がいないせいかな。

彼女はぼつと考えた。

二十夜

結局、僕は彼女の真意を知ることができなかった。

それから僕ら二人は必要な物を揃えて、彼女に言われるがまま別の家に移動した。彼女曰く何かをする時に一定の場所にいるのはよくないらしい。

「でもさ、もしもルナのそれが本当なら警察に連絡すればいいんじゃないかな」

「警察つてのは権力者に弱い組織なんだよ。それに未然に防げなきゃ意味がねえ」

彼女はそういいながらペットの餌を置く。一応、一週間は誰も餌を与えなくてもいいように餌を準備していくとのこと。

「しっかし重いなあ」

僕は背中と両手に小型の電子ジャーのような物を持たされた。これから炊き出しでもあるのだろうか。

ナナシさんは僕の五倍は重そうな荷物量のリュックを軽々と背負う。ちなみに何故か僕らは緑の作業服だ。彼女は日本仕様と聞いていたけど何のことがよく分からない。

「あたしと変わるか？」

「いえ、僕はこれで満足です」

そげな馬鹿でかいものを担がされたら僕はぺしゃんこになってしまっ。

そんなこんなで遠回りしてついたのがこの家。普通の借家っぽい家だがナナシさんの家の一つらしい。

「ひとつつてことは他にも家があるということですか？」

「さー？ あるんじゃないの？ 数えたことねえ」

数えるほどあるのか。一つくれよ。

家の中は家具家具らしいものは無い。しかし、一通りの設備は整っていて、フライパンや包丁、まな板があった。

昔の林間学校を思い出す。あの頃、僕の姉さんと僕はどうだったんだろう。

必死に思い出そうとして何も湧き上がらないことに溜息をついた。どうやら僕は早い段階から“辛い目”にあっていたらしい。

ナナシさんは窓を家につくと家中の窓を開けて換気を行った。僕も手伝う。

この家はさつきいた場所よりも小高い場所にあり、ちょっと町を見渡せたりなんかできたりする。

ええ、ここまで来るのは地獄でした。何度坂を上ったか。

一通りのことを終えたナナシさんはポケットからスコップを出し、自分の家の方角を覗いた。どうやらここから見えるらしい。

「……一応、お前も見ておけ」

そう悲壮感たつぷりな顔で僕にスコップを投げた。僕はそれを受け取り、覗く。

おー結構、いろいろ見えるんだ。

ルナの家のマンションも側面ながら見る事ができる。僕の家は……残念ながら住宅が密集しているせいで屋根すら見えない。

僕は次にナナシさんの家を覗いた。

扉の前に元姉さんが立っていた。

遠めながら何度もインターフォンを押しているのが分かる。

「なっ……これ！」

「ああ、薫だな」

ナナシさんはインスタントコーヒーにお湯を注ぎながら冷静にいった。

ちなみにそれはカップじゃなくて湯のみだ。

「入れ違いだっただな。でもまあ、あたしらがここにいることは多分柳川でも知らんだろうよ」

「今更……何しにきたんだろう」

「愚問だな」

その通りだ。人は初めから答えを分かかっていて疑問を口にする。

当然それは僕を。

「お前を連れ戻しに来たんだろ。昼、あんなおちよくり方したからだぞ。自業自得だな」

「見てたんですか」

「聞いてもいた」

ただし盗聴だけどな、と彼女は語る。

「あのままだとナナシさんの家が滅茶苦茶になるかもしれない……」

「お前がいないと分かれば直ぐに帰るよ。うちに入っても警備会社に連絡が行くし、動物は臆病だから何もしない。いくらアイツでもそれくらいは理解してるはずだ」

「でも、あの人はボディガードがついてて逃げたりできないってルナが……」

「当然……逃げたんじゃねえのか。あの怪力馬鹿ならやるだろ」
ナナシさんは一瞬眉をひそめ思案顔になったがそれも直ぐに元に戻る。

「僕を連れ戻しに……」

どこへ連れ戻すというのか。もう既に僕らは離別している。もうどこにも戻ることはできないし、戻ろうとも思わない。

元々一緒でも何でもなかった。

「あんまり見続けるな。まさかとは思うけどよ、見つかったらことだからな」

「うん」

「顔青いぞ。薬ちゃんと飲んでるか？」

「病院通ってなかったら腕のギブス取れてないって」
「それもそうだな」

僕はそっぴいなから持ち物から薬を取り出し、手のひらに溜める。そしてそれをナナシさんから受け取った水で流し込む。

喉を薬が通り、胃の中に落ちたのがわかった。

「飯はどうする？」

「僕は……いいや」

「寒いのか？」

震える僕にナナシさんが近寄った。僕は首を横に振る。

「ちよつと怖かっただけ」

「そうか」

ナナシさんから寝袋を受け取った僕は別の部屋で横になった。

頭上には電気のランプ。

彼女はお腹が減ったらしく携帯食を作っていた。何でもコップ一杯の水で温かい料理ができるらしい。

「うおおおおおおお、すげえええ！」

なにやら壮絶なことになってるらしい。僕は襖の隙間から顔を出してそれを見た。

「おい、マジでお湯が沸いてるぜ！　すげーな、人類」

「どれぐらい待つの？」

「ん？　えーつとだな」

彼女は説明書を読む。つてか読んでなかったのかよ。読み終わった彼女はしかめっ面で顔を上げた。

「二十分だつてよ……」

「結構長いね」

「だな」

「……やっぱり、僕も食べていいかな」

二十分待つてできたカレーを僕は口にする。

「なんつーか、うん」

「普通だね」

「まあ、千二百円も出して買うもんじゃないな」

「……高いね」

「だな」

二十一夜

日曜日。

即ち休日であり、今日この日である。

寝袋から起き上がった僕は家の中をうろつき、ナナシさんを探した。しかし、彼女はどこにもいない。

まさかの夢落ちかと内心ビクビクしていると家の外でパチパチと焚き火の音がした。

外に出るとナナシさんは折りたたみ式の椅子の上に座り、フライパンで肉を焼いていた。分厚いベーコンの上に卵が落とされじゅわつといい香りが立ち上る。

「何してるんすか」

「見てわかんねえのか？」

「誠に残念ながら」

「飯だよ、飯」

いや、それは分かるんだけど、何故わざわざ炭を使って飯ごう炊飯とベーコンエッグを作らねばならないのか、とわたくし疑問を投げかけておるわけでして。

とりあえずソフトに聞いてみることにする。

「なして、コンロとか電気を使わずに炭火で？」

「その方がうめえし、かつこいいだろ」

彼女はそういうと事前に用意していたらしい皿にハムエッグを移す。そしてまたベーコンを落とし、火にフライパンを近づける。

「飯ごうはさつき蒸らしたところだからもう食べていいぞ」

「……了解であります」

顎で彼女はソラマメ状の物体を指した。僕はそれに投げやりっぽく合図。

人生長生きするコツはあまり深く考えないことだと思う。

十六歳で既に悟りを開きつつある僕。

僕は手渡された醤油をベーコンエッグにかける。そしてソラマメ君の蓋を焼けどしないように開け、割り箸でもそもそと銀シャリを口にした。

こんなもの口にしたらところで飯は飯だ。

ぱくり、もぐもぐ。

……………あれ。

「凄く……………美味しいです」

「だろ？」

ナナシさんは僕の言葉を聞いて勝ち誇ったように笑う。

不思議なことに米も卵も異常なまでに美味しかった。

「それでこれから何をするんでしょうか」

ナナシさんは家具も何も置かれていない部屋にこの町の地図を広げ、僕の持ってきた電子ジャーっぽい何かを持ってきた。

彼女は男らしく床に座ると、静かに口を開く。

「当初、お前はそこにいればいいとあたしは思ってたんだが、不足の事態のために情報の共有をしておこうと思ってたな」

とりあえずうなづく僕に彼女は言葉を続ける。

「お前に持つてきてもらったこれだが、簡単に説明するとジャミング装置だ」

「妨害電波を出す機械ってこと？」

「そうだ。これをこの町の指定ポイントに置いて、柳川の機械の通信を妨害する。奴がメールを送っても機械はそれを受信できない。

その間に機械をあたしがクラックして使用不可能にするってのが筋書きだ」

「その機械って何個あるかわかんないんじゃない？」

「高レベルの数学の話になるから説明は省くが、実はそうでもない。機械の無線の範囲と位置が分かっていたら他の機械の位置もある程度、割り出すことができる。あたしが地下でPDAを使ってそれに侵入した時、近くに他の機械から発せられていた電波は拾えなかつ

た。これらのことから相互の電波による障害をなくす為に等間隔に機械は配置されていることがわかる」

そしてイコールでその割り出し理論の正しさもわかるってことか。「よくわからないけど。それしか方法はないってことだね」

「まあ、そうなるな」

彼女はポケットからマジックを出す。ポイントを書き始めた。

「うーん、気のせいかな。このポイントを見る感じでは町中にこの炊飯ジャーを置かなくてはいけない気がするんだけど」

範囲はそこそこ狭いが設置しなくてはいけないポイントが十数箇所くらいあるような気がする。

見間違いであることを祈りたい。切に。

しかし、ナナシさんは当然だろといった顔で見上げる。

「ん？ その通りだぞ」

「いや、だって僕が持ってきたのって大分少ないわけで……」

「ああ、あの後私から運んできたから気にするな」

何故そんなものが家に十個以上もあるのかと激しく問いたい。問い詰めた。

「ただど知ってしまったら僕もそちら側の人間にならざる負えないような気がするので沈黙しておこう。」

「というわけで寝るぞ」

「脈絡もない言葉で涙が出そうです」

ナナシさんによると昼からやったらモロに変質者な上に目立ちまくりで不法投棄にも見えてしまうので夜間に作業を行うとのことだった。

道路のど真ん中とかにも置くししょうがないといえましょうがない。

「つーことで月曜の深夜二時まで寝とけ」

ナナシさんは早速ごろんと横になるとぐーすか寝始めた。悔しいかな、僕もお腹一杯な上に寝起きなため少し、いや結構眠かった。

僕も彼女を見習って横になる。そして思案した。

「本当かな」

本当に柳川月が町の人間を殺そうとしているのだろうか。確かに変わってはいるがそこまでエキセントリックな人間ではなかったと思う。

しかし、同時に強く否定できない自分がそこにいた。

彼女ならやりかねないという奇妙な自信。

何故だろう、記憶にないはずなのにルナの黒い姿を想像できてしまふ。

僕は記憶のあったころルナとどう過ごしていたんだろう。

白い天井を眺めながら僕は一人、震えた。

二十二夜

普段肉体は休息を欲しているというのにいざそれが満たされると今度は休息を拒むようになる。いくら美味しいものでも毎日そればかり食べてたら嫌になるという感覚に似ているのかもしれない。

つまり何がいたいのかというと、僕は。

「もう寝れません……」

寝るということに飽き飽きしていた。

時刻は夜中の九時。

寝るといふ作業を堪能しきった僕は部屋の中をうろつくことも荷物を漁って暇を潰すことにも飽き始めていた。

幸福論曰く退屈は不幸の原因だという。ならば僕は今バリバリの不幸なのだろう。

ぐうぐうと寝ているナナシさんを置き去りにした僕は部屋を出て、ベランダから星を眺めていた。

町の光が強いせいか、そんなに星は見えないけど、やはりそれは綺麗だった。

星座なんて分からない。僕はそんなロマンチストではないし、星座よりも餃子が好きな食べ盛りの十六歳だ。

でも綺麗だと思う物はガラス球だろうがダイヤモンドだろうがビーズでできたものでも美しいと感じるし、ファーストフードの料理も美味しいと感じる。

そんなことを考えたら少しお腹が鳴った。美しいと思う気持ちよりも食い気の方が勝っているあたり、僕は芸術家や研究者にはなれなそうだ。

そういえば最後にご飯を食べてから結構時間が経っているな。

「よし」

作業服のまま靴を履き、外に出る。ここは民家が密集している場所よりも少し離れている為か少し暗い。

周りは手入れを全くされていなくて、草木が生い茂っている。僕は文化の香りのする道に出るために昼、死にそうになった階段を下った。夜のためか鉄製の手すりは自分の手よりも冷たくて気持ちがいい。

ふと一人で出て大丈夫だろうかという疑問が沸く。

まあ、一応ナナシカードも持ったし、書置きもしたから特に問題は無いだろう。

長い階段を下った先は住宅街。文字通り住宅が密集しているのだが、酷く閑散としていて人のぬくもりを感じない。

世界に僕ひとりだけ。そんな幻想が沸いてくる。

僕は道を歩き、大きな自然公園の横を通り過ぎる。そして誰もいない交番の横をコソコソと過ぎた。

更に少しいったところに僕の望みのものはあった。

文化の真髄。

コンビニだった。

自動ドアを潜るとまず目に入るのは季節を無視したといわざるを得ない年中無休のおでんとおにぎりのコーナー。

おにぎりもいいなあ、僕は冷やかす。次にサンドウィッチを過ぎ、買うわけでもないおつまみのコーナーを眺めながら過ぎた。

店員は某ハーフの方とは違う人工金髪にポニーテールの目のふちが黒いお姉さんだった。何か逆らったらタバコで根性焼き入れてきそうな風体である。挨拶も気のない返事だった。

僕はとりあえず、小さな籠におにぎりとアイス、それにカップラーメンを放り込む。そして会計に向かった。

気のないお姉さんが気のない声で聞いてもいない会計を口に出す。僕は恐る恐るおでんと肉まんを二つつけてもらおうと声を出した。急に殴られたりしないことを祈る。

「あの……すみません」

「……あ、はい？」

意外としつかりとした声だ。結構いい人なのかもしれない。なんてストックホルム症候群にかかりながら続ける。

「肉まん二つにおでんを……」

「ああ、はいはい」

彼女はカップを片手に早く注文をせよと僕をはやし立てる。

「えっと、こんにやく糸コンだいコンそれにたまご。それを二つずつお願いします」

クスリと彼女は微笑んだ。

「ん？」

「あ、いや、コンが多いなあと思ったので……すみません」

「いや、別に気にしてないですよ」

そこまで心の狭い人間ではない。

少ししょんぼりした彼女に何故かうろたえる僕。

「ん？ 男なんですか？」

「そうだけど……」

「女の子かと思ったら違うんですね。どうりでちょっとハスキーなわけだ」

「褒められてるのかなあ……」

「あ、またあたし……。ごめんなさい」

「……いや、いいよ！」

また僕はうろたえた。彼女は微笑み、カップにおでんの汁を入れフタをする。

次に蒸し器の中に並べられた肉まんを薄いビニールにつめる。

そして「ご一緒でよろしかったですか？」と同意を求めた。

「あ、はい」

僕は頷き、レジが提示した千二百七十五円という金額を財布から探す。

「うーん、大きいのかなあ。」

「あの、大きいのもいいですか？」

「全然構わないですよ」

彼女は嫌な顔一つせず、僕の五千円を受け取る。

「あ、私丁度あります」

そこでぬつと横から白い手が出て千二百七十五円をレジに置く。

店員さんは誰だろうとぼかんとした目で見ていて、僕はぎょっとした顔で見えて、彼女は微笑んで首を傾げた。

僕の元姉さんは可笑しそうに。

白い手さげを持って。

二十三夜

今思えば恐ろしいこと。

成長してから昔のことを思い出してぞっとすることがある。

例えば危険な場所で遊んでいたとか包丁で友達とチャンバラしていたとかそんな些細なことが普通の人にはあるんじゃないだろうか。過去らしい過去がぼっかりとない僕の場合はやはり最近にそれはある。

中学の頃、僕だつて決してもてなかつた訳じゃない。ラブレターの一通や二通……いや二通が限界なんだけど、もらったことがないわけじゃない。

一通目は哲学的な内容で途中から数学と量子力学の話になり僕を訳分からなくさせてくれた。ルナ曰く「その人はすつごく優一のことが好きなんだと思うんだよ」と二度に渡つて僕に説明したがなんのこっちゃ分からなかつた。

結局よくわからない内容に僕は嬉しさよりも不思議な感じが大半を占めていたわけだ。

二通目はごくありふれた内容で（といっても他にごくありふれた内容をもらったことがあるわけじゃない）相手は僕が当時入っていた美術部の先輩だつた。

校舎裏というありがちな場所に呼ばれた僕は彼女に手紙を渡され、返事を二日後……つまり次の週の月曜日に聞かせてほしいといわれた。

女顔だの、男装してる女子だのさんざん言われ続けた僕は内心舞い上がり姉さんに手紙をもらったことを告げた。

姉さんは当時から僕のことを姉の垣根を越えて好きだと公言していて僕によく纏わりついてた。なんとか普段から姉離れしたかった僕はこれで姉さんを見返してやれる、なんて畑違いのことを思いながら自慢したのだ。

そう自慢してしまった。

それがいけなかった。

二日後彼女に呼び出された場所に行くと相手は左手を骨折、右手も包帯が巻かれていて、頬には血の滲んだバンドがされていた。

彼女は僕に頭を下げると何度も何度も泣きながらそれは冗談だったんだと謝った。僕は内心がっかりしながら彼女を許し、別れの手を振った。

今思えばあれは姉さんがやったことだったんだと思う。

きつと彼女の指を折って、腕を砕き、頬に釘を刺したんだ。

僕もやられたことがあるから分かる。今でも釘をみると姉さんが釘打ち機を持って笑う顔がフラッシュバックする。

そう今みたいなおんな顔。

何かいいかげんな店員さんに彼女はにっこりと微笑んだ。僕の肩に手を置いてぎゅっと握り締めることも忘れない。

「私、この人の姉なんです。ねー、優一さん？」

「そう……です」

「急にどっかいつちゃうんで心配しましたよ。あっちの公園でこれ食べましょうね」

元姉さんは僕の股間をばれないようにさすり、笑う。僕はギリギリと締め付ける肩の重みに二つ返事で答えるしかなかった。

何か不穏な空気を感じ取った店員さんは元姉さんにいう。

「なんか、無理矢理いわせてる感じしますけど……」

「うるさい！！ 今、わたしが優一さんと話してるでしょう！？ 私が話してるんですよ？ わかってますか？ 私のこの時間を奪わないで下さい！！」

「えっ」

急に叫ぶ元姉さんに店員さんはモロに引いた。そして何かやばい感じを悟ったらしい。

「けっ、警察……！！」

「それは困ります」

ポケットの中から携帯を出した店員さん。

元姉さんは何かを振るう。

そして直ぐに元に戻すとにやりと笑った。

ぼろぼろと何かが落ち、店員さんの手から携帯が零れる。

店員さんはそれを見てぽかんと口を開けた。

「え……………あっ！ ああああああああああああああ
あっ！！」

そして叫んだ。

床に転びのた打ち回る。

元姉さんはナイフで彼女の指だけ切り落としたのだ。

ぞっとした。僕はただぞっとした。

彼女は僕の背中をナイフでなぞる。

「私、煩いのは嫌いです。優一さんもそう思いませんか？ 子供が
デパートとかスーパーで叫んで走り回ってるのって嫌じゃありません？ 私
は嫌です。嫌だから“僕達静かにしなさい”っていうんですよ。でもこの
彼女は聞いてくれそうにないですよね！。どうしましようか、お口が利けな
なくなったら静かになると思うんですがどうでしょう？ ねえ、優一さん」

喉が酷く渴く。僕はカラカラの喉に無理矢理、唾液を流し込む。

このままじゃ彼女は殺される。どうにか僕がしないと……………彼女が
殺される。

どうにか僕が。

「あ……………」

「あら、何ですか？」

「あ……………彼女だけ、じゃないと思う。この店にいるのって、シフト。
普通二人は、いるよ」

「そうですね。優一さん、賢いじゃないですか。じゃあ質問タイ
ム」

なんでこんなにこの子が叫んでいるのに他の人は来ないのでしょ

うか。

彼女は低く冷静に僕の耳に囁く。

確かに何故、出てこないんだろう。こんなに叫んでいるんだ。流石に気がつくはずだ。

まさか。いや。

嫌な想像が湧き上がり、背筋を汗が伝う。

姉さんは最初どこにいた？ どこから来た？

僕の後ろから来た。

横の自動ドアからじゃない。

「あ……だつてそんな」

「今日の優一さんはいつも以上に賢いみたいです。お姉ちゃん嬉しいです……わーわー煩い！！少しは黙れないんですか!？」

「あぁっもう!」

彼女は怒りをあらわにして泣き叫ぶ店員さんに怒号を散らす。

ナイフを取り出し、レジ裏へと向かおうとする。僕はそれを後ろから抱きしめて止める。

それでも彼女の力は強くて、僕がいてもいなくても変わらないような気がした。

離したい。

僕がいても意味が無い。

でもそれを離したら僕は大切な何かを失うような気がした。だから離さなかった。

「あ……あの」

「何ですか、庇うんですか？ この壊れたスピーカーを。あーあー、余計イライラしてきました。お姉ちゃんを気遣ってくれないですし、昨日は無視。……腕の一本でも貰っていきましょうか。あ、目背けたりしたら直ぐに殺しちゃいますからダメですよ？ ちゃんとは見えないと。あーでも、自分から殺してくれっていうかもいれませんか。激痛で。でもどの道出血多量で死んじゃいますよね！ あはははははははははは!」

「あ、あの！」

僕は叫ぶ。

心を凍らせて。

もしもここに鏡があったら僕はきっと泣き笑いを浮かべていただろう。

目からポロポロ涙を流しながら、きつと笑っていただろう。

「ぼ、僕を早く……だい」

「だい……なんですか？」

彼女は振り向いて微笑む。目じりのほくろが歪む。

僕も負けじと微笑む。

無理矢理顔を、心を捻じ曲げる。

「だい……抱いて、下さい。僕を、早く抱いて下さい」

元姉さんはぽかんと僕を見つめると笑い出した。可笑しそうに楽しそうに狂い、笑う。

そして髪を掻き上げると、唇を舌でぬめらせて僕を見つめた。

「いいですよ、その心がけ。優一さんに免じて彼女は助けてあげましょう。でも……優一さんがちゃんと私に抱かれてくれないと嫌ですよ？」

「……はい」

僕は悪魔に身を売った。

二十四夜(前書き)

文章のセンスがいつも以上にないです、ごめんなさい。

二十四夜

降り止んだはずのは雨はまたパラパラと降り出した。窓から見える夜の街は暗いながらも煌々と光を発して、雨粒を銀色に染めていた。

僕と彼女はいわゆるラブホテルにいて、僕は動物園の折の中にいる生き物のように外を呆然と眺めていた。

きゅつと蛇口のしまる音。少し遅れて元姉さんがバスタオル一枚で現れた。

「セーラー服、自分から着たんですか？」

「どうせ着ると思ったから……」

「正解ですけど……やっぱりお姉ちゃんが着せたかったですね」

彼女はタオルを取り、体の細かい水を拭く。胸が重力に引つ張られ少し揺れた。

僕は目を背ける。

元姉さんはそのまま部屋の冷蔵庫を開けると振り向く。

「何か飲みますか？」

「僕、そんなお金ないし……」

「何いつてるんですか、お姉ちゃんが出してあげますよ」

「そんなの薫さんに悪い……」

パタンと冷蔵庫を閉めると真っ直ぐ彼女は僕に近寄った。タオルが床に落ちる。

姉さんにはっこり微笑むと、僕の頬を叩いた。

パチンと重い音。

口の中が切れて鉄の味がする。耳の中はキンキンと音を鳴らす。

「お姉ちゃん”ですよ？ そんな他人行儀なのはダメです」

「……はい、お姉ちゃん」

ぼうつと彼女を見て言う。彼女はそれを聞いて嬉しそうに僕を抱きしめた。

柔らかい石鹸の香りが鼻をくすぐり、濡れた髪の毛が頬に張り付く。

そして姉さんは僕を抱きしめたまま顔を真つ直ぐ見据えるといった。

「ごめんなさい、痛かったですよね。でも優一さんがいけないんですよ？ 急にお姉ちゃんを他人行儀で呼ぶんですから。私の下の名前を呼ぶ時は結婚した時だけにして下さい。それ以外は嫌です」

「うん、ごめんなさい……」

「今日は優一さんが自分から私を愛してくれるんですよね？ 満足させてくれるんですよね？」

「うん」

「お姉ちゃんの教えてあげたお姉ちゃんの好きのところ、覚えてますか？」

「ちゃんと、覚えてる」

まだそれは忘れられてない。その時の思い出も。

「じゃあ、いっぱいいっぱい自分からお姉ちゃんを悦ばして下さいね」

「うん」

「もしも、お姉ちゃんをいっぱいいっぱい可愛がってくれたら」

優一さんを自由にしてあげますよ。

「……………本当に？」

僕はその言葉に霞みかけていた意識が戻る。

絶望の中で見えた唯一の希望。

姉さんは微笑み、軽く僕の唇をついばむ。

「ええ、勿論です。でも本気で頑張ってくれないとお姉ちゃん嫌です」

「本当に本当に本当に本当に？」

「そんなにいわれるとお姉ちゃん離れがしたいみたいでちょっと悔しいです」

「いや、お姉ちゃんと離れたいってわけじゃない、よ」

口ごもりそういう。すると彼女は目を見開き僕を強く抱きしめると大きな声でいった。

「そうですね、そうですね！ 優一さんが私を嫌う道理なんてどこにもないですよ。優一さんは私を愛していた。なのになのになの！ あの雀どもが優一さんに変なこと吹き込んで、垂らし込んで、あまつさえ優一さんを犯して私から奪い去って！ ああ、許せない。やっぱりあの時に殺しておけばよかったです。生きたままはらわたバラして鼠の餌に」

「ね、姉さんっ！」

「……あら、優一さんどうしたんですか？ 顔が青いですよ？」

「い、いやその」

急な姉さんの独り言に僕はビクリして止めてしまった。何か誤魔化す言葉を搜していると姉さんは顔を赤くしてはにかんだ。

「あ、そうですね！……じ、じゃあ、早速可愛がってください」

「いや、あの、うん」

彼女は僕の手を引いてベッドに倒れこむ。

何かがおかしい気がする。

姉さんはこんなに激昂するような人間ではなかったはずだ。

何かがずれている気がする。緩やかに何かが現在進行形で。

僕はいつからこんなおかしなことになっていたんだろう。

ちよつと前にはルナと一緒に二人で勉強していて、姉さんの作ってくれたお弁当を食べて……全てが上手くいっていたはずなのに。

何故僕はベットで彼女とまぐわっているんだろう。

天井の鏡に映る少年は僕で。

彼女と寝ている僕が僕で。

いつから？

それはいつから始まったんだろう。歪みはいつから。

本当の姉さんが僕を弄んでいた時から？

姉さんが僕を騙して犯すようになった時から？

ルナが僕に一服盛った時から？

或いは生まれた時から既に僕の人生の歯車はずれていたのだろうか。

だとしたらあの時死ねば救われていたのかもしれない。そう思った。

全てが終わり、彼女は肩で息をすると僕に口付けをした。目はとろみがかかり、頬は赤く上気している。

「優一さん、すごいです……、お姉ちゃん暫く立てません」

「……自由になってもいいよね」

「もう、雰囲気ぶち壊しですよ？ マイナス五点」

「……………」

「そんな怯えた顔しないで下さい。百点が九十五点になっただけです。勿論、合格ですよ」

僕は彼女にばれないように内心ほっと溜息をつく。

「あ、今ほっとしましたね」

「……いや別にそんなこと」

彼女はむっとすると僕を抱きしめる。石鹸の匂いとは違う柔らかい香りがした。

姉さんは優しく僕の背中を撫でると囁く。

「これで……チャラです」

「ありがとう」

で、いいのだろうか。

姉さんは少し戸惑うように僕に聞いた。

「……あの、お姉ちゃんの最後のお願い聞いてくれませんか？ お姉ちゃん優一さんのこと心配なんです」

「何？」

僕はそれを了承せずに聞く。状況次第ではちゃんと断らないと、だめだ。

彼女の言葉を身構える僕。しかし、意外なことにそれは至極普通な質問だった。

「優一さん、今何をしてるんですか？ 何かとんでもないことに巻き込まれているんじゃないですか？ お姉ちゃんを安心させる為にも何をしてるか教えてほしいんです。それだけ、どうかそれだけ教えて下さい」

ぎゅっと抱きしめ涙を流し彼女はいう。いとおしそうに僕にいう。或いは悲しそうに。辛そうに。

だから僕は答えた。

一つずつ丁寧に。

ルナのこと。ナナシさんのこと。

とつても狂った物語を。

彼女はそれをただ頷いて聞いた。そして全てが終わると彼女は少し悲しそうに僕を見た。

「優一さんがいなくてもいいこと……なんていっても無駄、ですよね」

「……うん、もしもそれが行われるなら僕は何とかして止めなくちゃダメだと思うんだ。ルナを知ってる僕がやらなきゃ」

「男の子になったんですね。優一さん」

「うん」

ずっと前から男だったけど。とは言わない。

彼女は僕の頬を撫で、優しく額にキスをした。

「なら、もういかないとダメですね」

「ごめんなさい」

「いいですよ」

それから僕は姉さんに作業服を着せてもらい、部屋を後にした。歪みすぎて真っ直ぐになってしまった。

僕は姉さんにそんな印象を覚えた。

彼は知らなかった。

彼女がその後一人でクスクスと笑っていたことに。

「どんなことがあっても女性を置いて出て行ったちゃダメですよ優

「さん。零点ですね」

その手に彼の服に仕込んだ発信機の受信装置。
彼女はただ笑っていた。

二十五夜

「くそう……」

家についた瞬間、雨は止んだ。僕は憎々しげに黒い空を眺め、すっかり冷めてしまったおでんと肉まんに涙する。

窓から漏れる光からどうやらナナシさんは起きているようだと推察。

扉を開ける。

するとナナシさんは雑魚寝状態でクチャクチャとスルメを噛んでいた。口の隙間からひよろつとしたゲソが出ている。

「おう、お帰り」

「ただいま……」

「ずぶ濡れだな……ん、どうした？」

「あ、これはお土産」

「そうじゃない。なんかお前おかしくないか？」

そうナナシさんという。僕は最初からおかしいんだけど、とか内心愚痴った。

眩暈がしたかと思うと目の前に床があった。どうやら倒れたらしい。なんだか体が重い。

ナナシさんの声が一枚壁を隔てたようにくぐもって聞こえた。

彼女は何か叫ぶと僕を揺らす。

「おい！ お前、何があつた！」

僕は何かつぶやくけどそれ自体が理解できない。

まるで別の何かが憑依したようなそんな感じ。もしくは別の国の言葉で話しかけられているような感覚。

「おでんと肉まん……冷めちゃった。ごめんね」

「……なにいつてんだよ!？」

「ちよつと……疲れちゃった」

僕の視界は闇に包まれた。

「気がついたか？」

「ん……」

起きると僕は普通の布団で寝ていた。普通の布団もあったのかと驚く僕。

彼女は僕のクスリの容器を自分の目の前にかざしながら壁にもたれている。

「オーバードーズ」

「何その必殺技っぽい名前」

「薬の過剰摂取のことだ。なんでこんなに飲んだ？」

そういつて彼女は空になった容器を握りつぶし、床に落とす。

「ちよつと辛いことがあって、それから逃げたくて……ごめん」

「アホかてめえ。モノがモノなら死んでもおかしくなかった。あの後、お前が胃が空っぽになるまで吐き続けなかったら今頃病院だぞ。薬が元々少なくなってたおかげか薬の効果が弱かったのかしらねえけど運がよかった以外のなにものでもねえ」

「そう……ですね」

果たして僕にとってそれはラッキーだったんだろうか。

そのまま死ねたら楽だったなと少し思った。

「……何があつた」

「うん……それがね」

僕は天井を眺めながら答えた。

店員の指を吹き飛ばし笑う姉さん。そんな姉を止める為に自分の身を差し出した僕。

自由になるために最も嫌なことを選択した僕。それを提案した姉。肌を重ねる度に姉さんとの地獄のような日々が呼び起こされ、僕を苦しめる。

全てが終わった後、僕は苛み続ける鬱積した気持ちから逃れるために携帯用の薬をありつた借口に含み、公園の水で流し込んだ。

しばらくして苦しかった気持ちはふわふわとしたものが入り混じ

り、記憶や意識は曖昧になった。今思えば何度も道端で転び、泥だらけになったような気がする。

頬にかかる冷たい雨だけは覚えている。

結局僕は何からも救われることがなかった。ただただ傷口を広げただけ。

余計に苦しんで狂っただけ。

何の意味もなかった。

ナナシさんは全てを聞くと無表情でお茶をすすった。

「そうか、悪かったな。一緒にあたしが付いていてやれなくて。：

…そうすりゃ、少しは違っただのかもしれない」

「そんな……そんなことないよ。きつとこれは必然なんだ。苦しむことが僕が生まれてた上での運命なんだ。そう決定づけられているんだ。だからナナシさんは何も悪くない」

「キリストがおめーは」

「そんな大層なもんじゃないよ……」

僕は何も背負ってない。何も背負えてない。何か背負えるような人間じゃない。

できるのは苦しむことだけ。

ナナシさんは少し柔らかい表情で僕に言う。

「今は、もう寝る」

「でももう時間が……」

「作業の能率が悪くなるよりは時間超過の方がずっといい。あたしたちは一心同体なんだ。常にサポートし合わなくちゃいけない。サポートする相手が、してくれる相手がへ口へ口じゃ意味が無いだろ？　そういうことだ」

務めて彼女は冷静にいう。だけどその真意は僕の体を労わってのことだ。

僕は彼女の足を引っ張ってるのかもしれない。いや、引っ張っている。

それが最も辛い。

「あたしもお前が寝てる間にできることはする。お前はお前のしなきゃいけないことをしろ」

「ようは寝てるってことだね」

「まあ、そうだな」

彼女はにつと口を曲げて白く健康的な歯を見せる。

その言葉に僕は何だか救われた気がした。

常に彼女は僕を救ってばかりだ。それに飽き足らず今度は町を救うという。

キリストは彼女だ。

全てを救うヒーロー。

今回のことが終わったら僕は彼女に何かお礼をしたい。

今思えば僕は何も彼女に返してないんじゃないだろうか。

いや既に作った借りはでかすぎて返すというレベルのものじゃないのか。

何か考えよう。

僕自身がめんどくさいと思ったのか分からないけど、それは自然と口からでた。

「ナナシさん、恩返ししたいんだけど何がいいと思う？」

「それはあたしにとって何か？」

「うん」

「またぶつとんだ考えだな。いや、でもお前らしいのか……そうだな。んー」

彼女は思案に耽ると頭をかいた。

「わかんねえ。何かほしいわけじゃないし、全てが終わってから考えることにする」

「じゃあ早く終わらせるためにも寝ないとね」

彼女は笑う。

「そうだな、早く寝てくれるとその分、早く終わるな」

僕は目を瞑り、暗闇に意識を委ねた。

二十六夜

僕が目を覚ました時、全ては既に時刻は五時をとくに回っていて、ナナシさんは出かけようとしているところだった。

どこかけだるい体を動かして僕は彼女と相對する。

「おお、ようやく起きたか。まあ丁度いいから手伝えや」

「その前にうがいで顔洗ってご飯食べないといかんですよ」

「アホか」

よく見ると彼女は所々服に泥をつかせていた。外は小雨。

でも彼女が雨の中、転ぶような失態をするとは思えない。

その僕の疑問に気がついたのか彼女は何のでもないようにいった。「正直あたしだけでどうにかなるかと思っただけだが、そうはいかねえみてえだな。やつこさん、下僕どもに銃持たせてうるつかせてやがる」

「それってあの鉛弾が出るアレですかな？」

「ハジキともいうな」

ルナは手下を使ってナナシさんの妨害を防ごうとしてきたらしい。ナナシさんはピンピンして無傷なようだけど、普通に考えてそんな場面に出くわしたら怯えるのがデフォじゃないのか。

なんでそんなワクワクしてるんだ。

「何だか現実離れしてきたね。まさか僕まだ夢の世界じゃあるまいな」

「うし、あたしが腹にキツイのお見舞いしてやるつか」

「よーし！ 頑張るぞおお！」

それは御免被る。

「その粹だ」

僕とナナシさんは靴を履き、荷物を背負う。バックバックの中身は最低限の装備。両手にはジャミング装置。

扉を開けると、エンジンの掛かったモスグリーンのジープがあっ

た。

ふむ、ある意味これは普通だ。外は雨だし、ビショビショになるのは簡便願いたいから車という選択肢は素直に嬉しい。

しかし、疑問がある。

「運転免許って十八歳以上じゃないと貰えないんじゃないか」
「そうだな」

「じゃあ、ナナシさんって十八歳なんですか？」

先輩と分かった瞬間ここぞばかりに敬語に変更する僕。ナナシさんは笑顔で僕を殴るといった。

「お前なー、あたし同級生だろ？ 忘れたのか？」

「なるほど二年ダブりの……がっ」
喉に手刀を食らった。

「まだ十六だ。オーケー？」

「……いえすいえす」

だからその手を離せ頭が割れるなんか出ちゃう味噌とか目とか痛いんですわよ遺体になっちゃう。

ナナシさんは僕を解放すると行くぞといった。僕は飼い犬のごとくそれに従う。

「でも免許ないと運転できないんじゃないか……まさかここで第三の仲間が!？」

「なにいつてんだお前、当然あたしが運転するに決まってるだろ」

「決まってたのかー、ならしょうがない……わけねーよ!」

「お、ノリツツコミか」

「無免許運転よくない!」

インディアン嘘つかないと誰も分からないネタを披露。

「あのな姫野、車で一番重要なのは運転できるかそうでないか、だる? そしてあたしはできるってわけよ」

「できるんじゃないね……」

もう否定する気すら失せました。もうこの人無茶苦茶過ぎる。

「まあ、泥舟に乗ったつもりでいろよ」

「雨振ってるだけにそれ、シャレにならないから」
僕は遺書を書く為の墨と紙を探した。

拝啓、おふくろ様。僕はもう限界です。

てつきり、車は乗り回していて運転技術もあるものだと思っただけどそんなことはただの幻想で希望的観測で、現実是非常で熾烈だった。

ナナシさんはアクセルとブレーキを間違えて踏み、危うく壁に激突しそうになったり一般道で百キロで走行してくれました。

「んー、違ったか」

「……あなたはどこのアミバだよ、もう」

僕らはやっとのことで指定の場所についた。もしもこれが通常の時間帯で車通りが激しかったらと思うとぞつとする。

何もしていないのに千キロカロリー（ご飯お茶碗十杯分に相当）を消費し、がつつり汗を掻いた僕はよろりと膝を抱えた。

「で……深夜の中学校を目前に何をするんでしょう」

「どっか見つからない場所にジャミング装置隠して、さよならするんだよ」

「りょうかい」

僕らは車から出ると後ろに詰まれたジャーっばい装置を取り、中学に近づく。

雨が冷たい。

黒い地面を水が流れ、その水は排水溝に流れていく。

唐突にパンと音がした。

ナナシさんが何かしたのだろうかと顔を上げて横を見る。

彼女はどこにもいなかった。完。

「はっ？」

顔を前に向ける。またパンと鳴る。

ナナシさんはいつの間にか駆けていて、校門を潜っていて、黒い何かに叫んでいた。

「人に銃向けたってことはどうなるか覚悟ができてんだろーな!」
低い姿勢のまま突っ込み、アッパー。
そして回し蹴り。

人が吹き飛ぶところって初めてみたよ、僕。本当に漫画みたいに飛ぶんだね。

「最初に撃って当たらなきゃ、二発目に当てるのは難しい。そして二発目で当てられないようならお前はアマチュアなんだよ」

彼女ははまだ拳銃を取ろうと這いずり回る男に近づく。

拳銃を取った瞬間、手を踏みつけ、もう片方の足で顎を蹴った。

「あたしを殺したいならナイツでも持ってこいや」

そして拳銃を取り上げると、もう一発蹴った。

「最後のはオーバークイルって奴では……」

「こっちは命狙われてるんだ。情けなんてかけてる場合じゃねえよ」

「そうなんだけど……」

そうなんだけど、彼の顎の骨と歯を砕く必要はあったのだろうか。

僕らはとりあえず彼らを縛り上げ、装置を校舎の隅に隠した。

そして普通に車に戻る。

そして頭を抱えた。

「ああああ!!」

「ど、どうした!?!」

「今、凄く飛んでもないことが起こってたのに僕普通にしていって、今その恐ろしさっていうか異様に気がついたっていうか……」

「……なんだそんなことか。よくあることだぜ」

そんなことって。ここ本当に平和で名高い日本だよな。

実はバングラディッシュに来てましたとか言われても僕は特に驚かない自信がある。でもちよつとは叫ぶかもしれない。

「……やっぱり本当なんだ。ルナがやってることって」

「さっきのでもう決め付けかよ。はえーよ」

「でも、何故か僕にはルナがしてるとしか思えないんです」

何故だろう。何故かは分からないけどそう僕の本能が囁く。

彼女はこの町の人を殺そうとしていると。

「そんなしょぼくれたって何も始まらねえ。お前は今、奴を止めてるんだ。止めてやってるんだ。そう思ってる胸をはれ」

彼女はそう快活に笑うと僕の背中を叩いた。強く。

痛くてヒリヒリして、水を吸った服が少し冷たいけど、何故かそれは暖かった。

二十七夜

僕は地下にいた。慣れないガスマスクが息苦しいが下水の臭いを嗅ぐのはごめんなので我慢する。

三度目になるその作業を僕は見守る。

彼女は薄暗闇の中、ひたすらノートブックのキーをタイプしていた。

地下のトラップもジャミングによって影を潜め、単純なワイヤートラップくらいしかなかった。

「よし、これでオーケーだ」

「……さっきから思ってたけどあっさりしてるね」

「お前が寝てる間、柳川と一緒にいた間、何もしてなかったわけじゃない。ちゃんと事前準備を怠らなかったからこうやって楽できる」

「耳が痛いなー」

ノートブックをしまい、元来た道に戻る。

地下の壁に白いチョークで道しるべを残したので迷うことも無い。

最初はそんなことをしなかったので大いに迷い、時間をロスした。地上にはジャミング装置があるおかげで携帯もGPSも使えないのだ。

迷いに迷いまくって本気で泣きそうになった。

僕はマンホールからだらしなく垂れ下がった梯子を昇り、地上に出る。じめついた空気とは違う酸素に肺が満たされる。

空は既に白み始めていて、もう少ししたら登校する生徒や会社に向かう会社員で道は溢れそうだ。

事態は実にスムーズにいつている。

拳銃を撃たれる機会は思ったより少なく、大抵は撃つ前にナナシさんにほごられるか手を上げると叫んで終わっていた。

「あとどれくらいだっけ？」

「次で最後、だ」

彼女はくたびれながら、這い上がる。

僕は基本立っているだけ。しかし、彼女は常に神経を尖らせ走り、敵と戦っていたんだ。疲れて当然だ。

そしてそれは同時に自分が無能であると知らしめてしまっていて、酷く僕を落ち込ませる。

だけど事実、僕ができることはなにない。

僕らはジープに乗り込むと荷物を置いて、地図に書かれた丸にペケを入れた。

「本当だ。残りはあと一つだね」

病院、幼稚園、市営住宅、小学校に中学校。

多くが人の集まる区域だ。

「次は……駅、か」

彼女はそう呟くと車のキーを回し、車を走らせた。僕は慌ててシートベルトをつける。

「ねえ、僕思っただけど」

「なんだよ、藪から棒に……腹でも減ったか？ リュックにカロリーメイトあるから勝手に食えよ」

「あ、いただきます……じゃなくて！」

といつつも僕はリュックからカロリーメイトを取り出す。うむ、チーズ味とはよく分かっている。

「んじゃ何だよ」

「とりあえず前見て運転してね！」

彼女は前を見ながら聞く。僕はカロリーメイトをぼろぼろこぼしながら前を見る。

ううむ、水が欲しい。

「で？」

「いやさ、学校の貯水タンクに毒を仕掛けてたとして、それで町中の人間を殺せるとは僕には到底思えないんだけど……」

それに効果的じゃない。通報されれば終わる可能性もあるし、僕らで止めることができるほど弱いシステムの上に成り立っている。

「あー、それな」

彼女は一瞬口ごもり、横目で僕をうかがう。そして何か考える素振りをした後にいった。

「それは元々の目的が別にあつたからだ。本来の目的は脅しっつーか……で、まあ真の目的はどうやら浄水場の爆破にあつたらしい」

「……それってどういうこと？」

「つまり貯水タンク云々じゃなくて浄水施設の根元から水を汚染することと町に仕掛けられた爆弾の起爆が目的ってことだ。ハックしてるところで妙なプログラムがあつてな。調べてみたらどうやらそういうことらしい」

「……僕そんなこと聞いてなかつたよね」

「……ああ、いつてなかつた。だけどこれはさっき分かつたことだ。それにお前がこの事実には耐えられるかあたしには疑問だつた。だから少し時間を置いて教えようと思つてたわけだ」

ナナシさんは声のトーンを落とし、申し訳なさそうに僕にいう。
耐えられるかどうか。

心のダメージ。

姉さんと僕の。

それは正しいことだと思つ。僕も逆の立場ならそうするだろう。だけど、それは大きく意味が変わってくるんじゃないだろうか。

僕とルナの意味が。

彼女と僕の関係は、本当になんだつたんだろう。

僕はそれを聞くこともできず、ナナシさんもそれを聞かせる隙を与えなかつた。

僕らの暗黙の了解によつてただ黙っているしかなかった。

駅から少し離れた場所に着いた僕らは状況を伺つ。

辺りにはいつもよりも多くのルナの使いがいる。数は五人。

マンホール周辺を取り巻いている。

「結構ガードが固いな」

「とりあえずどこかに装置おいて起動させよう」

「いや、そんなことをしたらあたしらがここらへんにいるってことがばれちゃう。ってことで今回はお前にも手伝ってもらおうぞ」

「……僕に彼らをぶち殺せと?」

僕のCVはいつから大塚明夫になったんだ。

ナナシさんは苦笑しながら首を横に振った。

「別にお前にそんなこと求めちゃいねえよ。できたらやってほしいとただけだな。お前にはこれを使ってもらおう」

彼女はそういつてリュックからミニカーのラジコンを取り出した。

「これをあいつらのいる場所まで進ませたら真ん中の赤いボタンを押せ」

凄く嫌な予感がする。

「で、でも」

「大丈夫大丈夫、死にはしないから」

「怪我させるレベルですか!？」

「任せたぞ」

ナナシさんはそう言い切り、回り込むためかどこかに駆ける。

少し躊躇いながらも仕方なくラジコンを動かし前に進ませた。

四駆のラジコンは意外と早く彼らの場所につく。彼らは何だろうと集まる。

「……ああ、なむさん!」

ぼち。

ラジコンから強い光と音が放たれ彼らの動きを止める。

そして影から飛び出したナナシさんはその間に割り込み、殴り飛ばす。

瞬時に三人を蹴り飛ばし、二人の溝にパンチをお見舞いした。

瞬殺。

テクテクと歩いてきて彼女はいった。

「な?」

「確かに怪我しなかったね……ミニカーでは!」

「嘘はいつてねえよ。それに今は不足の事態だぞ。あたしだって本当は人なんて殴りたくないんだ、うん」

そういつて彼女は笑い、リュックを担ぐ。

小さな鼻歌を歌いながら。

こいつ絶対楽しんでるな。そう確信する僕だった。

二十七夜 裏

少し時間は戻る。

少女は黒いドレスに身を包んでいた。

窓から町の風景を眺める。まだ暗く、しんとしていて聞こえる音は雨粒の地面を叩く音だけ。

雨の音はいい。

静寂でありながら静寂でなく、常にアトランダムで、飽きが来ない。

微笑むと少女は身を翻し、旅行鞆を玄関に運ぶ。洗面台に向かい、鏡を見て化粧の乗りを見る。

一応、自分を崇拜する下僕どもには銃はあまり使わないように言っておいたがどうだろうか。

恐らく使うだろうと彼女は思った。

人は力を持ったら使わずにはいられない。

彼にさえ害が及ばなければもうどうなるかと関係ない。

この段階にまで進めばもう彼女は必要ないといえる。

携帯にメールが入る。内容は別働隊がジャミング装置を発見したという内容だった。

破壊するようと一言指示を送り彼女は携帯の電源を切る。

そして玄関に向かい靴を履き、扉に手をかける。

ああ、そうだ。

少女は振り向き、誰もいない廊下に目を向ける。

「いってきます。優一」

彼女はそう呟いて扉を押しした。

マリンプルーの空からは雨粒が落ちてきている。深い湖が頭の上にあるような奇妙な感覚。

少女は透明のビニール傘を差し、道を歩く。

ここから駅は遠くない。

今日自分は死ぬ。

みんな死ぬ。

彼もアイツも薫も全てが死ぬだろう。

等しく全てが。

言葉を噛み締め、歩く。

彼と歩いた道を眺めながら、世界が自分だけになったような幻想に包まれながら。

頬を擦り、微笑む。

駅に着くと下僕達が少女を待ち構えていた。

「お待ちしております！」

「うん」

「しかし、本当にアイツは町中の人間を毒殺しようとしているのでしょうか？」

「そうだよ。だから君達に止めてもらわないと。期待してるんだよ」

「は、はい！」

「終わったら帰って学校行っていいよ」

「了解です！」

彼らは何かに酔ったように叫びを上げた。

少女は内心気分が悪かった。

彼らは自分に酔っている。

何者にもなることのできなかつた自分が物語の主人公になったかのようなそんな幻想に。

それはそれで幸せなのか。

私はそうは思わない。

誰かに操られ誰かの言うことを聞いて生きるなんて耐えられない。

彼以外の人間はやはりこんなものか。

少女は地下に消えた。

手すりを降りる。そして携帯を使い、命令文を送る。

次の瞬間、地下の白熱灯が光り、道を照らした。

彼女は奥へと向かい、行き止まりにつく。

雨が降っているからか水の勢いが激しい。

壁についた装置は無視して、隅にあるドアノブを捻る。

中には太い配管とメーターがあった。

彼女は室内のライトをつけて埃を被ったパイプ椅子を出すとその場に座った。

何人死ぬだろうか。

百人、千人、いやもっとかもしれない。

少し目を瞑り想像する。

「うん」

何も感じない。

山のように死体が積まれているところを想像しても何も浮ばない。

何の感情も抱かない。抱けない。

だって私はその時、既に完結してるから。

少女は一人、溜息をついた。

「優一まだかなあ……………」

最大の目的は…………彼を殺すこと。

二十八夜

僕はマンホールの蓋を開け、（ナナシさんがひょいっとやった）近くの電柱に縄をつける。

腰の周りに縄を巻きつけ、壁を蹴りながら降りる。

不思議なことに下は明るかった。濁った水が流れ、カビ臭い床が見える。

「……妙だな」

「つていうと？」

「あたし達が今までいたところは明かりなんてついてなかった。もしかすると誰か先にここに来ているのかもしれない」

「それは……姉さん？」

彼女は僕の頭を撫でて、微笑む。

「元、だ。柳川の可能性もある。しかし、どうということだ？ アイツが自分から出てくるなんて異常事態だぞ」

僕らは注意しながら進む。電気は来ているようだけど、畏は相変わらず作動していないようだ。

ナナシさんはいつも以上に気を張り、進む。足音一つ立てないのは流石だ。

目標には直ぐにたどり着いた。

横の壁にはいつもと違い、数字だけではなくVXと書かれていた。ナナシさんは遠隔操作でジャミングをかけ、電波を遮断させる。

そして機械自体に有線し、カタカタとキーを叩いた。

ノートブックの猫の背景の上に黒いウィンドウが走る。

僕はその間、暇なので辺りをうろつく。そして隅にドアを見つけた。

「オイ、それには触るな」

ナナシさんは鋭い視線で僕を射抜く。そして近づくと自分の髪の毛を抜いてドアノブに近づけた。

「髪の毛が張り付いてる。つまり微量な電気が流れてるってことだ。トランプかなんかだろ、触らないに越したことはない」

「ああ、うん」

彼女は戻るとまた画面と睨めっこを続けた。

なにやら重々しい空気だ。僕としてはこれで最後だと少し嬉しい気持ちがある。

暫くして終わったらしく、彼女はコードを引き抜くと首を傾げた。

「やっと、終わったんだね」

「そう……なんだが。なんか釈然としない」

「どういふこと？」

「さっきの上の連中を思い出せよ。何でここだけ嚴重だったんだ？ それにここだけ明かりがついているのもおかしい。嫌な感じがする」

「そういえばそうだ」

その時、ナナシさんのノートブックがビープ音を上げた。

彼女は直ぐさにそれを開き、画面を見つめる。

「な、なんでジャミングが全部解けて……いや、装置が全てアクティブになってやがる！ そんな、あたしはちゃんと書き換えたぞ！」

「ど、どうしたの？」

「そこどいてくれ！」

汚れも気にせず彼女は地べたに座り込み、キーを叩く。瞳は信じられないものを見たというような顔。

もう一度装置に有線し、何か操作した。

そして叫んだ。

「……………ふざけてやがる！！ そんな、そんなふざけたことってねーだろ！」

「ど、どうしたの？」

ナナシさんがここまで取り乱すってどういふことなんだろう？

彼女は何度もキーを叩き、流れる汗を手で拭う。

僕もその異様な空気に何かとんでもないことが起こっているので

はないかと鼓動が高鳴る。

そこで。

声が聞こえた。

「事実は常にそこにあるんだよ。それを認識するかしないかの違い」
僕らはそちらを振り向く。

ルナが扉から出てきていた。

「あ、あたしが相手してたのは仮想OS上のシステムか」

「yes」

「全てがハッキングされて初めて本当のシステムが稼動する……」

「yes」

「そしてその目的は浄水場や爆破じゃない」

「yes」

「じゃあ、なん

まさか……お前、VXって！」

「yes」

ルナはそういつて微笑んだ。指はカタカタと動き、青い瞳は真っ直ぐ僕らを見つめる。

場所が下水じゃなくて舞踏会か何かだったらそれは本当に美しい
つたのかもしれない。

だからこそそれは異常で、だからこそ異質で。

だからこそ醜く、美しかった。

僕は何か圧迫されたような気持ちになって息を呑む。

何が起こってる？

状況が掴めない。

ナナさんは放心したような顔で膝をつく。

「……ル、ルナ！ 何をしたんだ」

「優一、効率的に人間を殺すには何が一番だと思う？ ……爆弾は
あまり効率的とはいえない。水に毒を混ぜるのも飲まなければいい
だけ。では何を選択すべきか、わかる？」

彼女は僕らの横を通り過ぎ、くるりと振り向く。

爬虫類のような瞳がじつと僕をみた。

「何が……いいんだよ！」

「もしも……もしも、学校や病院、駅のスプリンクラーから毒ガスが出てきたらどうする？ どうなると思う？ そういえば今日は雨なんだね、優一」

「……そ、そんな」

意味が分からない。理解ができない。

彼女は何をいつている？

言葉を発しているのか？

「……柳川、町中に毒を撒いて今まさに通勤中の人間、学校にいる人間をお前が殺していると仮定して、だ！ お前は どうするつもりだ！ 大多数の人間を殺すような毒、お前だって無事じゃすまねえぞ。ここは駅、それも下水道だ。汚染した水がここにも入ってくる！」

「頭悪いんだよ。よく考えるんだ。加水分解ができて、かつ殺傷能力の高い毒は？ 日本でも以前騒がれたんだよ。ああ、でもあれはタブンだから違うのかなあ」

「お前、そんな」

「目を閉じれば聞こえるよ。助けの音が、悲鳴が……全ての人間が神に許しを乞う。あたしの嫌いなこの町が、優一を救わなかったこの町が消えていく」

ナナシさんは床に手をつき、嗚咽を漏らす。

「何を言ってるのか、何をしたのか分かってるのか！？ 何人……」

何人の人間が死ぬのか！ どれだけの人間が死ぬのか！」

「知ってるよ。アンタも自分でそれがどこで起こるか見てきたんだよ」

そつだ。僕らは見てきた。

小学校、中学校、高校、大学、病院、幼稚園、そして駅やデパート、老人ホーム、市営住宅。

あらゆる施設を確かに見てきた。その近くにおいて、僕らが解除してそれが原因で人が死んでる。

人が、死んでいる。

山のように。

今、現在。

僕らが原因で。

「そんなに絶望しなくていいんだよ。自宅にいる人は死なない、外にいる人も雨が分解するから死なない、そして水の多いここにいるあたし達も死なない」

でも……他の場所にいる人は？

登校してる生徒は？ 病人や老人は？ 通勤しようとしている会

社員は？

彼女は笑う。

綺麗に華麗に美しく。

ソプラノボイスでクスクスと。

僕を見て、嬉しそうに楽しそうに笑う。友達の冗談を笑う女の子のように。

そして彼女は言った。

「優一、それ以外は死ぬに決まってるんだよ」
全てが碎ける音がした。

二十九夜

「わああああああああああああああああ！！」
アイツは頭を抱え叫んだ。見開かれた瞳から涙が濁流のように溢れる。

「始まったんだよ。優一、一緒に賽の河原を歩こう。上では全ての人間が糸の切れた人形に変わってる。あたしただけでそこを散歩しよう」

そう柳川はいい、カツリと近づく。

あたしは即座に優一の手を掴み室内に奴を投げ込む。そしてドア越しに強く叫んだ。

「聞け、姫野！ 絶対ここは開けるな！ 何があっても絶対だ！」

「そんなことしても無駄なんだよ」

「無駄かはどうかはあたしが決める！」

あたしは振り向きアイツと相對する。奴は首を傾げ、微笑む。

何故、奴は笑ってられるんだ。

何が起こっているか理解できているはずだ。できないほど馬鹿じゃない。

「……優一の心は白いキャンバスなんだよ」

「あたしはお前を許さない！」

拳銃を取り出し向ける。柳川はそれを一瞥することもなくあたしを真っ直ぐ見た。

何の感情もそこにはない。ただの空洞。

こいつには心が……恐怖がない。

「白いキャンバスに傷という名の絵の具を塗っていくと優一というキャンバスは塗りつぶされていくんだよ。でもそこに誰かがバケツで白い絵の具をぶちまけたらどうなると思う？」

「なんの……話だ！」

「あたしはそこにまた白いキャンバスが出来上がると思ったんだ」

「……お、おまえ」

「そして今現在、彼は白く塗りつぶされている」

「そんな馬鹿げた理由の為に」

何千という人を殺すのか？

アイツの記憶を消す為に、白紙に戻す為に。

その為だけに人を殺すというのか。

それだけのために。

一人を救う為に。

あたしは吐き気を覚え、片手で口を押さえる。

正気の沙汰じゃない。

考えたとしてもそれを実行しようとは誰も思わない。

思ったとしたらそれは人じゃない。

悪魔だ。

奴はそれを見てクスリと笑った。

「お前は……何を考えている！」

あたしは恐怖を誤魔化す為に強く叫ぶ。

得体の知れない化け物を目の前にしたあたしは強く叫ぶ。

奴は平然とあたしにいった。

「優一のこと」

「何でこんなことを」

「優一のため」

「それだけの為に……？」

「それだけのために」

はつきりと奴はいう。そこには何の感情も籠っていない。

まるで人形のように。

人の形をした何かのように奴はいう。

柳川は背中を見せ、ゆっくりと歩く。

「これは優一への罰であり救いであり、あたしへの罰であり贖罪なんだ」

「……てめえ、神にでもなっただつもりか！」

「……違うよ、あたしは神なんだ」

「こつち向けよ！ お前は生かしておかない。絶対にあたしが……アイツの為に、今も苦しんでる誰かの為に、誰かの家族の為に、今を助けを求めている誰かの為に、殺してやる！」

「今まで、時間が掛かったなあ。だけど、全ては報われたんだよ」
報われた？

奴は今そういったのか？

人を殺しておいて、虫けらのように人を殺しておいて、奴は報われたといったのか。

平然と当たり前のように。

あたしは奴に近づくと頭に銃口を突きつける。

それでも奴はあたしに振り向かなかった。

「……泣いてるんだ」

「泣いちゃおかしいか！」

「何で泣いてるんだよ。自分が殺した原因にもなってるから？ 自分が無力だったせいで何人も殺してしまうから？」

「そんなこと知るかよ！！ 分かるかよ！ 人間は……悲しいから泣くんだ！ 心があるから泣くんだ！ 辛いから楽しいから、感情があるから泣くんだよ！」

「へえ、そうなんだ」

「泣けねえお前は死んじまえ！ 人を殺して何にも感じないお前は！」

あたしの人差し指に力が籠る。

奴は床に注射器を落とした。注射の中は何かの液体が入っている。

そして奴はポケットから携帯を出した。

「動くんじゃないえ！」

「嫌」

見せ付けるように手を横に真っ直ぐ伸ばす。

「優一を殺したくなかったら、銃を捨ててそれ自分に打って」

「ふざけてんのかためえ！」

銃を握る力が熱くなる。グリップに汗が乗る。

奴はそれでも平然と喋る、答える。

「あたしがここで携帯のスイッチ押ししたら、優一はどうなると思う？
あたしが何のためにあそこを開けたままにして出てきたと思う？
あんたがああの部屋に優一を入れることを想定してなかったと思う？」

「なっ……！」

あたしは柳川に銃を突きつけたまま後ずさり、ドアノブを捻った。開かない。

ドアノブすら回らない。

「柳川……お前！」

「内側からなら開かれるよ。今の優一じゃ無理だろうけど」
確かに奴は今もドアの向こうで叫んでいる。強く何かを訴えるように。

願うように、救いを求めるように。

「……お前は何が望みなんだ！」

「全てを望んでるんだよ、優一の全てを。それ以外は全て無駄でゴミでつまらなくて取るに足らないこと」

奴はゆっくり振り向き笑う。

どうする、と。

首を傾げて笑う。

何を選択するのか、と。

「……アイツを傷つけて、苦しめて、全てを殺して、アイツの感情すら、記憶すら殺して……本当にそれでアイツが救われるとも思ってるのか？ アイツに何も思わないのか!？」

「特に何も」

奴は一度目を瞑り開いてそういった。

あたしの手から拳銃が零れ落ちる。重い音が地下に木霊する。

しかしそれも轟々となる地下水の流れの前では小さな音だった。

あたしはアイツの足元に落ちた注射器を拾う。透明の液体が入っ

たそれを腕に近づける。

手が震え、汗が出る。

奴の目を強く睨みあたしはいう。

「柳川月……お前は天才なんかじゃない。神なんかじゃない」

お前は化け物だ。

血管を液体が滑り、全身は鳥肌を穿つ。

足の力は抜け、倒れる。呼吸が熱く、喉が焼ける。

天井がぐるぐると回った。

柳川はあたしを人形のような瞳で見下ろした。

ああ、あたしは尻餅ついていたのか。

「人は対処できないものを。自分以上のもの、自分達以上のものを見た時に怪物と呼ぶ。だけどそれは時にはこう呼ばれるんだ」

神と。

奴はそういい微笑む。

「……神だから、何やってもいいの？ 人を……人の気持ちを弄んで、いいの……か？」

「まだ喋れるんだ」

「優一は……誰かがどうにかしていい、存在じゃない。誰かが、守るべき……存在、だ」

「そついえば聞きたかったんだよ。あんたは優一のこと好きだったの？」

奴はそういい首を傾げる。少し癖のある髪の毛が揺れた。

あたしはその言葉に笑った。

だってそうだから。

何を分かりきったことをいうんだ。

好きだから。

好きだから守りたいんだ。

好きだから心配なんだ。

好きだから笑顔が見たい。

好きだから。

「ああ、あたしはアイツが……アイツが大好きだ。無邪気に笑って、くだらないギャグを言って、凄く危なっかしくて脆いアイツが……大好きだよ」

アイツは覚えていないかも知れないけど初めてあつた頃から、隣り合つたあの時からあたしは。好きだった。

柳川は立ち上がり、あたしの落とした拳銃を拾う。

「そうなんだ。だろうと思つた」

「はははは、だろ？」

奴はセーフティを調べ、マガジンを抜いて弾薬を確認する。

「でもアンタはここで死ぬんだ」

「あたしは……死なない」

「今、あなたの状況分かつてる？ それともエンドルフィンがドバドバ出て馬鹿になつてる？」

「あたしのじいさんがさ……」

「うん」

「……いうんだ。武器は常に奪われること……を想定しなくちゃいけない、つてさ」

「なに」

奴は目を見開く。

そしてバンと鈍い音がした。

今度は柳川月の手から銃が零れる。

ガシャンと鈍い音。

あたしはもう一度それを引く。

また乾いた鈍い音がして奴がくるりと踊る。

「だから……あたしは武器を必ず、二つ持つことにしてるんだ」
どさりと床に転がり奴はいつものソプラノボイスでいった。

「それは名案……なんだよ」

それ以降奴は喋らなかつた。

三十夜

あたしはゆっくりと立ち上がり、奴の手元の拳銃を蹴飛ばす。そして携帯を調べた。

「だけど。」

それは携帯じゃなかった。

ただのボイスレコーダー。あたしはそれを再生する。

「…… Congratulations!」

そう柳川の声が小さなスピーカーから聞こえた。

「まさか……」

さっきコイツはなんていった？

あたしへの罰であり贖罪なんだ？

贖罪。

罪を償うこと。

まさかコイツは最初から死ぬ為に。

優一を救い、ゼロにする為に。

あたしを使い、自殺する為に。

全てを仕組んだというのか？

「……馬鹿げ、てやがる」

だとしたらいつから……こいつはいつからそれを思っていたんだ？

最初から死ぬために生きていたとしたら。

最初から優一に命を捧げるために生きていたとしたら。

コイツは正真正銘の化け物だ。

けどあたしにはそれが本当にそうなのか知る術はない。もしか

したら途中でただ思いついただけかもしれない。

だがあたしがそれを考えることをコイツも予想していたはずだ。

でなければこのボイスレコーダーの意味がない。

「だとしても……許されることじゃねえ」

犯人が死ねば、今死んでいく、消えゆく魂は救われるのか？

あたしはそうは思わない。

ではどうしたらいいというのか。

「ああ、わかんねえよ！ くそっ！」

どうやら奴の渡した注射器の内容は覚醒剤くさい。体が奇妙な感じだ。

フワフワしているようでしっかりと地についているような感覚もある。

でも。

でも終わったんだ。

あたしは柳川の銃を拾い、壁伝いにゆっくりと歩く。

「頭いてえ……」

一歩一歩が重い。体の息が熱い。

アイツはこんなキツイもん毎回喰わされてたのかよ。

そりゃ、トラウマになる。

これが終わったらどうしよう。警察に連絡して……情報封鎖あるだろうな。

いや、そうじゃない。

アイツとどうしよう。

どこか遠くに旅行に行こう。動物は……連れて行けないな。

知床に行こう。

一度あそこの動物を飼いた……じゃなくて見たかったんだ。

アイツは知らないしあたしも知らない。

丁度いいだろう。

あたしは前のめりに倒れそうになる。しかし手をつけてこれを防ぐ。

「はっはっ……」

くそ、遠いな。あんだだけの距離が遠い。

まるで遙か遠くにドアがあるように感じる。

あたしは床を立ち上がるうとして。

止まった。

「ああ、そうか……クソ、そうだったな。そうだったよ。忘れてた。……あー、クソ。 ついに好きだって言えなかったなあ」

あたしの視界に地面が急加速し、視界は途切れた。

暗い。

でも目は慣れていた。

ここはどこだろう。僕は何をしてるんだろう。

僕は首を左右に回す。

目が腫れぼったいことに気がついた。瞼をこする。

「涙？」

僕は立ち上がり、目の前にある何かに気がつく。

目を凝らしてみたところ、どうやら倒れたパイプ椅子らしい。

僕はその近くにある丸い筒状のものを取る。

ビックな方でもスモールの方でもないライト。

パチリとスイッチを押す。明かりがついた。

ライトで辺りを照らす。どうやらここは何処かの部屋らしい。太

いパイプやメーターがあり、壁際をそれらがのたうっている。

僕は扉を見つけた。

ノブに手をかける。

そして何故か心臓がぎゅっと痛んだ。何故か開けちゃいけないよ
うな気がした。

誰かにそういわれたような気がした。

大切な人に言われたような気がした。

「優一、そこに……いるのか？」

くぐもった声が聞こえる。どこかで聞いたことのあるような声。

そういえば僕は優一って名前だったような気がする。

「誰……？」

「あたしに決まってる。怪我してるんだ開けてくれ」

「でも開けちゃいけないって言われたんだ」

！

僕は声とも叫び声ともつかない音を上げた。冷静なもう一人の僕が何故泣いているのだろうと泣き叫ぶ僕を見つめる。

僕はただ大切な何かを砕かれたような。

半翼をもがれたような。

そんな辛く悲しい歌声を上げていた。

ナナシさんという女性の首を手を持ち、天井を見上げて泣く。

腹に抱きかかえ、優しく壊れ物を扱うように抱きしめる。

頬を寄せ、嗚咽を漏らす。

吐きながら、目を真っ赤にして、子供のように声を上げる。

悔しそくに笑うその顔を抱きしめて。

綺麗で。

鋭い瞳で。

ショートカットの彼女の首を抱えて。

彼は泣いた。

三十一夜

彼は胸を押さえ、叫び声を上げる。

現実を否定するために。変えようのない現在を拒否するために。込められた指の力に彼の服はしわを作り、彼の胸を中心に渦ができてあがる。

それはまるで彼の心を表しているかのように捻じ曲がり、強く軌跡を残す。

彼の体を雨粒のように記憶が駆け抜け、地面に溶けるようにして消えていった。

「やめて……よ！ 消えたくない！ 忘れたくない！ ナナシさんとの思い出を……僕らの記憶をもって行かないでよ！」

彼は叫ぶ。

我が子のように少女の頭を抱え、咆哮を上げる。

しかし、その願いは誰にも届かず、彼女の笑い声を大きくさせるだけだった。

「あははははは。だーめ、だめですよ。優一さんはこれから全部全てひっくり返して忘れていくんです。この人の記憶も柳川月の思い出も！」

薫は首のない死体を起すと手を使い、隅に倒れている金髪の少女を指差した。

それをみた少年は目を見開き、空っぽになった胃の中身をぶちまける。

何故悲しくて辛いのか分からない。

ただどあそこで倒れている彼女もまた自分にとって大切な人。

それだけは分かる。

自分のことは分からなくて、何でここにいるのかわからなくて、何で辛いのかもわからないけど。

それだけは分かる。

「最初、優一さんを人質に取った時は肝を冷やしましたけど、今じや私の一人勝ちです。世の中、分からないですよね」

そう彼女は笑い、首のない死体の背中に刺さったナイフを引き抜くとその腹に突き刺し、横に引いた。

支えを無くした腸がどろりと床に零れ、湯気を上げる。

少年は力なく腕を持ち上げて、口を動かす。

しかし、その“やめて”という言葉は乾いた悲鳴にしかならなかった。

彼は鼻水とも胃液とも涙ともつかないもので顔を汚し、死体を弄ぶ彼女の手を取った。

血油で滑る。

しかし、彼は手を握る。弱々しく儂い力で握る。

腕を掴まれた薫はにっこりと微笑む死体を雑に放り、彼の頬を拳で殴った。続けて倒れ掛かる彼の腹を殴る。

手をついて、肩で息をする彼にゆっくりと優しくいった。その手にはナナシと呼ばれた少女の首。

「これがそんなに大切ですか？ もう覚えてないでしょう？ 記憶の中は既に何も残ってないはずですよ。なのに……何故これを執拗に守るんですか？」

「返し……て」

彼女を。

「気に喰わないですね」

彼女はそういうと横の下水に首を放り込んだ。

彼は自分から下水に飛び込もうとするが薫に髪の毛を掴まれていて動くことができない。

「離して、離してよ！ 僕の大切な人がどっかいつちゃう！」

「あははははは。優一さん、あれはもうただの肉ですよ？ なーんにもあの中にはない。今の優一さんとの違いは生きてるか死んでいくかの違いくらいですね」

彼の耳にはその言葉は届かない。

ただひたすら不条理を呪うだけ。

その様子に薫は首を傾げた。

「……………おかしいですね。とつくに全ての記憶が飛んでるはずなのに、今といい柳川さんの死体を見たときといい不思議です

ああ、煩い！ もう！」

彼女は髪を掴んだまま壁に彼の頭を叩きつける。わめいていた彼は赤い鮮血と共に大人しくなった。

手についた彼の髪の毛を払うと彼女はいう。

「やっと静かになりましたね。うーん、セオリー通りならもっと強い刺激を与えないといけないんですけど……………どうしましょう。やっぱり柳川さんの首も取らないとダメですか？」

彼女の口端がきゅっと歪む。その言葉に彼は力なく薫の足首を掴んだ。

「や……………め、て」

「そうですね、止めておきましょう。私もアレ、正直に言うと嫌なんですよ。手が汚れますし、臭いは酷い。それに第一面倒です。だから……………」

「だ……………から？」

「優一さんのパーツ、くれますか？ 両手両足全部、お姉ちゃんにくれますか？」

熱っぽい瞳で彼女は彼を見つめ、微笑む。手には少し刃の欠けた鉞。

「ぼくの……………からだ」

「ええ、そうです。この際、優一さんの手も足もいらなかなあーって思うんです。確かに優一さんに抱きしめてもらえないですし、一緒にお散歩もできなくなっちゃうんですけど、私が優一さんの身の回りの世話をするっていうのも面白いんじゃないかなあって思うんですよ」

そういつて彼女は顔を赤くした。

彼はまた吐く。体を汗で濡らし、涙を流しながら吐く。

僕が一体何をしたっていうんだろう。

僕はそこまで酷いことをした人間なのだろうか。

これはなんの罰なんだろう。

そう思いながら彼は泣いた。

頭を地面に何度もぶつけ、血飛沫を上げる。

「またそうやって泣いて傷つけて……。自分を呪うのも構いませんが、いい加減やめてもらえませんか？ ベットの上げじゃないんですから。それにいくら泣いたところで誰も助けてくれませんか？ もう、彼女も柳川さんも死んでるんですから。うふふふ」

彼は顔を上げ、どこか空虚な瞳で彼女を見る。顔を流れる血に目もくれない。

薫は嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、始めましたね」

「……………あなたは誰、ですか」

「忘れちゃったんですか？ 私はあなたのお姉ちゃんです。そしてこの人たちは悪い人で優一さんを陥れようとしていた人です」

「そう……………なんだ」

彼は倒れている死体を見て痛そうに眉をひそめる。

「お姉ちゃんは優一さんを助ける為にここに来たんです。私達愛し合っていたんですよ？ 覚えてないんですか？」

「……………わかん、つつ」

頭を押さえ、彼は目を閉じる。頭の奥をガツンと殴られたような衝撃。

何故、自分は頭から血を流しているんだろうか。

何か矛盾しているような奇妙な疑問が湧いて出る。

「しつこい記憶ですね。あなたはお姉ちゃん以外の記憶は捨てて下さい。それ以外はいらない。柳川月の記憶も、ここでの記憶も、さんの記憶もありません」

彼はそこでぴたりと動きを止めて、見下ろす薫を見た。

「さんって誰？」

「　　さんは　　さんに決まってるじゃないですか？　その人は絶対に思い出さなくていいですよ。一番悪い人ですから」

　　さん。誰だろう。

　　僕はそんな人の名前を知らない。

　　記憶にない。

　　だけど。

　　何故、こんなにも涙が出て辛いと感じるんだろう。

「何で、嘘をつくの？」

　　その急な問いかけに彼女の顔が歪む。

「嘘……　　って何がですか？」

「彼女は　　さんって名前じゃない」

「……　　い、いえ。確かにそういう名前だったはずですよ」

　　首のないあの女の名前は確かにそうだった。

　　私が間違えるはずがない。

　　では何故。

「嘘をつくってことは、あなたが一番悪い人だからだ」

　　壁に手を当てながらゆっくり立ち上がる。

　　一步一步噛み締めるように近づく。

「わ、私は一番いい人ですよ？」

「じゃあ、何でその人は倒れてて、その人は首がなくて、あなたは血まみれなんですか？」

「そ、そんな柳川月なみたいな目で私を見ないで下さい！　アイツ

みたいなこと言わないで下さい！」

「何でその女性はお腹がぐしゃぐしゃ何ですか……？」

　　彼女は両手のナイフを床に捨て微笑む。

「……これはお姉ちゃんがあなただを守る為に」

「そんな馬鹿なことがあるか……！」

「今度は　　さん？　　な、何がどうなって……？」

　　もしかしたら彼の記憶の仕組みが変わったのか？

　　そうだとしたら彼は一生手の届かない存在になってしまう。

誤魔化しが利かない存在になってしまふ。

そうなら……彼は私を好いてくれるだろうか？

そう考え彼女は首を振った。

そんなことは嫌だ。

「僕ね、ある人に言われたことがあるんだ。誰だか忘れちゃったけど……その人は優しく強くて僕のヒーローだった」

「ゆ、優一さん、あなたは誰も傷つけることはできない優しい人でしたよ？」

少年は手負いとは思えない流れる動きで薫に近づく。

薫はそれに拳を振るい応戦する。しかし、容易に避けられ更に接近を許す。

「大切な武器は……最後まで取っておけて」

そして誰かのナイフを……彼の大切な誰かのナイフを腰から引き抜き、彼女に振るった。

彼は力尽きたように地面に尻餅をつく。そして自分に起こったことが理解できないでいる彼女にいった。

「もう一人は……辛い時は泣けばいいって、教えてくれた」

だから僕は泣くんだけ。

分からないけど。

辛いから。

苦しいから。

泣くんだけ。

「そんな、優一さんが誰かを傷つけるなんて……そんなことって」

あるはずがない。

だって彼は私が会ったときから誰かを傷つけることができなかつた。

だから好きで……でも嫌い。

でもなぜ。

なぜ急に。

彼女は倒れ、彼は瞼を閉じた。

誰かが彼の髪を撫でたような気がした。

Congratulation yu-iti

「てんきゅー」

三十二夜

灰色の壁、沢山の人。アジア人や欧米人が忙しく歩いている。僕が僕でなくなつて、あれから一年ほど過ぎた。

あの事件……世間で言われているところの某過激派グループのテロ事件に巻き込まれたことで僕は記憶を喪失し、心の病院に一年間入院させられていた。

定期的に訪ねにやって来るナイスミドルな刑事さんや主治医が三枚の女性の写真を見せながら聞く「何か思い出したか」という言葉が僕の安否を気遣うものではなく、思い出したらぶつ殺す的な意味合いが含まれていたことに気がついた賢い僕は精神病院を脱走した。ついでとばかりに医者のカルテと僕の個人情報がつまめた封筒を盗み出していた僕は初めて自分の本当の名を、住所を知った。

個人情報といつても大した物はなくて、家の住所や家族構成、通院暦（意外と長かった）、普段の素行や心の病気のことくらいしか記載されていなかった。

「名前……ナナシじゃなかったんだ」
一度家に逃げ帰った僕は自分の痕跡を探す為に文字通り家をひっくり返した。

姉らしき人の部屋を荒らしまわっていると日記を見つけた。僕の姉は日記をつけることが趣味だったらしい。

姉の日記を読み進めると、キャッシュカードの隠し場所だけでなくその暗証番号、そしてパスポートの場所なんかも記載されちゃっていた。（ちなみに何故か姉さんのとセットであった。旅行の予定でもあったのか？）

僕は早速コンビニに駆け込み、口座からお金を引き落とすとその足で新幹線に乗り、空港のある場所。

つまり今現在いるここまでやってきていた。

脱走当初、明るかった空も今ではマジックで塗りつぶしたように

黒く染まっている。

全面ガラスばりの向こう側、つまり滑走路では大小様々な飛行機が飛んだり着陸したりを繰り返している。

途中で服を買ったのだけど、似合っているか不安だ。

そもそもTシャツとジーパンって空港じゃ浮いている感じがしないでもない。

というか激しく浮いている気がする。

日本のどこかのお土産らしい饅頭を口に放り込むと僕は時間を確認する為に顔を上げた。

「むっ……」

しかし人ごみが邪魔な上に座っているせいかいまいち確認できない。

僕はコンビニで買った髪留めで伸びた髪の毛を結びながら時計へと近づく。雑貨店で買った洒落た旅行鞆も忘れない。

手元のチケットと時間を確認しようと思った矢先、子供を抱えた金髪の女性が僕の肩を叩いた。

何か英語（だと思う）で何かを聞いているのだけど僕にはまったく理解ができない。マイダーリンがどうか言われても知るか、といったかどろろは定かじゃない。

彼女の赤ちゃんが必要以上に僕の服を掴むのを離しながら、僕は脳内で通じそうな英語を検索し話した。

「……ええっと。あの、あいどんとすぴーくいんぐりっしゅー！」

目の前の彼女は笑い、流暢にソーリーという茶色い普通のサイズの封筒を僕に渡した。

何だろうと封筒を眺めた頃には姿は見えず、彼女はどこにもいなかった。

うーん。これ、謝礼かなんかだろうか。

とりあえず時間を確認し終わった僕はまだ飛行機の時間でないとに溜息をつきながらベンチに戻った。

先ほどよりもベンチを占領する人の数が多い。僕は一番隅になん

とか滑り込み、腰掛ける。

横のベビーカーのおねいさんにへこへこしながら僕は封筒を空けた。

先端の潰れた鉛弾が二つ。そして一枚の白い紙。

“Congratulation”とゴシック体で刻まれた白い
白い長方形の紙。

なんだこれ。

みたことない。

みたことない……はずだけど。

どこか何かに引っかかる。

どこかで聞いたことのある言葉。

僕は何故か苦しくなって、地面に手をついた。

息切れしたような胸の重みに目の前が霞みそうになる。

何かが頭の奥でちりつき、消えてゆく。

何かが出掛かっているような違和感。

呆然とする僕の手からころころと鉛弾が転がり落ちる。隣の女性

はそれに目ざとく気がつき、拾ってくれた。

「落としましたよ」

「あ、ありがとうございます」

「ちよつと……あの、顔色悪いみたいですけど誰か呼びましようか？」

「いや、ちよつと気分が悪くなっただけですから」

僕は愛想笑いを浮かべ、深く呼吸を吸う。動悸を抑えると、もう一度笑った。

ベビーカーに乗った赤ん坊は僕の顔を見て嬉しそうに笑う。

話を誤魔化す為にも僕は赤ん坊に微笑みかけ、その顔を覗く。

「可愛いらしい、お子さんですね」

「ええ、お父さんに会えたのがやっぱり嬉しいんでしょうね」

「……え？」

彼女はそっぴい子供をあやす。目じりのほくろが印象的な彼女は

本当に嬉しそうに子供をあやし戯れた。

片手で無意識にお腹を擦りながら。

僕は彼女を知らないしあの女性もしらない。

だけど僕は知っていて、彼女達は知っている？

僕は僕で僕じゃない。では僕は何なのか。

僕は何をしているのか、してきたのか。

僕の体は知っていて、僕の脳は知っている。

だけど僕の記憶はがらんどろ。

僕という人間は既に記憶がなくなった時に死んでいるんだ。

だから僕には関係ない。

この胸の痛みも、苦しみも。

関係ないはずだ。

ああ、頭が……………痛い。

僕は堪えようのない吐き気を覚え、席を立つ。

後ろには一瞥もくれない。後ろは振り向かない。

だって誰かが……………僕の知らない誰かが僕を見ているような気がし

たから。

冷たく熱い瞳が僕を見つめているような気がしたから。

ただ何かに逃げるように僕はトイレへと走る。

一番隅のトイレに入り、その便座に手をつく。

そして吐いた。

忘れていた何かを引きずり出すかのように吐く。

体の何処かに仕舞い忘れた記憶を思い出すかのように吐く。

まるで忘れたそれを思い出すかのように。

まるで思い出したそれを忘れたいかのように。

胃液が出なくなるまで吐いて、泣いた。

全身を汗で濡らし、歯をカチカチと鳴らしながら僕は震える。

僕自身も何故震えているのか分からない。

何に恐怖して怯えているのか検討もつかない。

何故手がここまで汗ばみ、指の先が冷たくなるのか分からない。

だけど確実に僕は知っていて僕は知らなかった。

誰かが歩く音が聞こえる。

一人のような一人じゃないようなそんな足音。

その足音は僕の個室の前で止まると扉の間に何かを差し込んだ。

それは最大の位置まで高められる。

僕の求めている人じゃない。

それだけは確かだ。

知らないし覚えてないけど……その人じゃない。

だって彼女はもう

その差し込まれた……ナイフはキンと音を立てて鍵を二つにし。

ゆっくりと扉を開かせた。

三十二夜（後書き）

終わりです。みなさんお疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4400h/>

死に至る病

2010年10月8日11時43分発行